

2.山崎津跡第17・18次(7YYMS'HY-1・S'GY-1・S'KR-1・S'RK-21地区)発掘調査報告

1.はじめに

山崎津跡の発掘調査は、桂川、宇治川、木津川の3河川が合流する北岸に計画された緊急用河川敷道路建設に伴い、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の依頼を受けて実施した。

調査地周辺は、大山崎町に所在する山崎津跡や八幡市石清水八幡宮が所在する丘陵裾部に広がる平坦地に架設された山崎橋の推定地に隣接することから、関連の遺構・遺物の検出も予想されていた。

発掘調査は、計画された緊急用河川敷道路の掘削範囲内で実施した。平成21年度には、京都府教育委員会によって範囲確認の試掘調査が実施された。また、大山崎町内で実施された山崎津跡の既往の調査から遺構・遺物が検出される範囲がおおむね把握されていた。

発掘調査は、平成22年度、23年度の2か年に及んだ。平成22年度の第17次発掘調査は、先に述べた京都府教育委員会の試掘調査地であるA地点とB地点の間に10か所の小規模調査地を設定して実施した。また、発掘調査に当たっては、関係機関と調整の上、河川敷の動物の生息環境にも配慮しつつ調査を実施した。基本的には、1区～10区間および8区～9区間において遺物包含層を検出した。

平成23年度の第18次発掘調査は、平成22年度の調査成果を受けて、包含層から多量の遺物が出土する範囲内で実施した。河川敷内の掘削を伴う工事は、国土交通省の河川の関係部局の指導により、降水量の多い6月中旬から10月中旬を除く渇水期に限定されている。そのため、平成22年度の調査地である8区～9区間を以下に示す前半期に調査し、同年度1区～10区間を後半期調査A・B区として実施した。調査の結果、前半期調査である8区～9区間において近世以降の流路跡を確認するとともに、後半期調査のA区である1区～10区間では、奈良時代の遺物とともに12世紀後半から14世紀前半にかけての遺物包含層を確認することができた。

本報告で使用した標高はすべてO.P.(大阪湾最低潮位)値である。

現地調査ならびに報告については、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会を始め関係各機関、乙訓桂川愛護会、地元自治会や近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所が負担した。

〔調査体制等〕

平成22年度(第17次)調査

現地調査責任者 調査第2課長 肥後 弘幸

調 査 担 当 者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛
同調査第1係次席総括調査員 辻本和美
同 調査員 高野陽子・奈良康正・松尾史子
調 査 場 所 乙訓郡大山崎町大山崎
現地調査期間 平成22年12月14日～平成23年2月18日
調 査 面 積 800 m²

平成23年度(第18次)調査

現地調査責任者 調査第2課長 水谷 壽克
調 査 担 当 者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛
同調査第1係次席総括調査員 田代 弘(前半期調査担当)
同 主査調査員 柴 暁彦(後半期調査担当)
同 調査員 高野陽子
調 査 場 所 乙訓郡大山崎町大山崎
現地調査期間 平成23年4月26日～平成23年6月15日(前半期)
平成23年10月24日～平成23年12月22日(後半期)
調 査 面 積 1,000m²
(小池 寛)

2. 位置と環境

山崎津跡は、桂川、宇治川、木津川からなる淀川水系の北西岸に位置する。周辺一帯の地質は、基盤岩類の山地の内縁に沿うように、上位から大阪層群からなる丘陵地帯、段丘地形が帯状に分布し、その内側に三河川による広大な谷底平野が広がっている。また、淀川右岸の基盤山地である「北摂山地」は、この地狭部で「天王山山地」を東に棘状に張り出させている。天王山山地の張り出し部の裾が描くラインは直線的で、三角形の二辺を形成する裾部には、北側裾に金ヶ原断層、南側裾に天王山断層が走行する。断層帯は急崖を成し、その下縁に洪積層(大阪層群)の丘陵帯が取り巻くが、天王山麓ではその分布は未発達である。

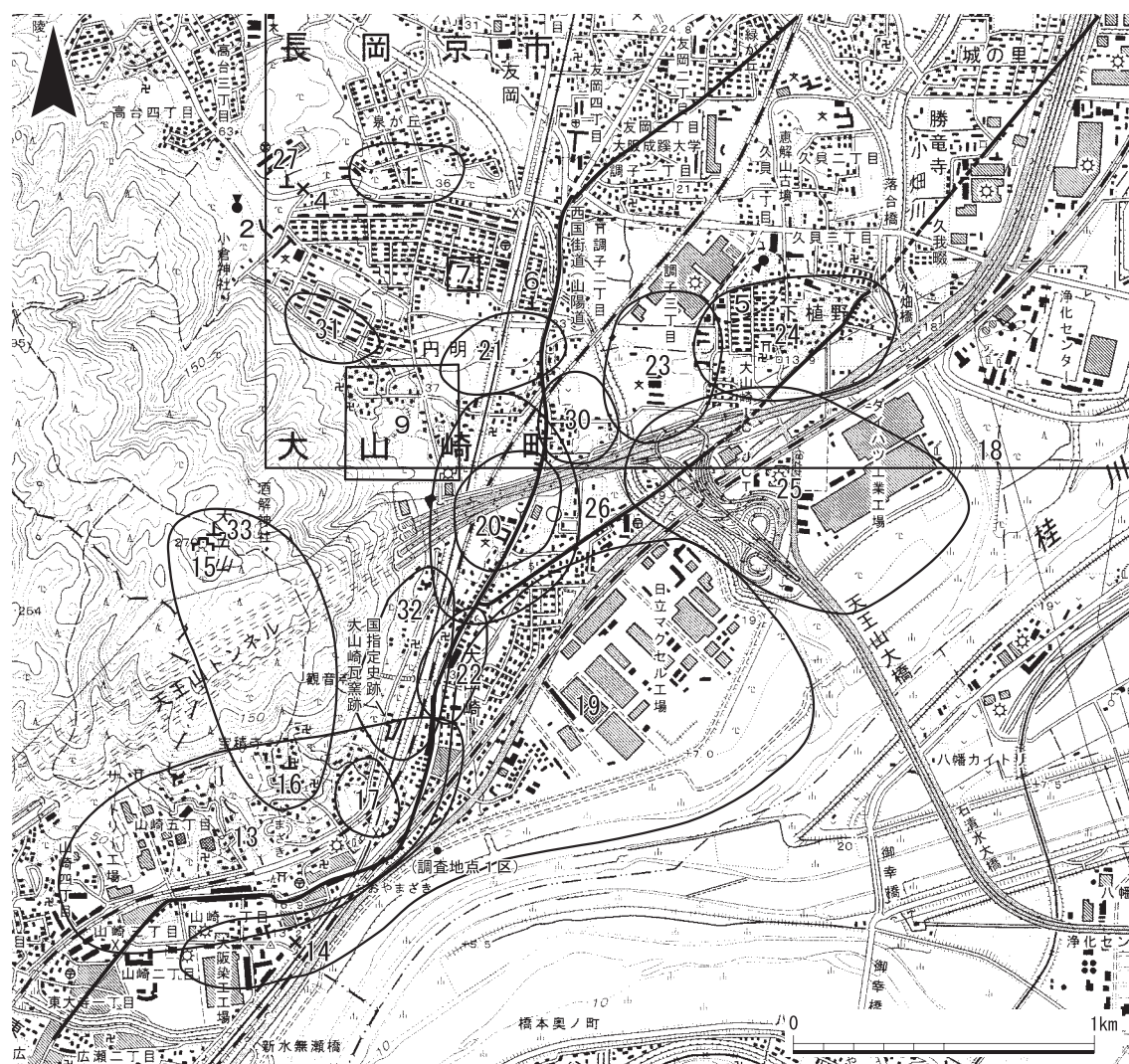
桂川に注ぎ込む大山崎町での支流は少なく、天王山北東麓の裾ラインと平行するように、小泉川および小倉神社川が南東方角に流下している。小泉川が桂川に取り付く付近には小規模な扇状地形も認められる。桂川本流の流域には後背湿地が広がるが、天王山山麓では、その範囲は極端に狭くなる。沖積層中には7,500年前の噴火によってもたらされた鬼界アカホヤテフラ(K-Ah火山灰)の堆積が確認されている。

一方、山崎津跡周辺に関わる歴史記述が史料に出現するのは、天平19年の『大安寺伽藍縁起並流記資材帳』の記載である。平城京に伽藍を置く「大安寺の庄」の所在地として「山背国乙訓郡山前郷」がみえる。庄処には、園地の他、収穫物を収納する倉や管理棟の存在が推察されるが、「山

前郷庄処＝山崎庄」には通有の田積記載が欠落しており、乏しい可耕地条件も加味すると、庄処に物資流通の中継地的な特異性を指摘すべきである。

他方、行基集団による布教拠点である道場(院)としての「山崎院」が史料にみえる(『行基菩薩伝』：東寺観智院本、『行基年譜』「年代記」神亀2年9月12日条)。さらに、この記事の付帯事項に「山崎橋」の架橋の一節が語られる。橋の実態は未解明ながら、「山背道場(山崎院)」の敷設と深い関連をもって架設されたとみるのが概ね一致した見解である。

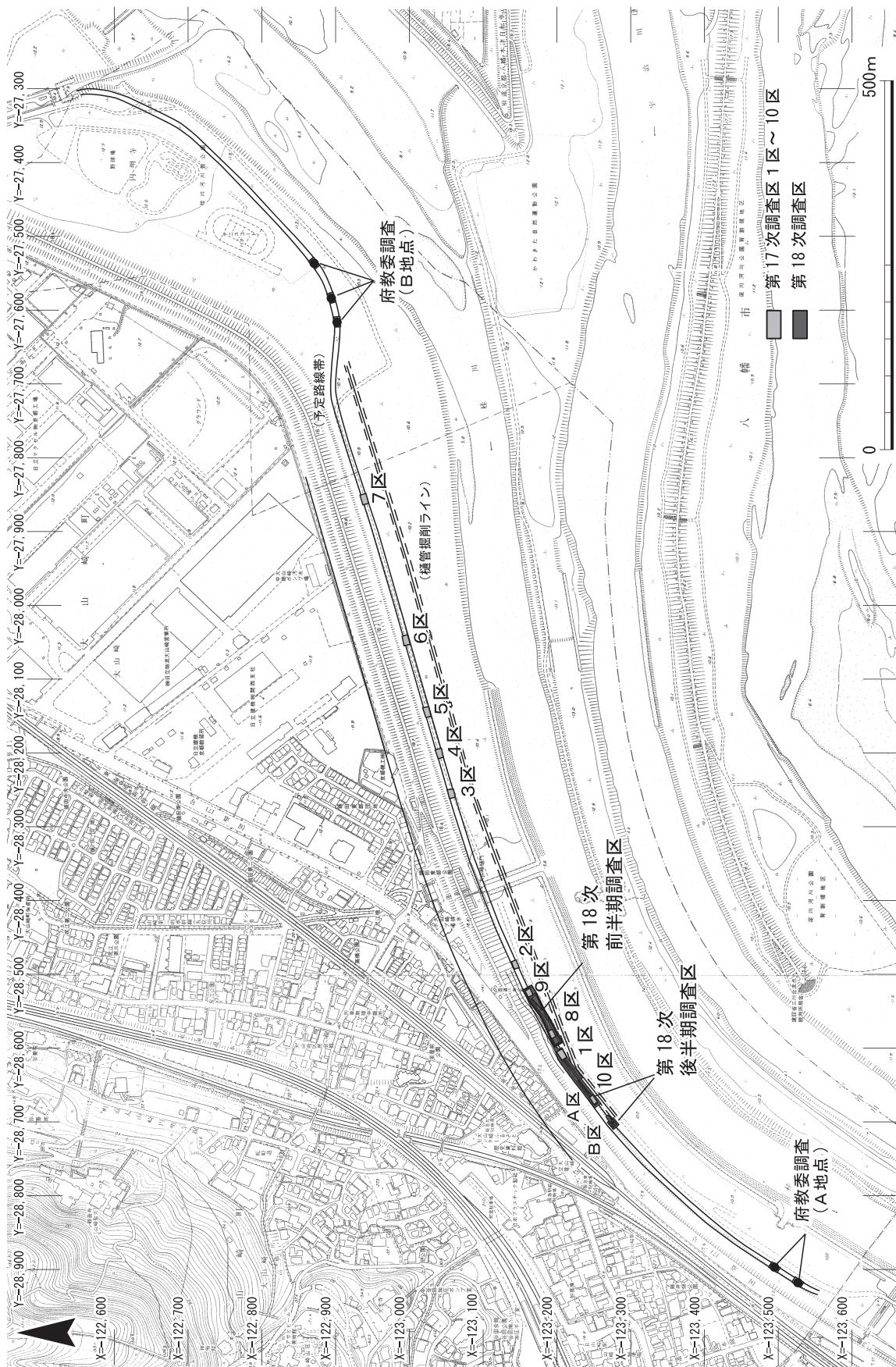
また、当該地周辺には、律令体制下における伝馬制にもとづき、「山崎駅」(駅家)が当地に設置される(『類従三代格』大同2(807)年10月25日官符初出)。当該地は、山陽道と南海道の分岐点であり、さらに陸上交通と舟運交通の結節点という二重の要件を考慮すると、非常に重要な機能



- | | | | | |
|--------------|--|----------|------------|-----------|
| 1. 脇山遺跡 | 13. 大山崎遺跡群
(河陽離宮跡
相応寺跡
山城国府跡
山崎院跡
山崎駅跡) | 15. 山崎城跡 | 21. 久保川遺跡 | 27. 鳥居前遺跡 |
| 2. 鳥居前古墳 | 14. 山崎橋跡 | 16. 銭原遺跡 | 22. 堀尻遺跡 | 30. 金蔵遺跡 |
| 4. 石倉集石遺跡 | | 17. 山崎遺跡 | 23. 松田遺跡 | 31. 西法寺遺跡 |
| 5. 境野古墳群 | | 18. 長岡京跡 | 24. 宮脇遺跡 | 32. 白味才遺跡 |
| 6. 葛原親王塚遺跡 | | 19. 山崎津跡 | 25. 下植野南遺跡 | 33. 古城遺跡 |
| 7. 葛原親王屋敷跡遺跡 | | 20. 百々遺跡 | 26. 算用田遺跡 | |
| 9. 円明寺跡 | | | | |

遺跡の番号は、京都府教育委員会2004年発行『京都府遺跡地図』〔第3版〕に準じる。

第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)



第2図 調査地区配置図

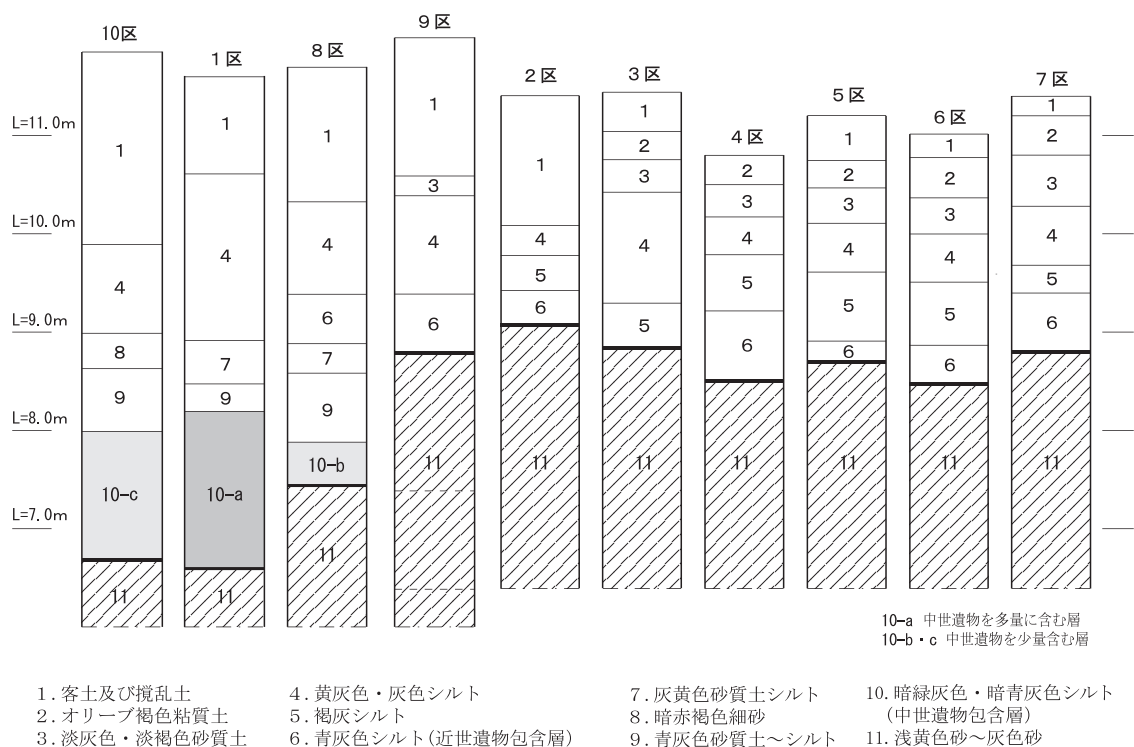
を果たしたことは想像に難くない。

長岡・平安京などの都城が京都に遷ると、桓武・嵯峨帝は、摂津や河内の狩猟に赴く際、山崎駅家を仮宮(『日本後記』等)としており、やがて「山崎離宮(河陽宮・河陽館)へと推移する。また、貞観3(861)年には、これら諸施設の管轄権が国司に委譲され、実質上の第4次山城国府としての機能を果たすことになる。このように古代山崎を俯瞰してみると、様々な重要な施設が狭隘な空間にまるで重層するように営まれ、そうした前史のなかから当該地に港津及び津町が形成される歴史的背景はとりわけ重要である。なお、紀貫之は土佐から京へ戻る道中、山崎津に56日間滞在し、津の賑わいを『土佐日記』に多く語っている。また、関白藤原頼通による山崎の遊興情景の記録は良く知られている。為政者にも深く関わる場所であったことがわかる。

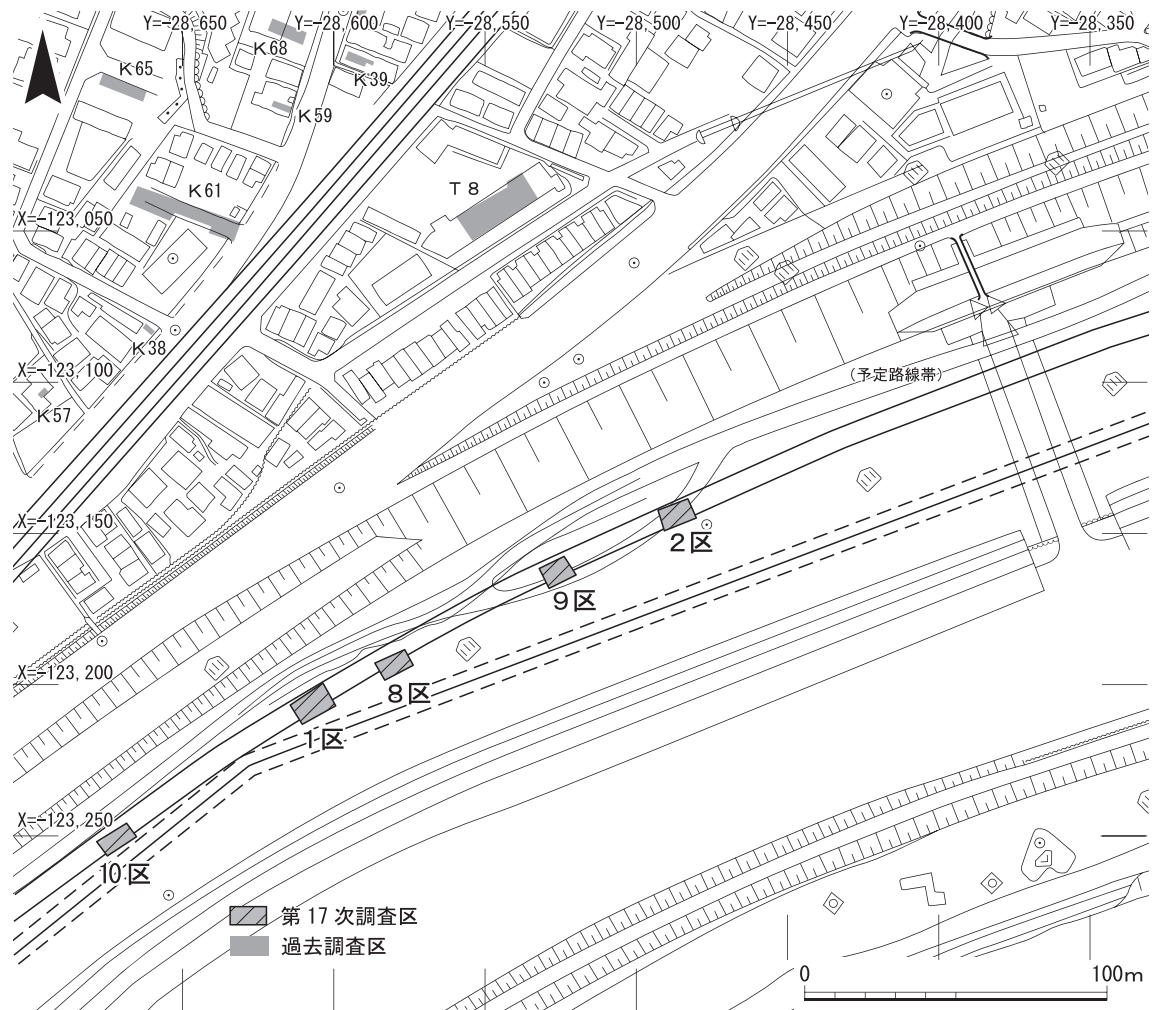
(伊賀高弘)

3. 第17次調査の概要

平成23年度の第17次調査は、平成22年度の京都府教育委員会による第16次調査^(注1)の調査成果を受けて、桂川の堤防内側の地点で実施したものである。堤防内の高水敷ではこれまで立会調査が行われているが、本格的な発掘調査は今回の調査がはじめてである。京都府教育委員会による第16次調査地(第2図A・B地点)では、顕著な遺構・遺物は確認されていないため、本調査では、2地点の間に遺跡の中心があると推定し、北東から南東約800mの範囲に計10か所の調査区を設け、遺構や遺物包含層の有無を確認する目的で発掘調査を実施した。調査面積は全体で800㎡を測り、各地区の面積は、1区：95㎡、3区～8区：80㎡、2区・9区・10区：75㎡である。



第3図 土層柱状図

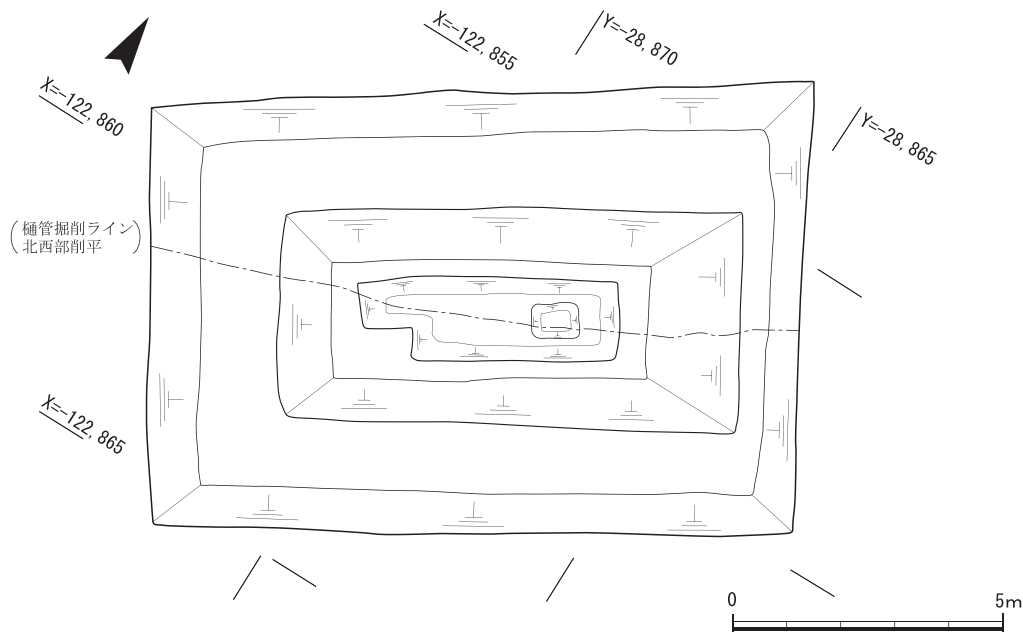


第4図 第17次西部調査区位置図

調査は、南西部の1区から着手し、北東へ向け2～7区までの7か所の調査を実施したが、1区で顕著な遺物包含層を確認したため、1区周辺にさらに8～10区を設定し、遺構や遺物包含層の広がり確認に努めた。2区と3区の間には、堤防を横断する管渠である大山崎樋門が設置されており、この樋門より西側の1・2区および8～9区を西部調査区、東側を3～7区を東部調査区とする。調査地は、全体として桂川の流路に沿って北東から南西へ低くなる地勢であるが、現地表面は造成による客土の搬入のため一様ではない(第3図)。各地点で基盤層と認識した浅黄色粗砂および灰色・緑灰色粗砂は、東部調査地ではおおよそ9.0m付近で確認したが、西部調査区の8区より南西では急激に深くなり、おおよそ7.0m前後で確認した。以下、各調査区について詳述する。

1) 西部調査区(第4図)

(1) 1区(第5・6図) 現地表面は標高約11.4mを測る。1区東半は上面が明治期の樋管の建^(注2)設に伴う開削によって大きく削平されている。基準層位は、現地表面から約1mは客土及び攪乱土が堆積し、その下層に灰黄色シルト・褐灰シルト(第6図1区北・東壁3・4層)、灰オリーブ砂質土(6層)、暗青灰色シルト(8層)、灰黄褐色シルト(9層)、暗オリーブ灰色砂礫混じり中砂



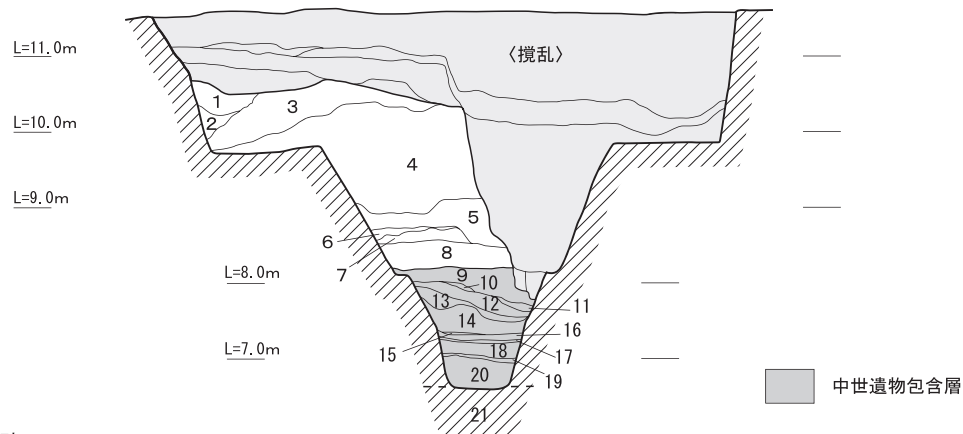
第5図 第17次1区平面図

(13層)、暗緑灰色・暗青灰色シルト(14・18・20層)の順に堆積する。表土下約5.0mの標高6.7m付近で、基盤層とした灰色・緑灰色粗砂を検出し、約1.5m以上の同層の堆積が続くことを確認した。3・4層は近世遺物包含層であり、表土下約3.5mで中世遺物を多量に含む9層を検出し、その下層の20層まで厚さ約1.5mの中世遺物包含層を確認した。この層位は、シルト層の間隙に部分的にラミナを形成する薄い砂層が互層状に堆積しており、滞留と流失を繰り返したものと考えられる。堆積状況は、北西から南東に向けて低く傾斜し、土砂の流入が全体として現在の市街地側となる北西方向からのものであったことが明らかである。これらの層位から整理箱約7箱の遺物が出土したが、出土遺物の95%以上が12世紀後半～13世紀前半の中世土器であり、8～11世紀頃の土器はわずかながら出土した。出土遺物の半数は瓦器碗であるが、ほとんど摩耗しておらず、完形に近い個体も含まれ、近接した地点から廃棄されたと考えられる。遺物には、「大」と墨書された白磁碗が含まれ、また土器のほかにも陰刻文字瓦や箸状木製品などが出土している。文字瓦は平瓦の一部で、こうした資料は山城国府跡第54次調査などの大山崎町内の過去の調査でも多く出土しており、奈良時代の僧行基が造営した山崎院に関わる瓦と考えられている。

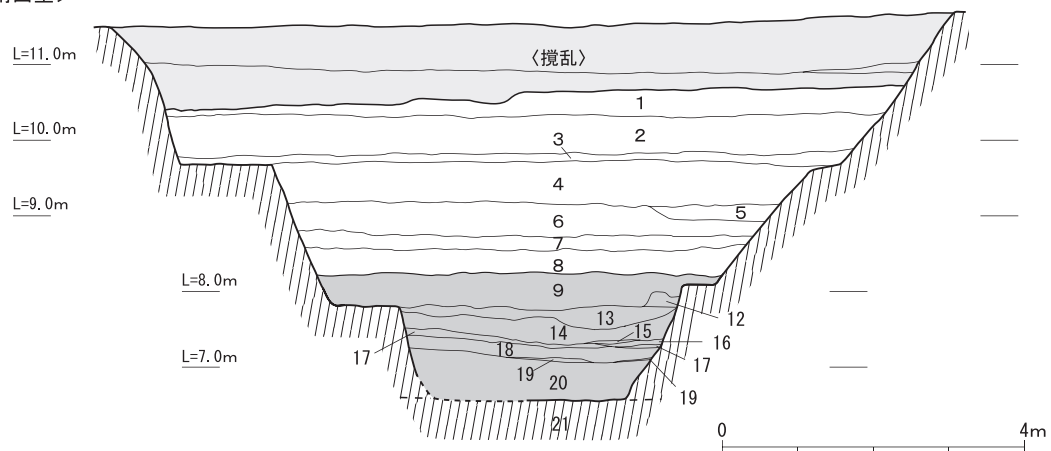
(2) 2区(第6図) 1区の北西約120mの地点に設定した調査区である。現地表面の標高は、約11.3mを測る。表土下約1.6mで黄橙色～黄褐色シルト混じり砂質土(第6図2・3層)を検出し、その下層で青灰色粘質土(4層)を確認した。遺物は出土していないが、北西地点の調査結果から、いずれも近世堆積層とみられる。表土下2.4m(標高約9.1m)の4層直下で基盤層と判断した浅黄色粗砂(5層)を検出し、この層位は約1m以上堆積することを確認した。

(高野陽子)

<1区北東壁>

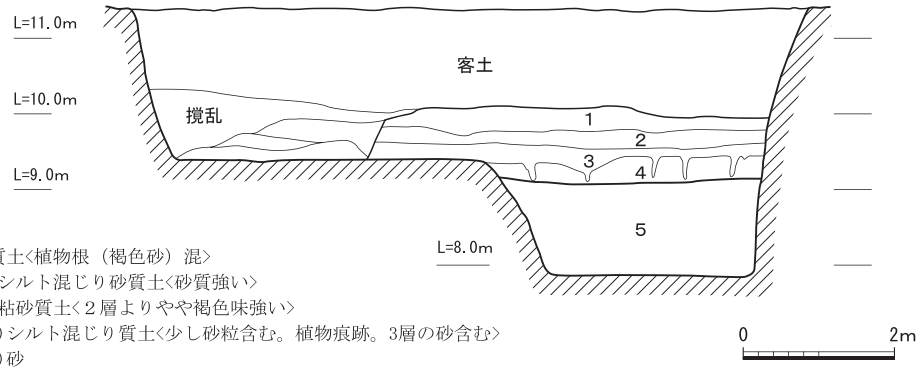


<1区南西壁>



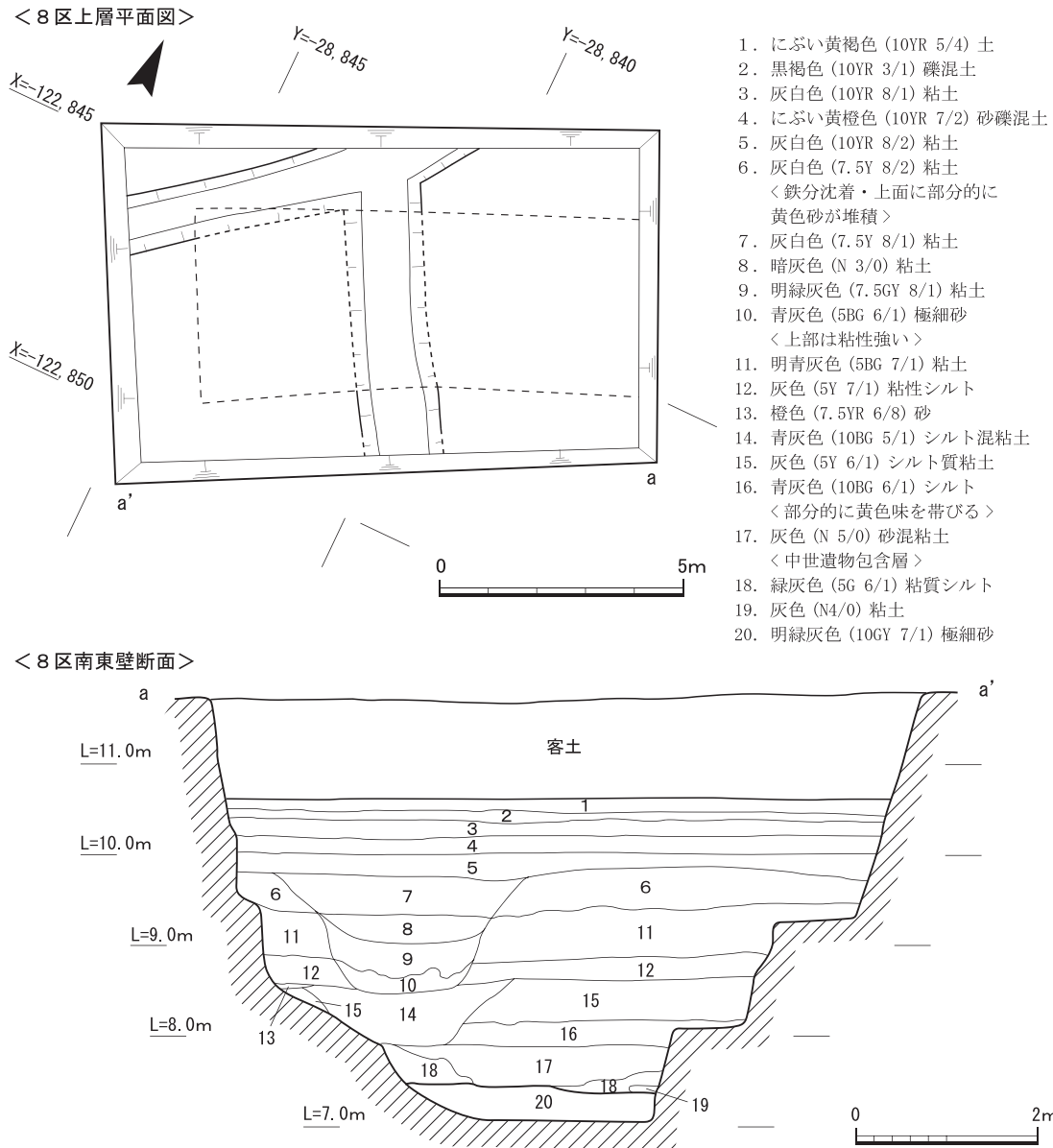
- | | |
|---|--|
| 1. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 極細砂 | 14. 暗緑灰色 (7.5GY 3/1) 中砂 |
| 2. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト～極細砂 | 15. 灰色 (5Y 6/1) 中砂 |
| 3. 褐色 (7.5YR 4/4) シルト～極細砂 (鉄分多量に沈着) | 16. オリーブ黒色 (5GY 2/1) 粘質土 |
| 4. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト～極細砂 | 17. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂礫混じり中砂 (φ2～3cmの礫を多く含む) |
| 5. オリーブ色 (5Y 6/6) 砂質土 | 18. 暗緑灰色 (10GY 3/1) 中砂～細砂 |
| 6. 灰オリーブ (7.5Y 5/2) 砂質土 | 19. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂礫混じり中砂 (鉄分多量に沈着) |
| 7. 灰色 (7.5YR 5/1) 砂礫混じり中砂 (φ2～3cmの礫を多く含む) | 20. 暗青灰色 (5BG 3/1) シルト混じり中砂～極細砂 |
| 8. 暗青灰色 (5BG 3/1) シルト | 21. 灰色 (5Y 6/1) 中砂 |
| 9. 灰黄褐色 (10YR 5/2) シルト～極細砂 (φ2～3cmの礫を多く含む) | 22. 黄褐色砂礫混じり中砂 (10YR 5/6) |
| 10. 暗青灰色 (5BG 4/1) シルト (φ2～3cmの礫を多く含む) | |
| 11. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 極細砂 (φ5～6cmの礫を含む) | |
| 12. 暗緑灰色 (10G 3/1) シルト | |
| 13. 暗オリーブ灰色 (7.5GY 4/1) 砂礫混じり中砂～粗砂+黄褐色 (10YR 5/6) 砂礫混じり中砂 (φ2～3cmの礫を含む) | |

<2区南東壁>



1. 灰白色 (N8/) 砂質土<植物根 (褐色砂) 混>
2. 黄橙色 (10YR7/3) シルト混じり砂質土<砂質強い>
3. 黄褐色 (10YR6/4) 粘砂質土<2層よりやや褐色味強い>
4. 青灰色 (10BG 6/1) シルト混じり質土<少し砂粒含む。植物痕跡。3層の砂含む>
5. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂

第6図 第17次1・2区土層断面図



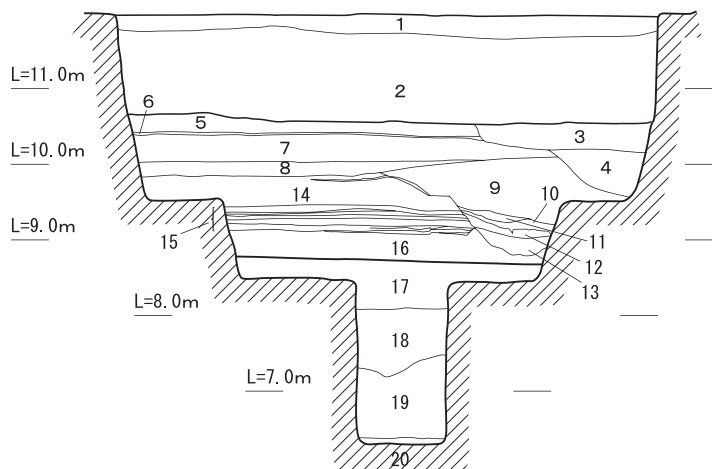
第7図 第17次8区平面図・土層断面図

(3) 8区(第7図) 1区から18m東側に設定した調査区である。1区で良好な中世の遺物包含層が見つかったため、その包含層の広がりを確認するために設定した。調査の結果、地表下約3m(標高8m)で中世前期の遺物を含む灰色砂混粘土層(17層)に達した。遺物の出土量は1区の包含層に比べて少なく、土質も異なる。木片が少量出土しており、湿地状の堆積であった可能性が高い。なお、地表下4.8mで青灰色砂層に達し、さらに1m下で湧水層となった。

中世以前の遺構は確認できなかったが、6層上面から掘削された近世以降の溝を2条検出した。溝は幅2m、深さ1.3mを測る。埋土は最下層が青灰色極細砂(10層)で、それより上層は粘土層(7～9層)である。これらの溝は明治期の絵図(第36図)に見える地境溝である可能性がある。

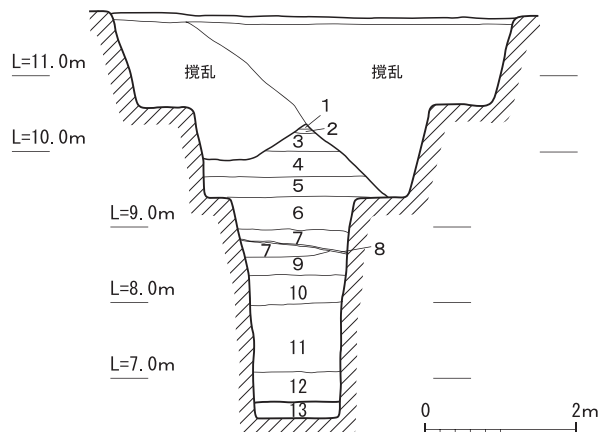
(4) 9区(第9図) 2区の50m西側の地点に設定した調査区である。8区と同じく中世遺物包含層の分布を確認するために設定した。調査の結果、地表下3.6mで褐色系砂層(18層)に達し、さ

<9区南西壁>



1. コンクリート碎石
2. 客土
3. 灰白色(5Y 6/1)粘質土
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
5. 灰色(5Y 6/1)砂混粘土
6. 黄色(2.5Y8/6)砂
7. 灰白色と灰色(N7/0と5/0)粘土の互層
8. 黒と灰色と明オリーブ灰色(5GY 7/1)粘土の互層
9. 明緑灰色と緑灰色(10GY 7/1・6/1)粘土の互層
10. 灰白色(5GY 8/1・7/1)粘土と明オリーブ灰色粘土の互層
11. 青灰色(10BG 6/1)砂混粘土
12. 橙色(7.5YR 6/8)砂
13. 明赤褐色(5YR 5/8)砂・灰白色(10YR8/1)
14. 灰白色(N8/0)粘土
15. 黒色(N2/0)と灰色(N6/0)と明オリーブ灰色(5GY7/1)粘土の互層
16. 明青灰色(5B 7/1)粘土
17. 灰白色(N 8/0)粘土
18. 褐色(7.5YR 4/6)粗砂<中世遺物包含層>
19. 灰色粘土と灰白色(N7/0)砂の瓦層<中世遺物包含層>
20. 灰色(N6/0)砂

<10区南東壁>



1. 灰黄褐色(10YR 5/2)
2. 黄色(2.5Y 8/8)土
3. にぶい黄褐色(10YR 7/3)粘土
4. 浅黄褐色(10YR 8/3)粘土
5. 灰黄褐色(10YR 6/2)粘土
6. 灰白色(10YR 8/1)粘土
7. 明赤褐色(5YR 5/8)砂
8. 青灰色(5BG 6/1)シルト
9. 青灰色(5BG 6/1)シルトと極細砂の互層
10. 青灰色(10BG 6/1)砂<黄色砂と青灰色砂のラミナ堆積>
11. 青灰色(5BG 5/1)粘土<土師器片出土>
12. 暗灰色(N3/0)粘土
13. 灰色(N6/0)砂

第8図 第17次9・10区土層断面図

らに2.3m下で湧水層となった。褐色系砂層の下には灰色粘土と灰白色砂が互層で堆積していた(19層)。褐色系砂層と灰色粘土から中世以降の土器の小片が出土したが、摩滅が著しかった。この調査区では、1区の中世遺物包含層に対応する層及び中世以前の遺構は確認できなかった。なお、平面では輪郭を確認することができなかったが、断面観察により17層上面から掘り込まれる幅3.3m以上、深さ1.3mの溝(6～10層)を確認した。層位や規模から8区で確認した近世以降の溝と同様のものと考えられる。

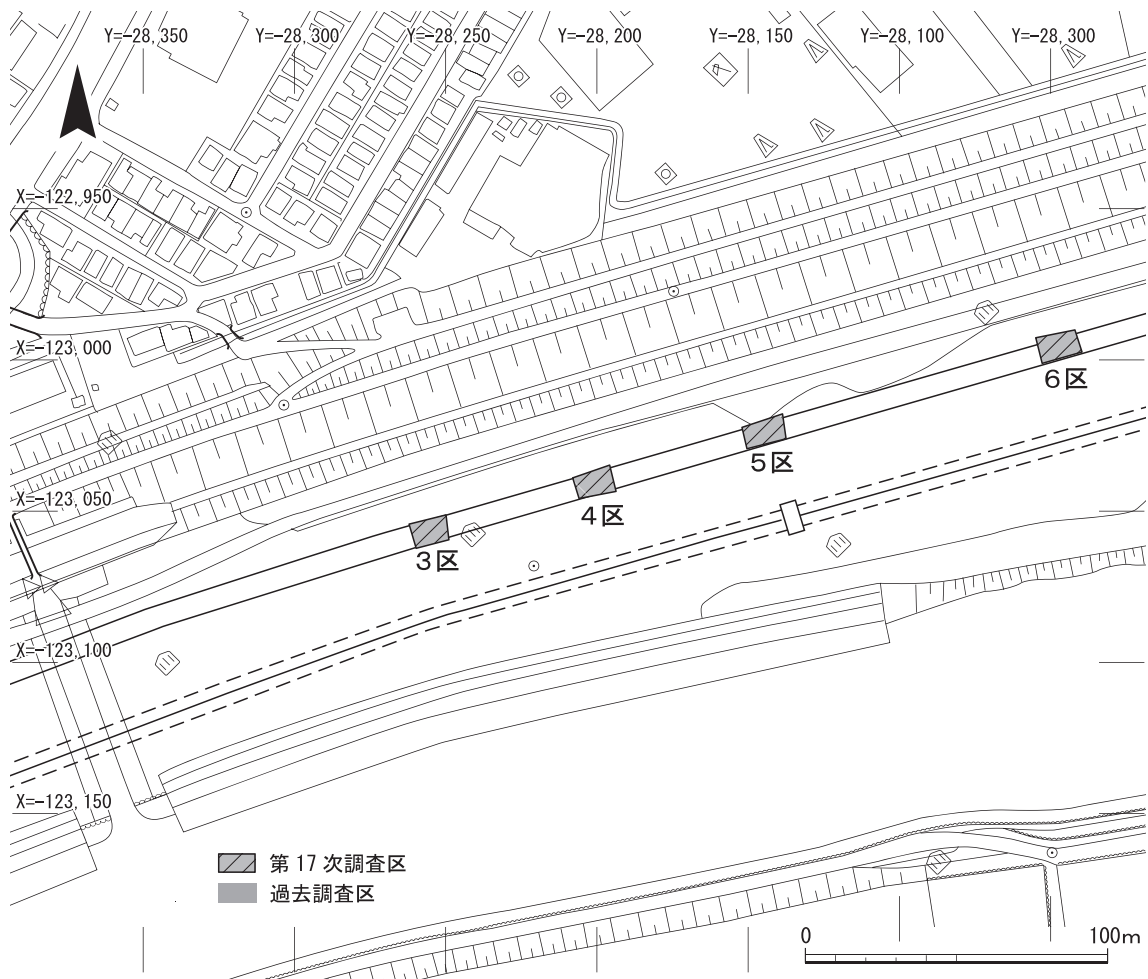
(5) 10区(第8図) 1区の80m西側に設定した調査区である。木津川が山崎市街地に最も近くなる地点にあたり、1区で確認された中世遺物包含層が西へどのくらい広がるのか確認するために設定した。調査区南半部は、地表下2.4mまで明治期の樋管設置工事の掘削により削平されていた。調査の結果、地表下4.2mで中世土器の小片を含む青灰色粘土層(11層)に達した。11層の上面の標高は8mで、1区の中世遺物包含層に対応すると思われるが、遺物量は1区よりも少なく、土質も異なる。遺構は確認できなかった。

(松尾史子)

2) 東部調査区(第9・11図)

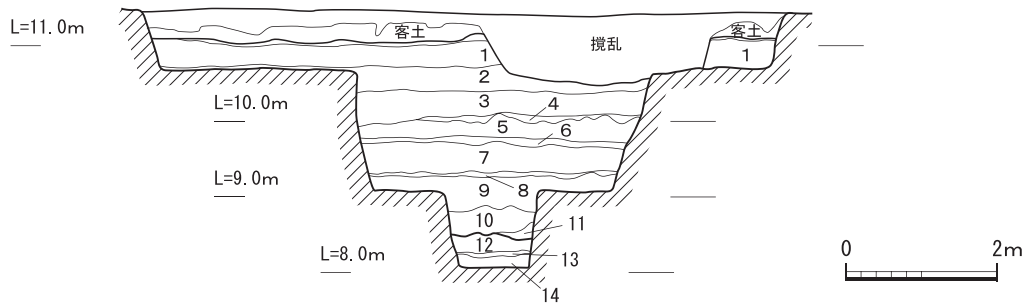
東部調査区(3～7区)周辺では、現地表面のレベルは標高10.8～11.3mを測る。全体にシルト層を基調とした湿地性の堆積層から形成される。基盤となる浅黄砂層は、標高8.5～8.8mで検出した。いずれの地点でも最終的に重機による断ち割りを行い、1.5m～2.0m以上にわたり浅黄砂層が続くことを確認した。砂層の鉱物組成は花崗岩に由来するものであることから、主に木津川が運ぶ土砂によって基盤層が形成されたと推定される。東部調査区では、西部調査区で見られる中世の安定した遺物包含層は確認されていない。出土遺物はわずかにとどまるが、若干の中近世の陶磁器類が出土している。また、地震に伴う液状化によるとみられる曲隆や噴砂を各所で確認した。液状化は、地表下1.5～2m、標高約8.5～9m前後の層位にみられ、東に向かうほど顕著であり、5区と7区では噴砂を確認している。7区では液状化した層の上層に17世紀以降の近世遺物包含層が堆積し、5区では同じく下層で中世後期の遺物が出土することから、地震は層位から文禄5(1596)年に起こった慶長・伏見大地震と推定される。^(注3)

(1) 3区(第10図) 大山崎樋門の約250m北西の地点に設定した。標高約10m前後で、近世遺物を包含するにぶい黄褐色シルト層(5層)を検出した。標高9m前後に液状化の影響のみられる層位(8～10層)を確認した。基盤と判断した灰黄色粗砂(13層)は標高8.8mで検出した。



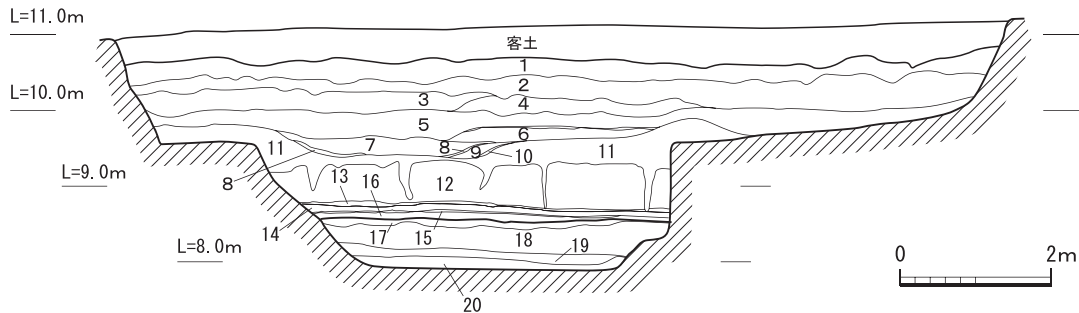
第9図 第17次東部調査区(3～6区)位置図

＜3区北東壁断面＞



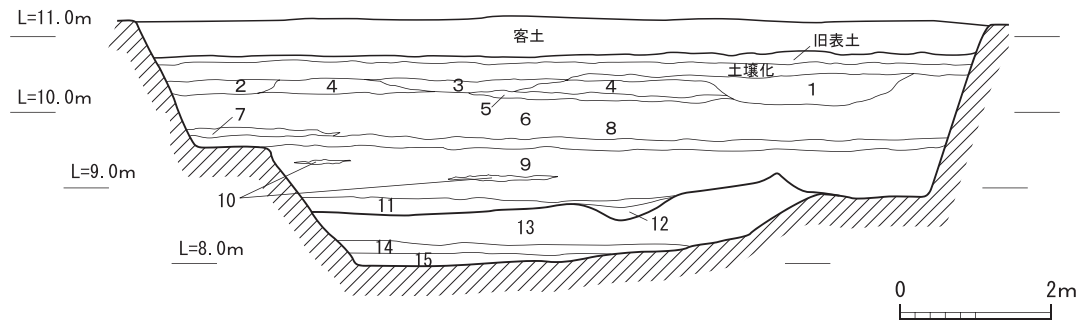
- | | | |
|---------------------------|-----------------------------|---|
| 1. 鈍いオリーブ褐色(10YR 5/4) 極細砂 | 6. <鉄分沈着 (7層よりも強い沈着)> | 11. オリーブ褐色(2.5Y 4/4) 砂混じりシルト
<⑫層中にも薄いレンズ状に入る> |
| 2. 明黄褐色(10YR 6/6) 中砂 | 7. 灰黄褐色(10YR 6/2) 中砂 | 12. 褐灰色(10YR 5/1) シルト～極細砂 |
| 3. 黄灰色(2.5Y 6/1) シルト | 8. <洪水性堆積 ラミナ状> | 13. 黄褐色(10YR 5/6) 粗砂＋褐灰色(10YR 5/1)
シルト<ラミナ状堆積> |
| 4. 灰黄色(2.5Y 6/2) 細砂 | 9. 黄灰色(2.5Y 5/1) シルト<鉄分沈着> | 14. 浅黄色(2.5Y 7/3) 粗砂 |
| 5. 鈍い黄褐色(10YR 5/3) シルト | 10. 明黄褐色(10YR 6/6) 中砂<鉄分沈着> | |

＜4区南東壁断面＞



- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1. オリーブ褐色(2.5Y 4/4) 細砂 | 11. 褐灰色(10YR 5/1) シルト～極細砂 |
| 2. 暗灰黄色(2.5Y 5/2) シルト～極細砂 | 12. 青灰色(5BG 5/1) シルト |
| 3. 明黄褐色(10YR 6/6) 中砂 | 13. 褐色(7.5YR 4/3) 中砂～細砂 |
| 4. 黄灰色(2.5Y 7/2) シルト～極細砂 | 14. 青灰色(5BG 5/1) シルト<ラミナ状に堆積> |
| 5. 灰黄褐色(10YR 5/2) シルト～極細砂 | 15. 褐色(7.5YR 4/3) 中砂～細砂 |
| 6. 灰白色(7.5Y 7/2) 細砂 | 16. 暗青灰色シルト(5BG 4/1) (8～12まで互層) |
| 7. 褐灰色(10YR 6/1) シルト<一部ラミナ入る> | 17. 浅黄色(2.5Y 7/3) 粗砂 |
| 8. 灰色(H 5/) シルト | 18. 暗灰黄色(2.5Y5/2) シルト混じり中砂 |
| 9. 灰色(7.5Y6/1) シルト混じり細砂～極細<ラミナ状> | 19. 浅黄色(2.5Y 8/3) 粗砂 |
| 10. 灰色(N 4/) シルト | 20. 灰白色(5Y 8/2) 粗砂 |

＜5区南東壁断面＞



- | | |
|-------------------------------|--|
| 1. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 細砂～極細砂 | 9. 褐灰色(10YR 5/1) シルト～極細砂 |
| 2. オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 極細砂 | 10. 黄褐色(2.5Y 5/4) 中砂<ラミナ状 堆積> |
| 3. 灰白色(5Y 8/2) 粗砂 | 11. 灰色(7.5Y 4/2) シルト |
| 4. 明黄褐色(10YR6/6) 中砂 | 12. 灰色(7.5Y 4/1) 砂混じりシルト<ラミナ状うすい層状に堆積> |
| 5. 灰黄色(2.5Y6/2) 細砂 | 13. 灰オリーブ(7.5Y 4/2) 混じり細砂 |
| 6. 黄灰色(2.5Y6/1) シルト～極細砂<鉄分沈着> | 14. 灰オリーブ(5Y 5/2) 中砂～細砂 |
| 7. 鈍い黄褐色(10YR7/4) シルト混じり細砂 | 15. 灰オリーブ(5Y 5/2) 中砂～細砂 |
| 8. 灰黄褐色(10YR4/2) シルト～極細砂 | |

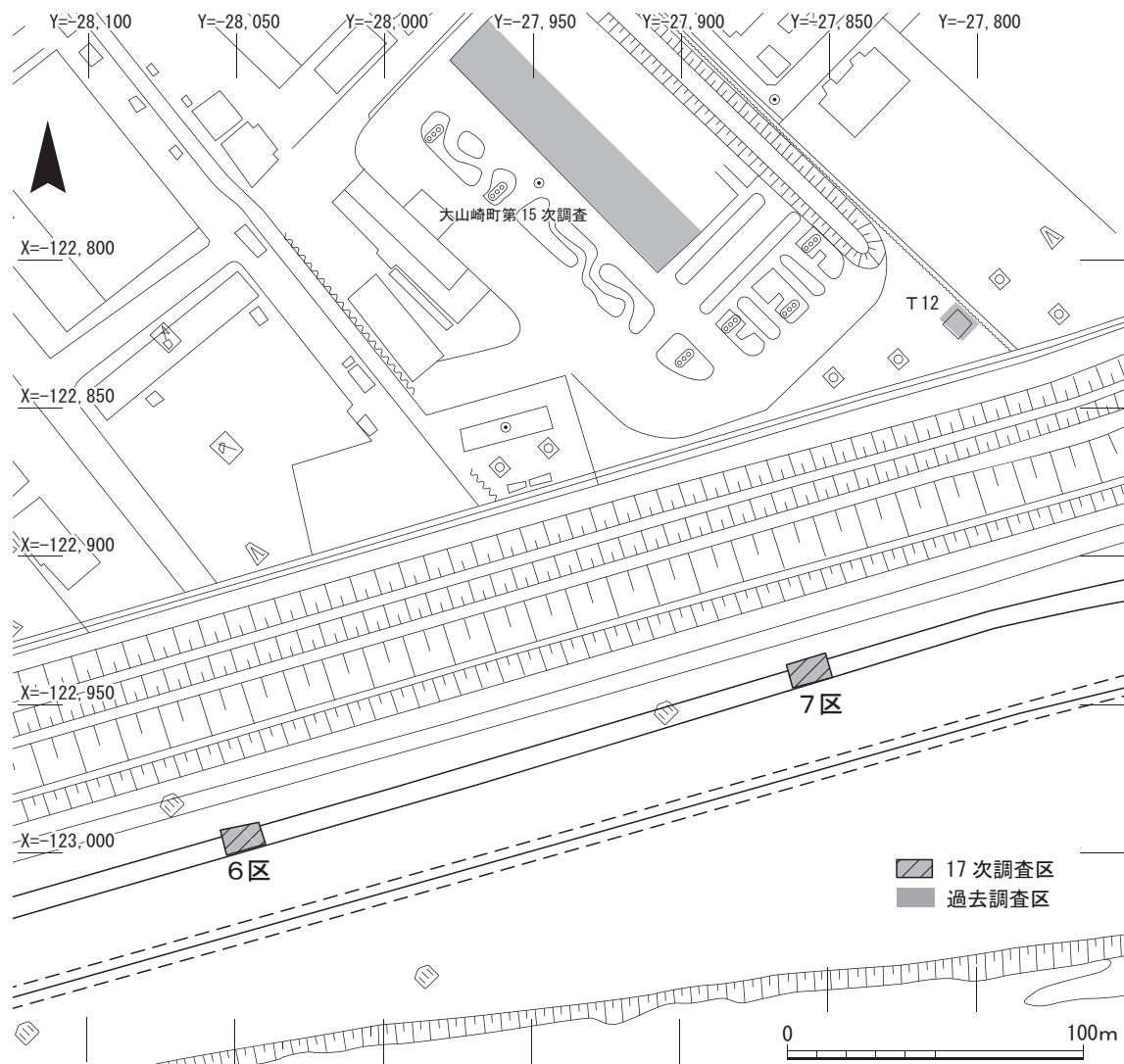
第10図 第17次3～5区土層断面図

(2) 4区(第10図) 標高10m前後で、耕作溝と推定される溝と畝状の起伏を確認した(7・11層)。また、標高9m前後の13~17層では、シルト層と砂層が互層状に混じり合い、液状化の影響がみられる。基盤となる浅黄色粗砂層は標高8.2mで検出した。

(3) 5区(第10図) 標高約10.5mで近代の遺物を包含する耕作溝と推定される溝状の落ち込みを確認した(1・3層)。標高約8.5~9.0mで、地震で液状化の影響がみられる灰オリーブシルト混じり砂層(13・14層)を検出し、北西壁ではこの層からさらに上層約9.7mまで立ち上がる噴砂を確認した(図版第6図3)。基盤層と判断する浅黄色粗砂は標高約8.6~8.8mで検出した。

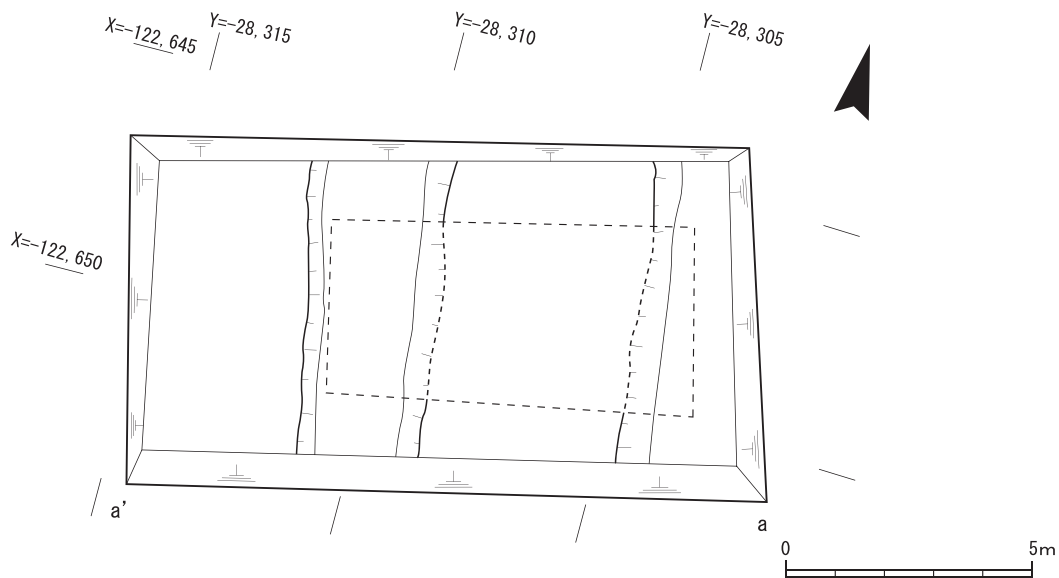
(4) 6区(第12図) 基準層位は、3~5区とほぼ同様の堆積状況を示すが、標高約9.7mの9層検出面において東西方向に掘削された幅約2mの2条の溝状遺構を検出した。堤防北側で調査された第16次調査(第2図)でも、こうした溝状遺構が上下2面で確認され、近世の短冊型方形地割をもつ耕作地に伴う溝群とみられる。^(注4) また標高8.5m付近で、液状化の影響がみられる灰色砂混じりシルト層(12層)を検出し、標高8.2mで基盤層となる浅黄色粗砂(14層)を確認した。

(高野陽子)

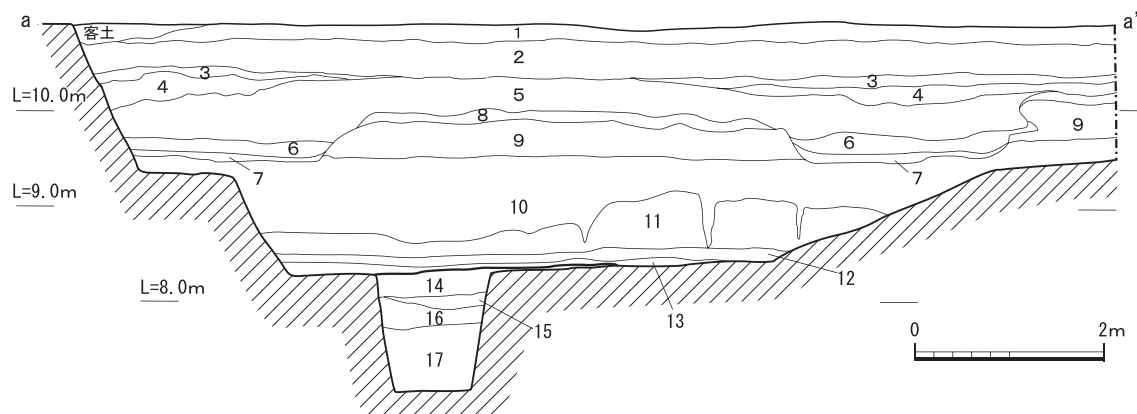


第11図 第17次東部調査区(6・7区)位置図

< 6区上層平面図 >



< 6区南東壁断面 >



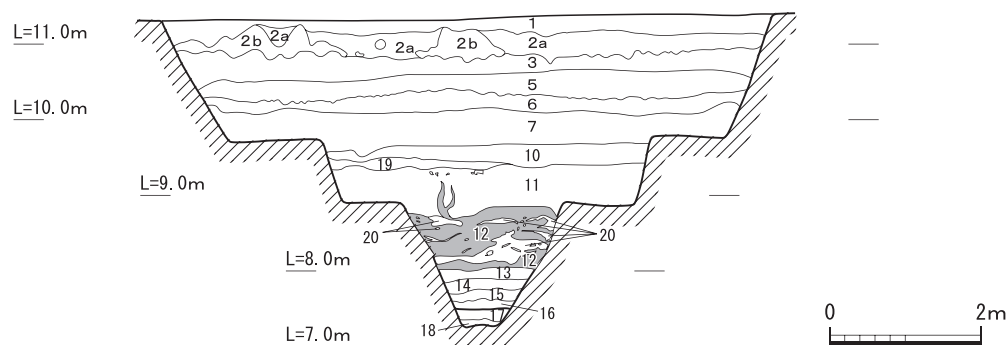
- | | | |
|-------------------------|---------------------------|----------------------------------|
| 1. 旧表土 | 6. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂～中砂 | 12. 灰色 (7.5Y 5/1) 砂混じりシルト<ラミナ状> |
| 2. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 細砂 | 7. 灰色 (5Y 5/1) シルト | 13. 灰オリーブ (7.5Y 5/2) 中砂<上面に鉄分沈着> |
| 3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/4) 極細砂 | 8. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 細砂 | 14. 浅黄色 (2.5Y 7/) 粗砂 |
| 4. 明黄褐色 (5Y 6/6) 中砂 | 9. 灰色 (7.5Y 6/1) シルト | 15. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 砂混じりシルト |
| 5. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト～細砂 | 10. 褐灰色 (10YR5/1) シルト～極細砂 | 16. 灰オリーブ (5Y 5/2) 中砂 |
| | 11. 青灰色 (5BG 5/1) シルト | 17. 浅黄色 (2.5Y 7/.5Y 7/3) 粗砂 |

第12図 第17次6区平面図・土層断面図

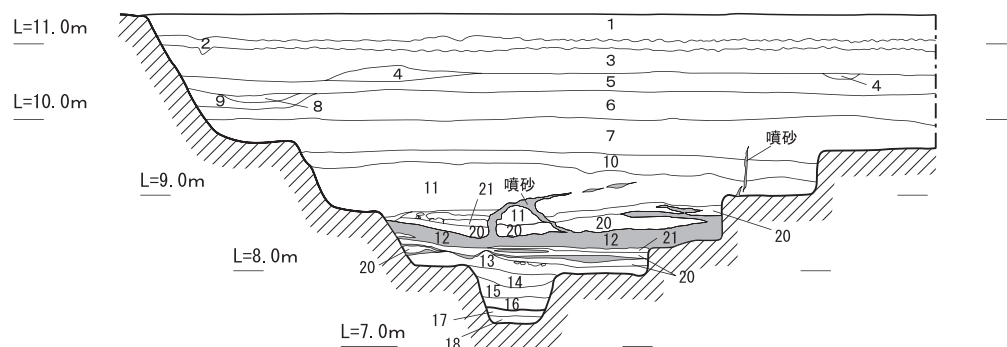
(5) 7区(第13図) 調査対象地の東端に設定した調査区である。地表下1.8mで液状化による噴砂や堆積層の曲隆などの地震痕跡を確認した。14～18層は水平堆積しているが、その上の12・13層は地震の影響により液状化現象を起こし、砂が激しく動いている。また、噴砂は青灰色粘土層(10・11層)を引き裂いて7層まで達していた。12層から中世の土器片が出土した。他の調査区の成果から11層以上は近世以降の堆積層と考えられ、今回確認した地震痕跡は、層位および出土遺物から慶長・伏見大地震(1596年)に起因するものと考えられる。同様の地震痕跡は、木津川河床遺跡でも多数確認されている。

(松尾史子)

< 7区北東壁断面 >



< 7区南東壁断面 >



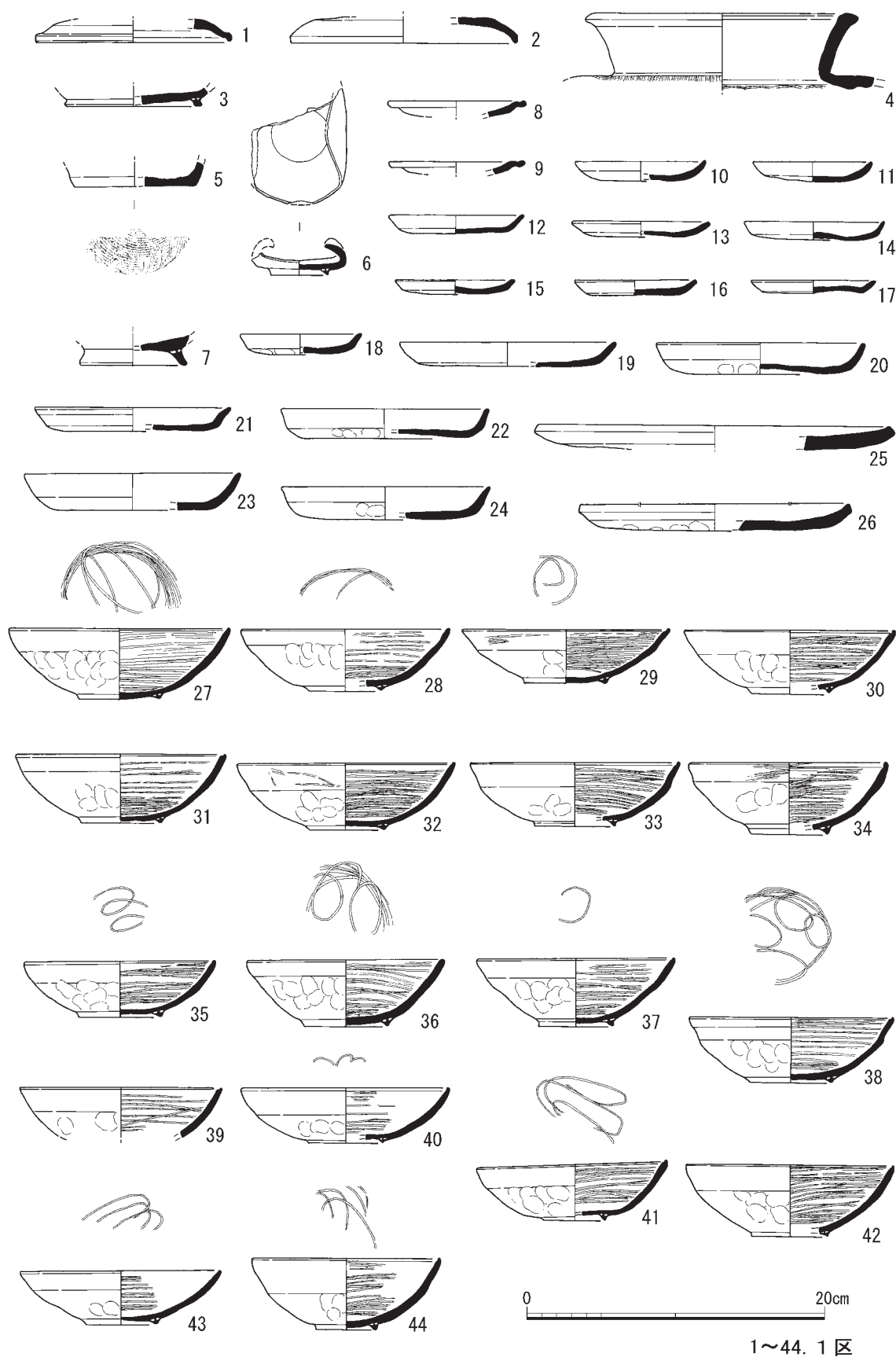
- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. 褐色土(表土) | 11. 青灰色(5B 6/1)粘土 |
| 2. 2a 淡褐色砂 | 12. 浅黄橙色(7.5YR 8/4)砂 |
| 2b 白色砂(部分的に淡褐色) | 13. 浅黄橙色(7.5YR 8/6)砂混礫 |
| 3. 淡褐色シルト | 14. 浅黄橙色(7.5YR 8/6)粗礫混砂 |
| 4. 灰色粘土混灰白色シルト | 15. 浅黄橙色(7.5YR 8/6)砂 |
| 5. 淡黄灰色(2.5Y8/3)シルト | 16. 褐灰色(5YR5/1)砂礫 |
| 6. 紫灰色(5R6/1)粘性シルト | 17. 灰白色(10YR 8/1)粗礫混砂 |
| 7. 淡黄灰色(2.5Y8/3)粘性シルト | 18. 灰白色(10YR 8/1)砂 |
| 8. 明黄褐色(10YR 6/6)砂混淡灰色シルト | 19. 青灰色(5B 6/1)粘土 |
| 9. 灰褐色(7.5YR 6/2)粘性シルト | 20. 明青灰色(10BG 7/1)粘土 |
| 10. 明黄褐色(10YR 6/6)シルト | 21. 明褐色(7.5YR 5/6)極細砂 |

第13図 第17次7区土層断面図

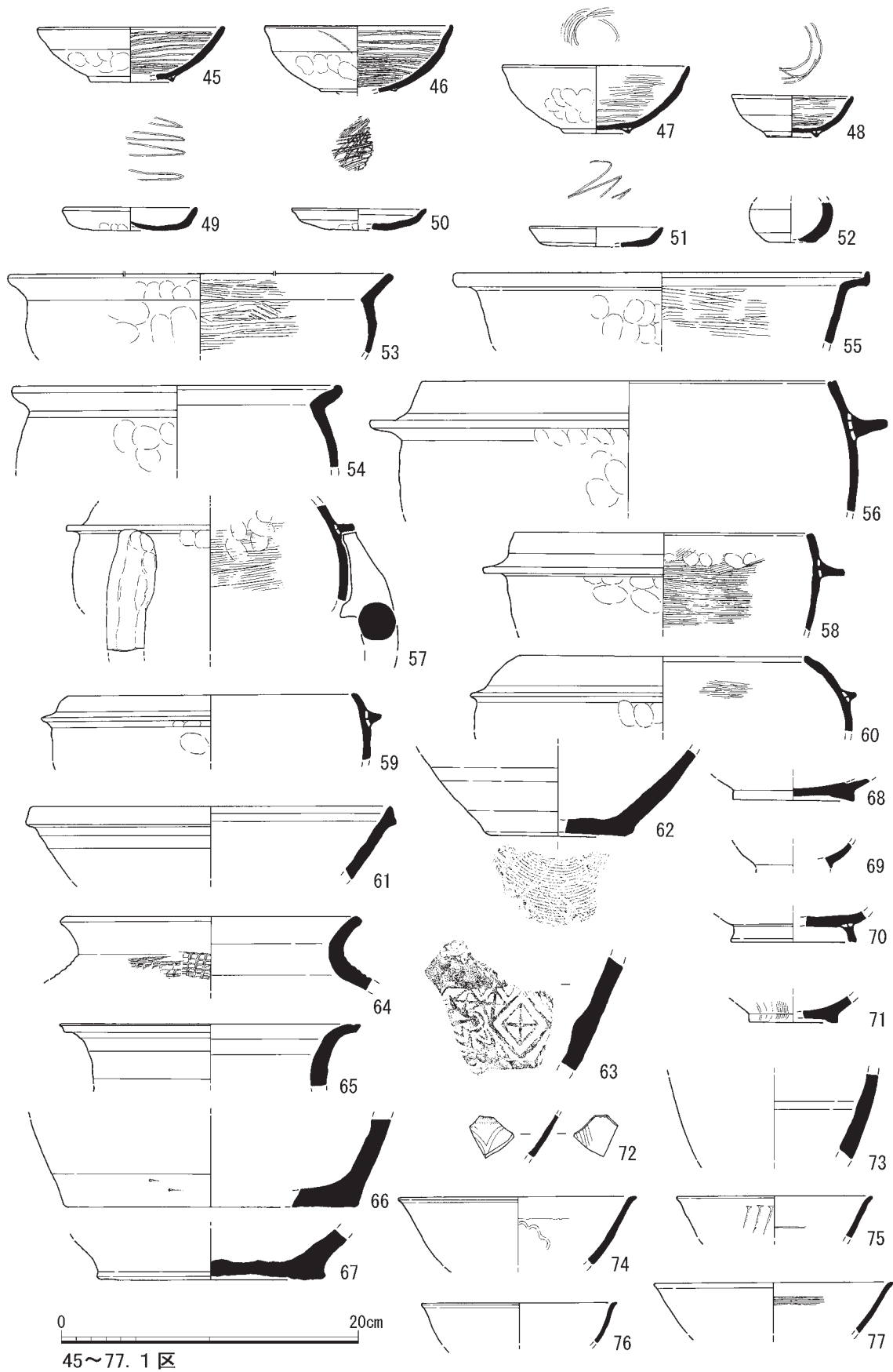
3) 出土遺物

第17次調査では、整理箱7箱の遺物が出土した。

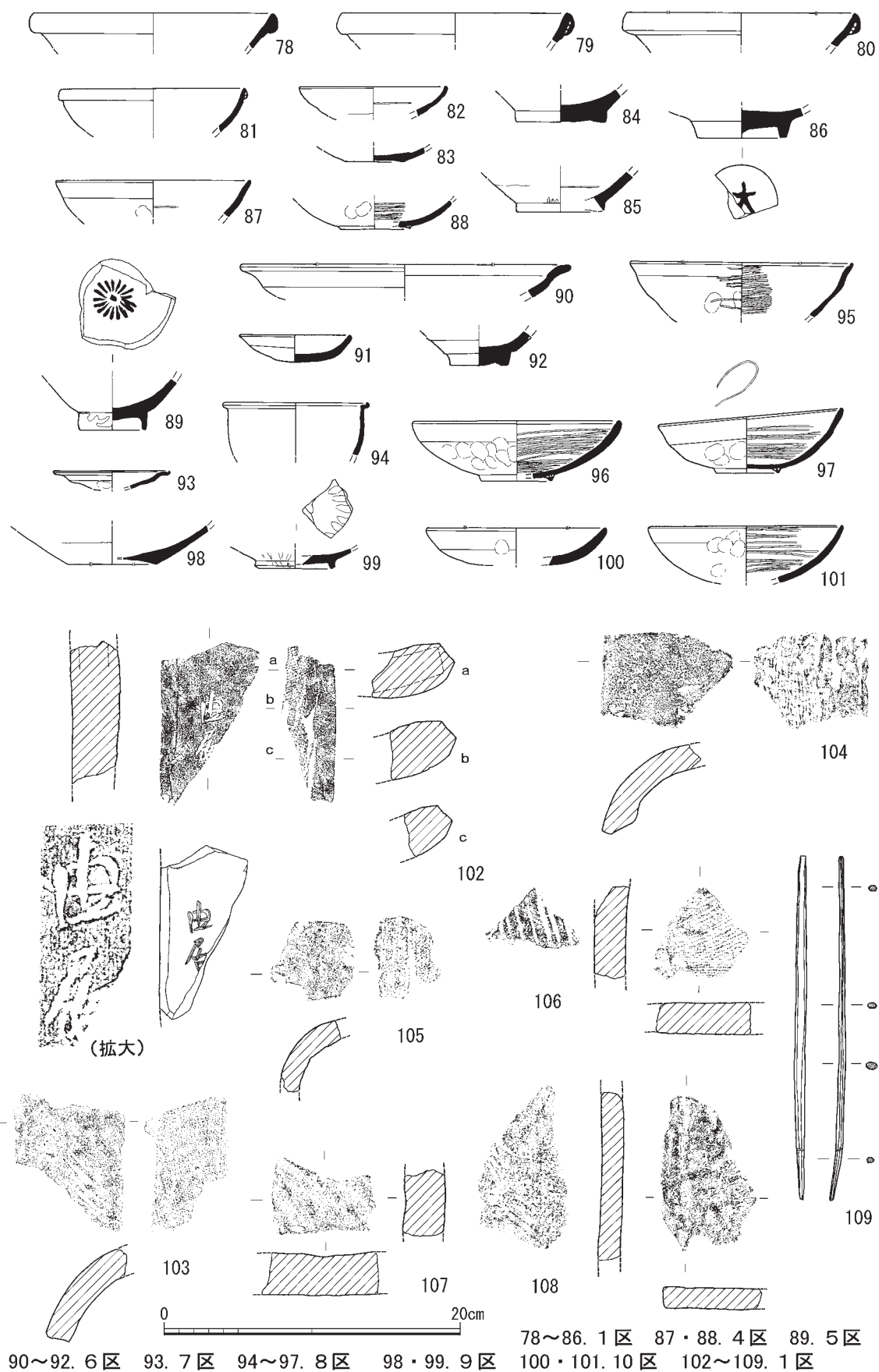
1～86は1区の9～20層(第6図)から出土した土器である。遺物包含層の深度が深く、下層(18～20)は作業の安全確保のため、主に重機によって取り上げた土砂から採取した。12世紀後半～13世紀の遺物を主体とし、わずかながら9世紀～10世紀の遺物を含む。1・2は須恵器蓋である。1は口径13.0cm、2は口径15.0cmを測る。3は須恵器杯Bの底部で、4は須恵器甕口縁部、5は須恵器壺で底部は糸切りである。6は土師器耳皿でおよそ9世紀代の所産とみられる。7は高台付き土師器皿、8・9は「て」字口縁の皿、10～18は土師器小皿である。10は口縁に煤が付着し灯明皿として使われたものである。19～24は土師器大皿、25・26は粗製の土師器大皿である。25は口径23.5cm、26は口径17.8cmを測る。27～47は瓦器椀である。口径は12.5～14.7cmを測るが、特に13.0cm前後、14.0cm前後に集中する。見込みの暗文は連続渦文を主とし、口縁部内面に丁寧な横方向のミガキを施す。また外面には、わずかながらミガキを認めるものがある。いずれも口唇部内面のやや下がった位置に沈線を施し、いわゆる楠葉型瓦器椀の範疇に含まれる。全体に



第14図 第17次出土遺物実測図1



第15図 第17次出土遺物実測図2



第16図 第17次出土遺物実測図3

おおよそ12世紀後半～13世紀前半の資料である。48は瓦器小椀である。49～51は瓦器小皿である。見込みにジグザグ状の暗文をもつ。49は口径8.9cm、50・51は口径9.0cmを測る。52は土師器小壺の一部である。53～55は土師器鍋で、56～60は瓦質土器羽釜である。56・58は13世紀代の所産で、大きく内傾する口縁部に短い鰐を付す。59・60は14世紀に帰属する。57は三足の脚をもつ。61は須恵器東播系鉢で、62は須恵器鉢底部で、63はスタンプ状のタタキ痕をもつ須恵器大甕体部である。64は東播系須恵器甕で、65は東海系須恵質甕口縁部である。12世紀代のものである。66・67は須恵器壺底部である。68は蛇の目高台をもつ緑釉陶器で、9世紀代の洛北産と推定される。70は近江系緑釉陶器で、10世紀に帰属する。73は白磁壺である。72・74～77は白磁椀で、78～81は玉縁の白磁椀である。72は同安窯系とみられる。82は白磁皿で、84～86は白磁椀底部である。86は底部見込みに「大」の墨書をもつ。

87・88は、4区から出土した瓦器椀である。88は内面に密に施された丁寧なミガキをもち、12世紀後葉の所産とみられる。89は5区中層から出土した見込みに染付の菊花文をもつ肥前磁器椀である。17世紀中頃に帰属する。90～92は6区から出土した土器・陶磁器類である。91は9層から出土した土師器皿で、92は天目茶椀である。93は7区の基盤とした浅黄色砂層直上から出土した「て」字口縁をもつ土師器皿である。11世紀後半に帰属する。94～97は8区から出土した。94は近世陶磁器であり、95～97は下層から出土した楠葉型瓦器椀である。いずれも内面に密に丁寧なミガキを施すもので、時期は12世紀後葉とみられる。98・99は9区から出土した近世陶磁器類である。100・101は10区から出土した。100は土師器皿で、101は13世紀の楠葉型瓦器椀である。なお、細片のため写真のみ掲載したが、中国産褐釉陶器が出土した(図版第18図(1)a)。壺の体部片とみられる2片を確認している。

102～108は1区から出土した瓦である。102は陰刻文字瓦である。平瓦の一部で、凸面成形は縄タタキによるとみられるが、タタキ痕はナデによって丁寧に消されている。凹面は未調整で布目痕が残り、側端面には面取りがなされる。小片であり、摸骨痕は確認できないが、成形は桶巻作りによるとみられる。文字は、細いヘラ状の工具によって明瞭に深く刻まれている。上下に2文字が陰刻され、「由居」と判読できるが、「居」については、一部が欠損するため、その他の文字である可能性も否定できない。焼成は堅緻で、内外面の色調は暗青灰色を呈する。また、断面は淡紫灰色で、厚みは最大約3.3cmを測る。一部に空気が入り、気泡を発生した火ブクレ痕跡があり、ややひずみがみられる。胎土は精良で、黒色粒子を含む。陰刻文字瓦は、大山崎町内の資料のほかには、奈良時代の僧行基が建立した寺院である大坂府和泉市大野寺と同和泉寺で出土しているにすぎず、これらは行基の寺院造営に合力した人々(知識)の名前を陰刻したものと考えられている。大山崎町内の文字瓦も行基による山崎院に関連する瓦と考えられている。103～108は1区から出土した瓦である。103～105は丸瓦の一部であり、103の凸面に縄タタキの痕跡が残る。106～108は平瓦の一部である。107は厚さ2.8cmを、108は厚さ1.4cmを測る。109は1区から出土した木製品の箸である。中央から下部にむけてやや厚みをもつ。長さ23.2cm、厚さ0.8cmを測る。

(高野陽子)

4. 第18次調査の概要

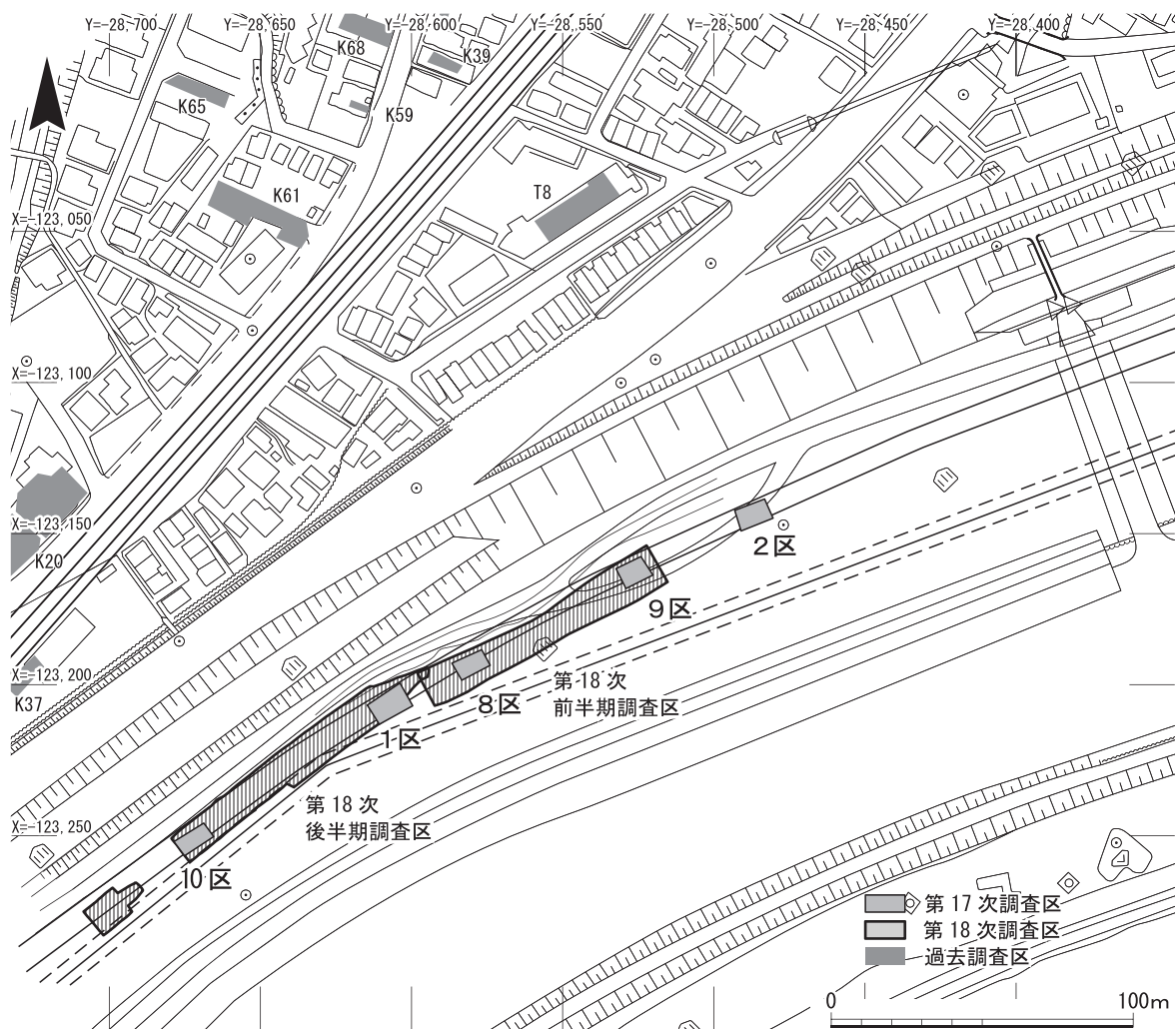
1) 第18次前半期調査(第18・19図)

平成23年度の発掘調査は、先に述べたように国土交通省河川法により平成23年4月26日から同年6月15日の期間に実施した。前半期調査時は、いわゆるゲリラ豪雨とも呼ぶべき状況が調査期間を通して長く続いた。排水作業を継続したものの、肩部の崩壊やトレンチ内からの湧水が著しく、少なからず発掘調査に影響を与えたことを付記しておきたい。

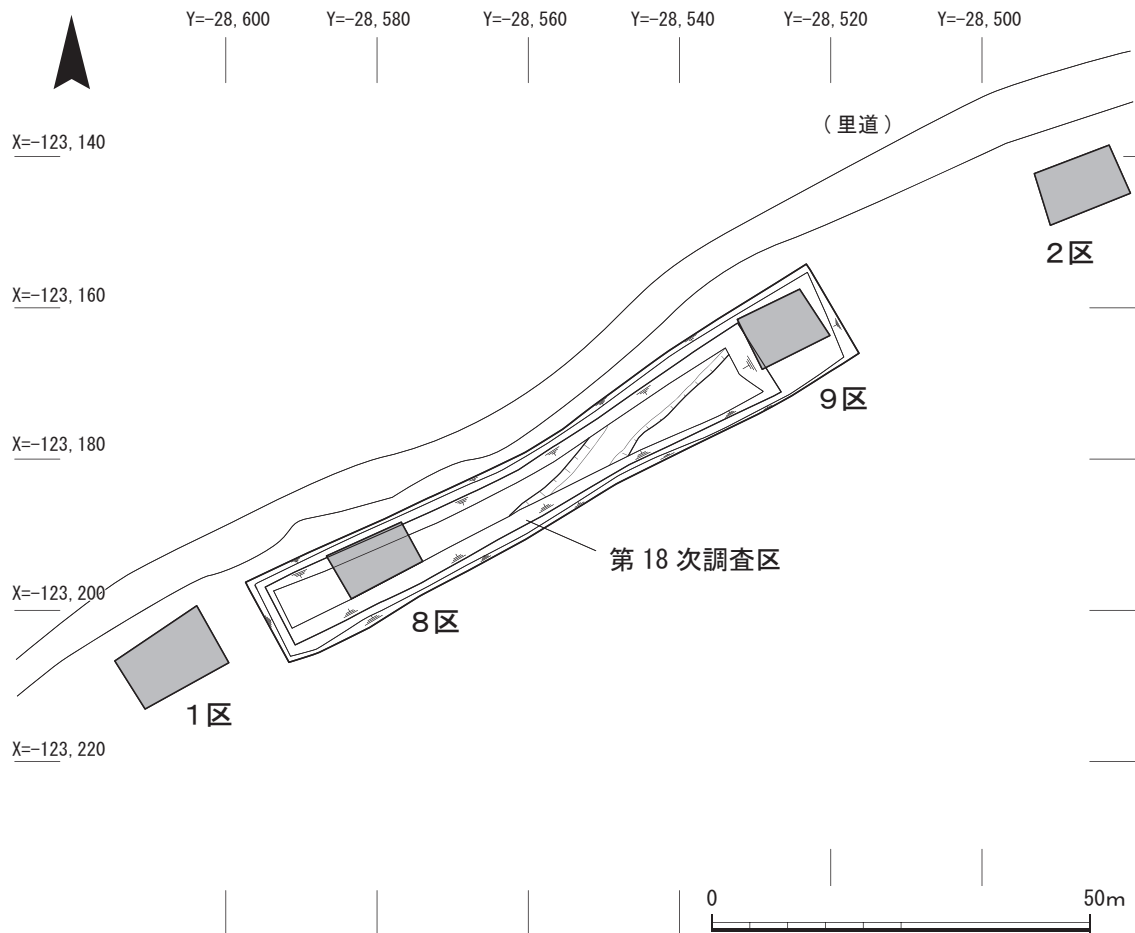
前半期調査は、前年度の8区から9区を包括する範囲を調査区として実施した。(第17図)

現代の盛土と2層である灰色礫層、3層である暗灰色礫層、4層である黄褐色砂礫層を重機によって除去し、比較的安定した堆積状況を示す12・17層の灰色粘質土を人力により除去すると、ほぼ0.5cm間隔で杭列を確認した。

杭列は、調査区の中央部において北側と南側の2条を基本として検出した。北側の杭列の主軸は真北から東に50°、南側の主軸は真北から東に43°を各々測る。各々の杭列は、主軸の一系列を中心に隣接するように不規則に打ち込まれている。北側の杭列頭部は、約20°北方に傾き、南側の杭列も南方に約20°傾くように打ち込まれている。各々の杭列の中心である杭列間の距離は、概



第17図 第18次調査区位置図



第18図 第18次前半期調査区位置図

ね8mである。必ずしも一定間隔を保っているわけではなく、わずかに蛇行する部分もみられる。

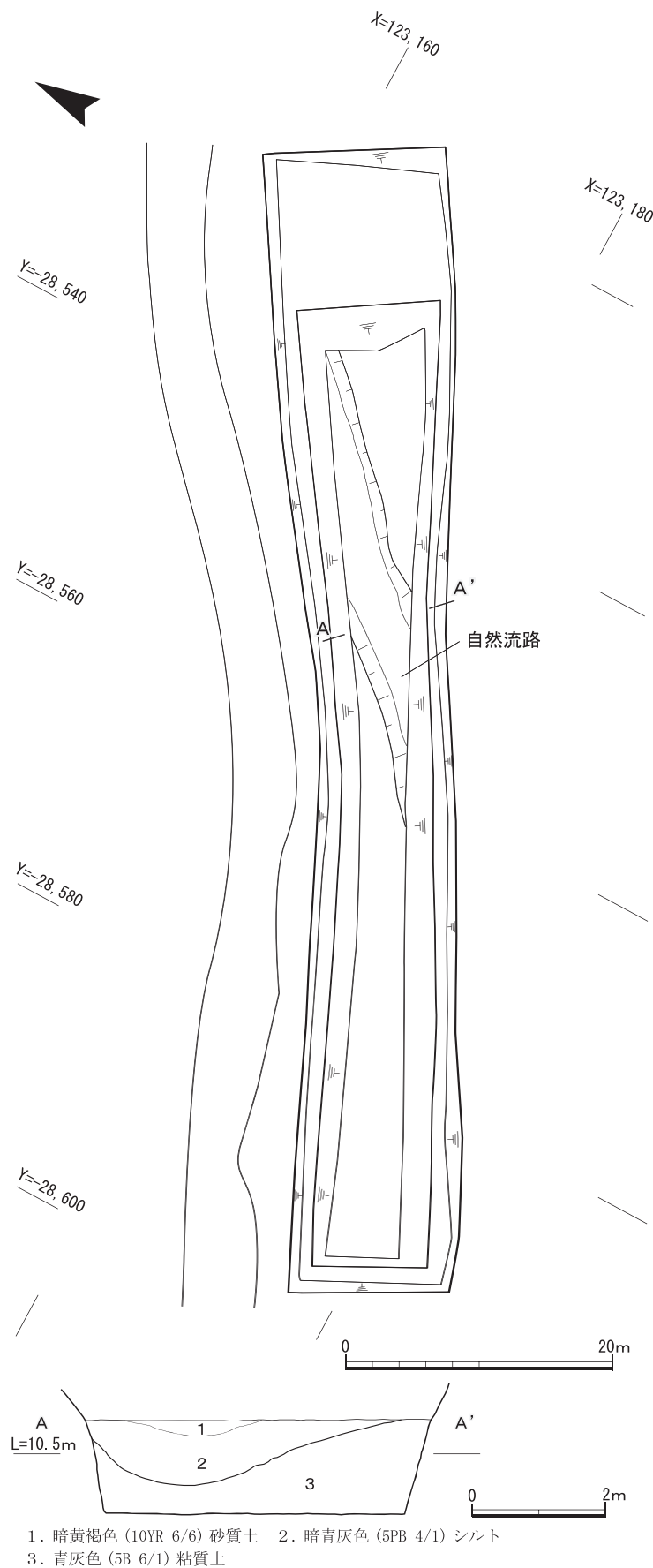
2条の杭列間には、平面的に識別することが困難な状況であるが、部分的な断ち割りを設定し、断面観察を行った結果、灰色粘質土下に灰茶色粘質土と灰色粘砂土が、溝状に堆積する状況が見られた。各杭列は、これらの3層が溝状に落ち込みはじめる地点において検出したことから、3層を堆積土とする流路の兩岸を保護する目的で打ち込まれた可能性がある。

流路の輪郭は、非常に識別し難い状況であり、面的な検出を行いながらも断面によって堆積状況および流路の幅などを確認せざるを得ない状況であった。流路の幅は、概ね6～7mである。

基本的な堆積状況は、最上層に暗黄褐色砂質土（1層）が0.2m堆積し、その下層に暗青灰色シルト（2層）が0.9m堆積している。ベースには青灰色粘質土が堆積している。なお、2層は非常に細かい極細砂と粘土層が互層に堆積している状況であった。

流路の最上層からは、近世末期を中心とする陶磁器類が出土している。出土遺物の絶対量は必ずしも多いわけではないが、当該流路の埋没時期あるいは上流域の再整備などによって当該流路が機能なくなった時期を示す遺物群である。なお、出土遺物の多くは磁器であるが、一合杓や櫛なども出土している。

なお、当該調査区では、平成22年度の調査成果をもとに掘削深度などを想定し、発掘調査を実



第19図 第18次前半期調査区平面図・流路断面図

施した。部分的に深く重機により掘削を行ったが、後に述べる後半期調査で検出したような中世を中心とした遺物包含層は確認し得なかった。

2) 第18次後半期調査

後半期調査区は、先に述べた前半期調査地の南西方向に連続している。

(1) A区(第20～22図) 第17次調査における1区と10区の間を繋ぐようにA区を設定し、さらにその南西方向の山崎橋推定地にB区を設定した。なお、A区は、一連の調査で最も遺物が多く出土した調査地点でもあり、調査当初から相当量の出土遺物が想定されていた。そのため、道路建設予定範囲において効率的に土層堆積状況が把握できることと層位を認識しながら出土遺物を取り上げられるように地表下約1mにおいて作業空間としての平坦部を設定した。また、地表下1.8mにも同じく壁面の崩落などを防止するために平坦部を設けて、作業を実施した。

調査期間中は、基本的には降水量も例年並みであったが、A区の掘削深度が3mに達した段階での湧水が激しく、全体の排水を最深の掘削箇所において行わざるを得な

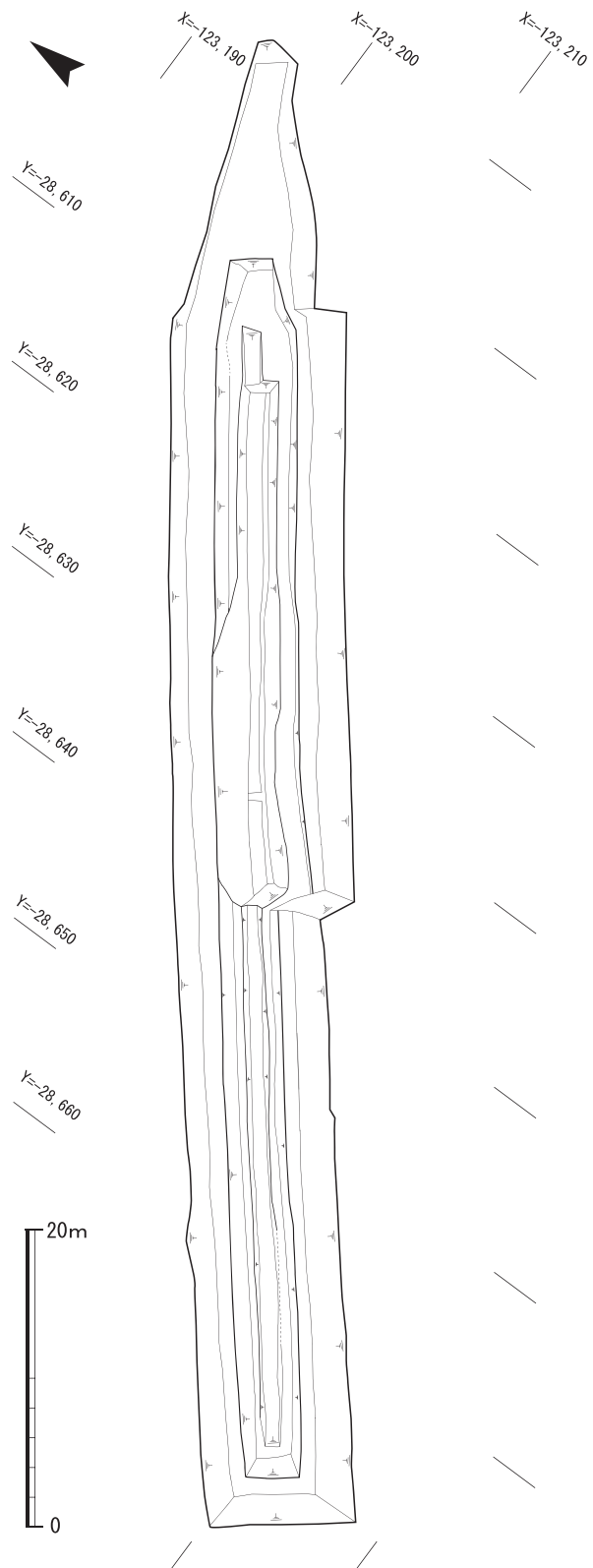
い状況であった。なお、遺物は、10区に向かう南西方向に進むに従って出土量が少なくなる傾向がある。

また、 $X=-122,900\text{m}$ ライン以北東において完形品の状態を保った瓦器碗や木製品などが出土しており、遺物包含層の中心が1区にあることを示している。

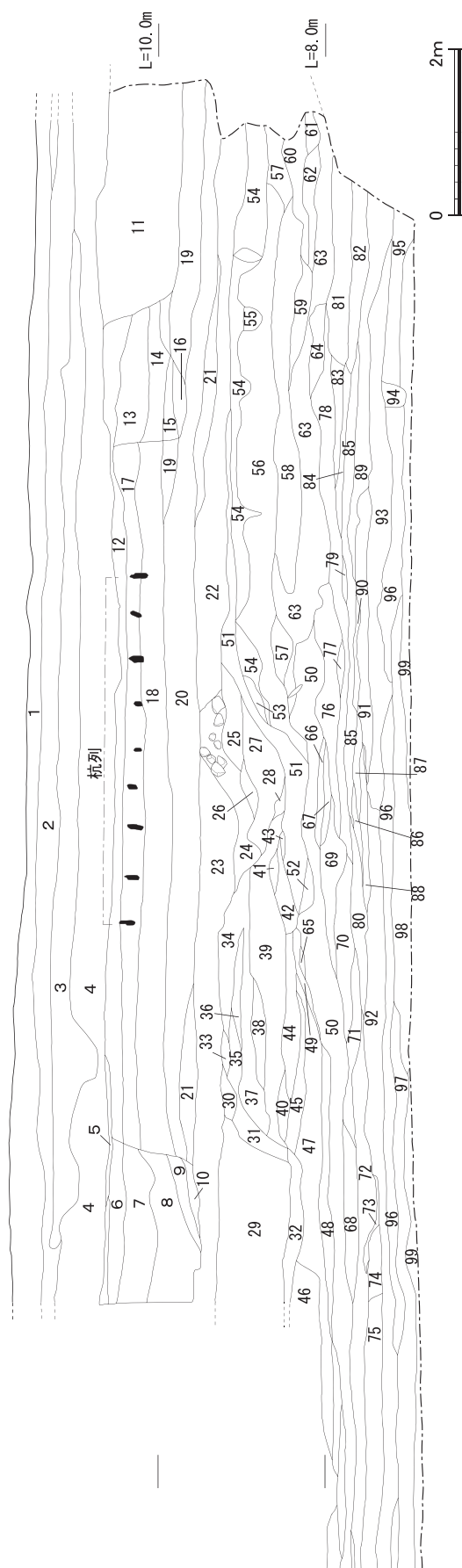
以下の堆積状況の説明は、第21図に図示した北西壁土層断面図により行う。

土層堆積状況は、非常に複雑な状況であり、南東壁面の土層堆積状況の把握だけでは十分に層位毎の遺物取り上げができない状況であったため、北西壁面においても土層断面の図化(第21図)を行い、層位確認を行った。なお、南東壁断面図(第22図)は、作業を効率的に進めるために設定した上段平坦面以下において図示しており、それ以上の土層断面図は、基本的には北西壁堆積状況とほぼ同一である。なお、堆積層は上位堆積層群と下位堆積層群の2群に分層することができる。

上位堆積層群は、表土を含め1層～23層までの層として認識した。部分的に39・56・63層などの比較的厚く、断絶する堆積層を含んでいるが、基本的に水平に堆積する層群からなる。堆積深度は標高9m前後までである。なお、南東壁面に堆積する上位堆積層群は、明治34年の淀川改修工事に伴って建設された煉瓦造りの樋管設置のための掘り方により、大きく攪乱されており、すでに堆積層序は失われている状況であり、かろうじて北西壁面において残存していることを確認した。上位堆積層群の17・18層において



第20図 第18次後半期A区平面図



1. 表土 (暗茶色土) 現代盛土
2. 灰色礫土
3. 暗灰色礫土
4. 黄褐色砂礫土
5. 暗灰色粘質土 (ヤンガン分を含む)
6. 明褐色細砂
7. 明灰褐色細砂
8. 明茶色細砂
9. 茶灰色細砂
10. 灰色シルト
11. 旧1トレンチ埋土
12. 灰色粘質土
13. 明褐色細砂
14. 茶灰色細砂
15. 灰茶色細砂
16. 茶色細砂
17. 暗灰色粘質土
18. 灰色粘質土
19. 暗灰色土
20. 灰茶色粘質土

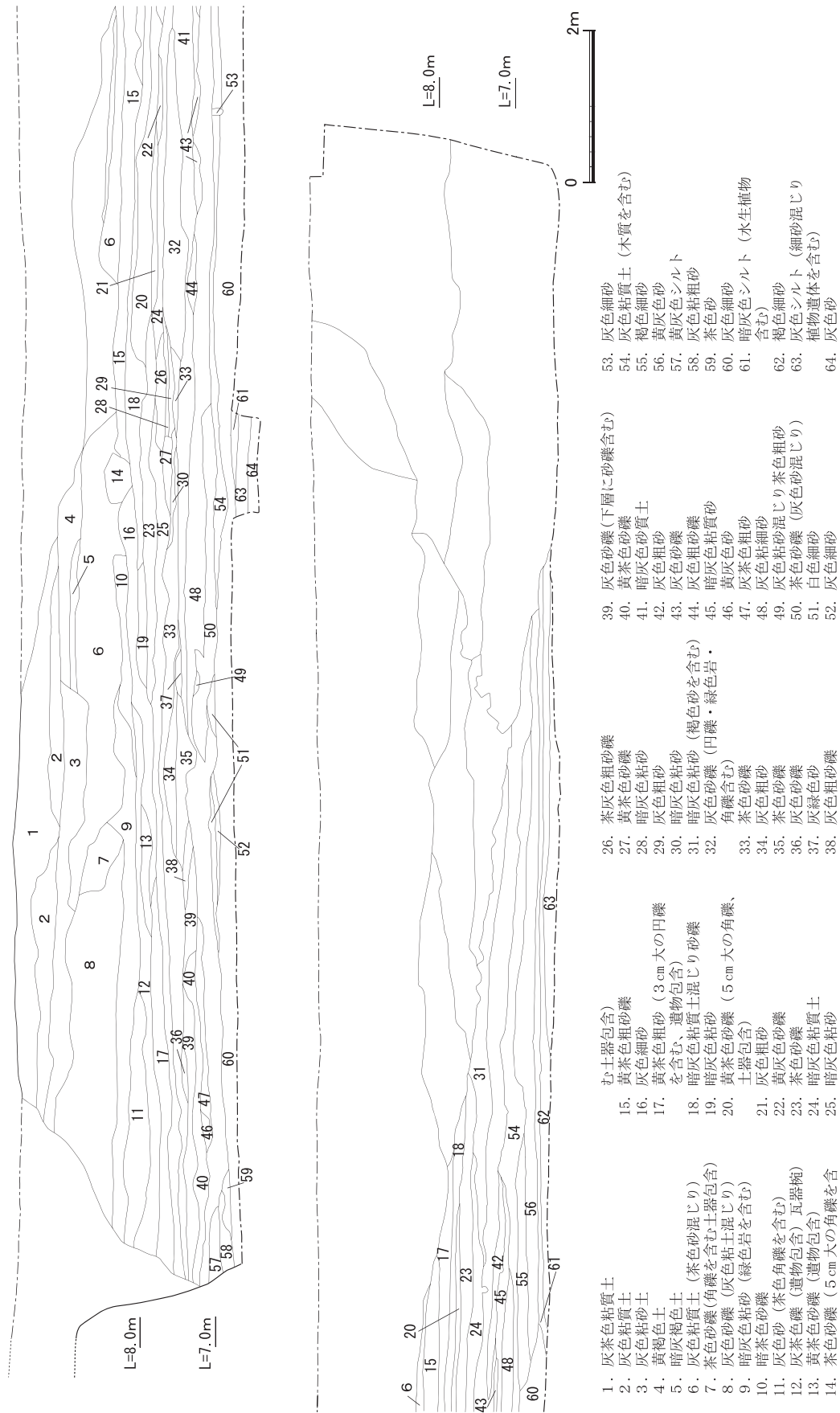
21. 灰色粘質土
22. 灰色粘砂土
23. 灰色粘質土
24. 灰色粘質土 (茶色砂混じり)
25. 灰色粘質土
26. 暗灰色粘質土
27. 灰色粘質土 (木質を含む)
28. 砂層のラミナ砂礫
29. 暗灰色粘質土
30. 灰色粘質土
31. 褐色砂礫
32. 暗灰色粘砂
33. 灰色砂礫
34. 茶色砂礫
35. 茶色砂礫
36. 灰色粘質土
37. 暗灰色粘質土
38. 灰色粘質土
39. 灰色砂礫 (灰色粘土混じり)
40. 茶色砂礫
41. 茶色砂礫 (角礫を含む土器

42. 暗灰色粗砂 (角礫を含む土器包含)
43. 茶色砂礫
44. 茶色粗砂礫
45. 灰色粘砂
46. 灰色砂礫
47. 茶色砂礫 (土器包含)
48. 灰茶色砂礫
49. 灰色粗砂
50. 灰茶色砂礫 (土器包含)
51. 灰色粘質土
52. 茶色砂礫 (灰色粗砂混じり)
53. 茶色砂礫 (角礫を含む土器包含)
54. 灰色粘質土
55. 灰色砂礫 (灰色粘土混じり)
56. 灰色砂礫
57. 茶色砂礫 (角礫を含む土器包含)
58. 茶色砂礫
59. 茶色砂礫
60. 茶色粘砂
61. 茶色粘質土

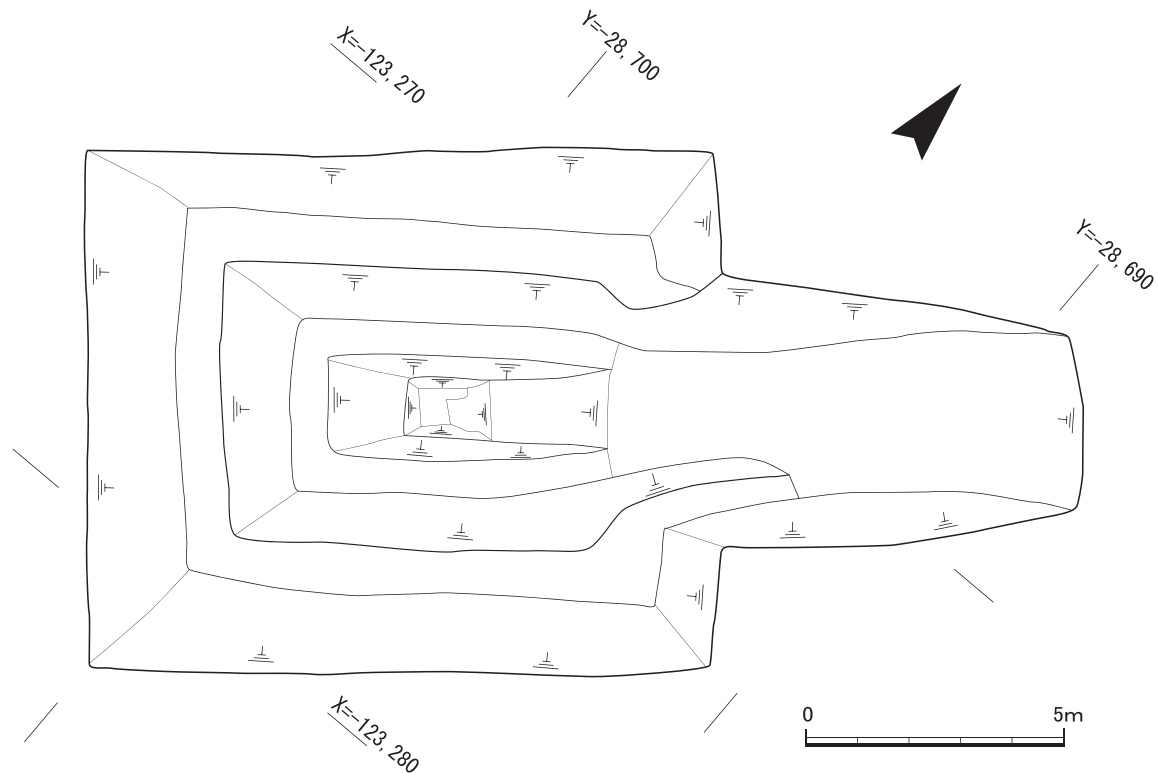
62. 灰黄色砂
63. 灰黄色粗砂礫
64. 灰黄色砂
65. 茶色砂
66. 灰茶色砂礫
67. 灰茶色砂礫 (土器含む)
68. 茶色砂礫
69. 茶色砂礫
70. 黄灰色粗砂礫
71. 暗灰色粘砂 (木質を含む)
72. 灰色粗砂
73. 暗灰色粘砂
74. 灰色粗砂礫 (緑色岩を含む)
75. 暗灰色粘砂
76. 黄茶色粗砂
77. 灰黄色砂
78. 灰色粗砂
79. 灰色粘砂
80. 茶色砂礫
81. 灰茶色砂礫
82. 茶色砂礫

83. 灰色シルト
84. 暗灰色粘質土
85. 灰色粗砂礫
86. 茶色砂礫
87. 茶色砂礫
88. 黄灰色粗砂
89. 灰色粘粗砂
90. 灰色砂
91. 茶色砂礫 (土器包含)
92. 暗灰色粘砂 (砂礫をレンズ状に含む緑色岩を含む)
93. 茶色砂礫 (灰色砂を綿状に含む)
94. 黄茶色砂礫 (木質・有機物を含む)
95. 灰色粘質土
96. 暗灰色粘砂
97. 暗灰色粘砂 (灰色粗砂を含む)
98. 灰色粘砂 (茶色砂礫混じり)
99. 灰色細砂

第21図 第18次後半期A区北西壁土層断面図



第22図 第18次後半期A区南東壁土層断面図

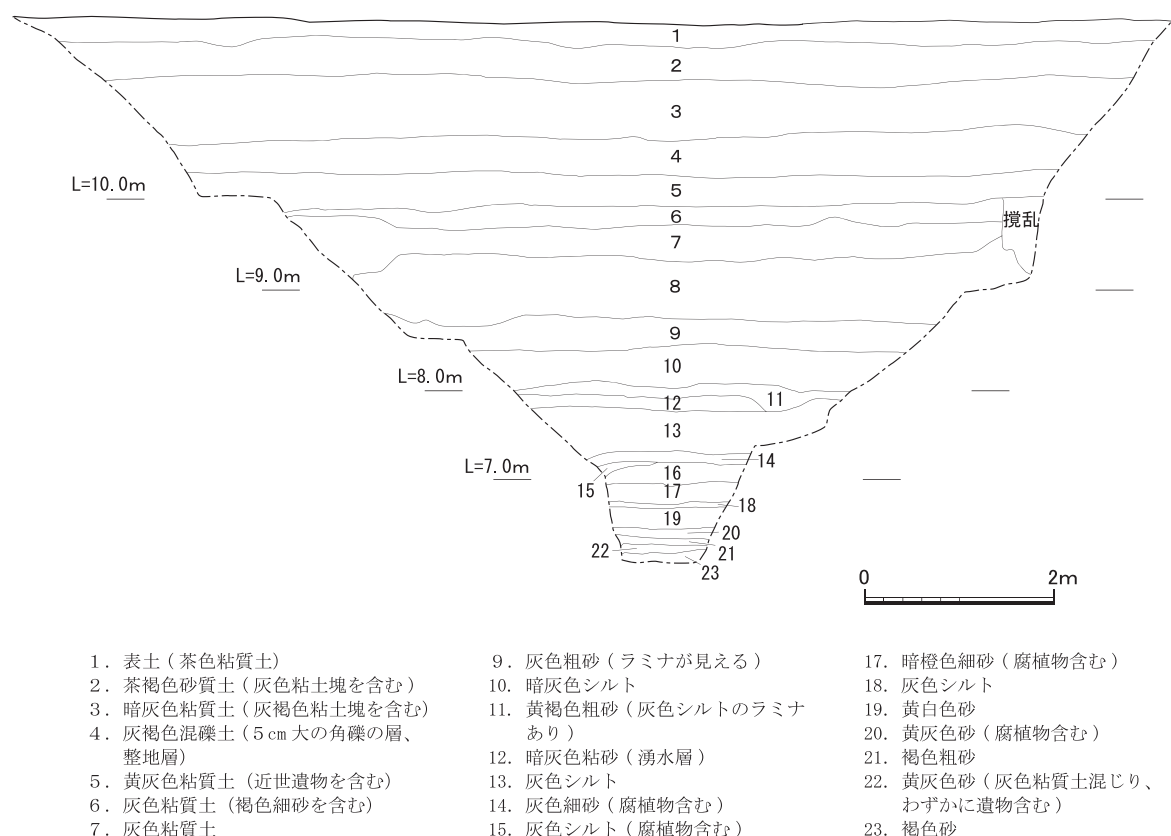


第23図 第18次後半期B区平面図

杭を検出している。杭の方向は、前半期調査区で検出した杭列よりもやや北西に振っているが、検出した層位などは酷似していることから、同様の用途も想定することもできる。なお、20層までの堆積層からは、ほとんど遺物は出土していないが、わずかな出土遺物から概ね近世以降に堆積したと考えられる。

一方、下位堆積層群は、非常に細かな砂層や粘質土が主体となる堆積層が中心である。各々の堆積層をより詳細に観察すると、各堆積層の下位には比重の重い堆積物が堆積し、上位には比重の軽い堆積物が堆積している。それらの多くは、ラミナ状に堆積しており、急激な流水ではなく、緩やかな滞留水により堆積したと考えられる。堆積土中には、大山崎町に所在する丘陵中に含まれる緑色系の礫がみられることから、桂川の流水によって堆積した堆積物ではなく、丘陵側からの堆積物と考えられる。特に、標高7.5m前後の80～96層から瓦器碗の完形品や木製品が出土しており、人為的に整地した堆積層も含まれていると考えられる。

標高7.0～7.5mの堆積層からは、先に述べたように瓦器碗や土師器皿の完形品とともに、篋、箸、漆器などの木製品が数多く出土している。また、当該堆積層から猫などの獣骨や人骨などが出土している。面的に遺構検出を行ったが、柱穴などの遺構を検出することはできなかった。しかし、完形の状態を保った土器や獣骨、人骨の出土は、調査地一帯が建物などを建てる居住空間ではなく、居住空間の川側に隣接する不用品の廃棄場所として土地利用されたのではないかと考えられる。これらの堆積層群の堆積時期は、一部に奈良時代の土器や瓦が混入するものの、12世紀後半から13世紀前半に堆積した堆積層と考えられる。



第24図 第18次後半期B区南東壁土層断面図

(2) B区(第23・24図)

山崎橋推定地に設定した調査区であり、中心点はX=-122,930m、Y=-28,960mを測る。調査区内に出入りするための斜路を北東面に設定したが、地表上5×6mの調査区を設定し、作業空間確保と壁面崩落防止のための平坦面を2段に設けて調査を実施した(第23図)。

基本的な堆積状況(第24図)は、後半期調査A区北西壁面と同じであり、標高8.5m前後に堆積する8層からわずかに中世の遺物が出土している。しかし、それ以下の堆積層からの遺物は出土していない。特に、12層以下の堆積層には、植物遺体を包含しており、桂川による河川堆積層として認識できる状況である。先に述べたA区とは堆積環境が異なることから、土地利用のあり方についても大きく異なっていると考えられる。8層以下の堆積層自体に人為的な整地層を認識できない状況から、当該地点の周辺域には橋などの構造物を構築できる条件下にはなかったと考えられる。なお、堆積層を掘り下げる際、ピットなどの検出に努めたが、面的な調査を行った結果、明確な遺構を検出することはできなかった。

今回の発掘調査によって、山崎橋の推定地周辺での堆積状況を把握できた意義は少なくないといえよう。

(小池 寛)

3)出土遺物

第18次調査では、土器、陶磁器、瓦、石製品、木製品などの多様な遺物が出土した。時期的には、古代から近代にわたる。なお、当年度の調査で出土した遺物は、整理箱50箱である。

(1)第18次前半期調査区(第25図)

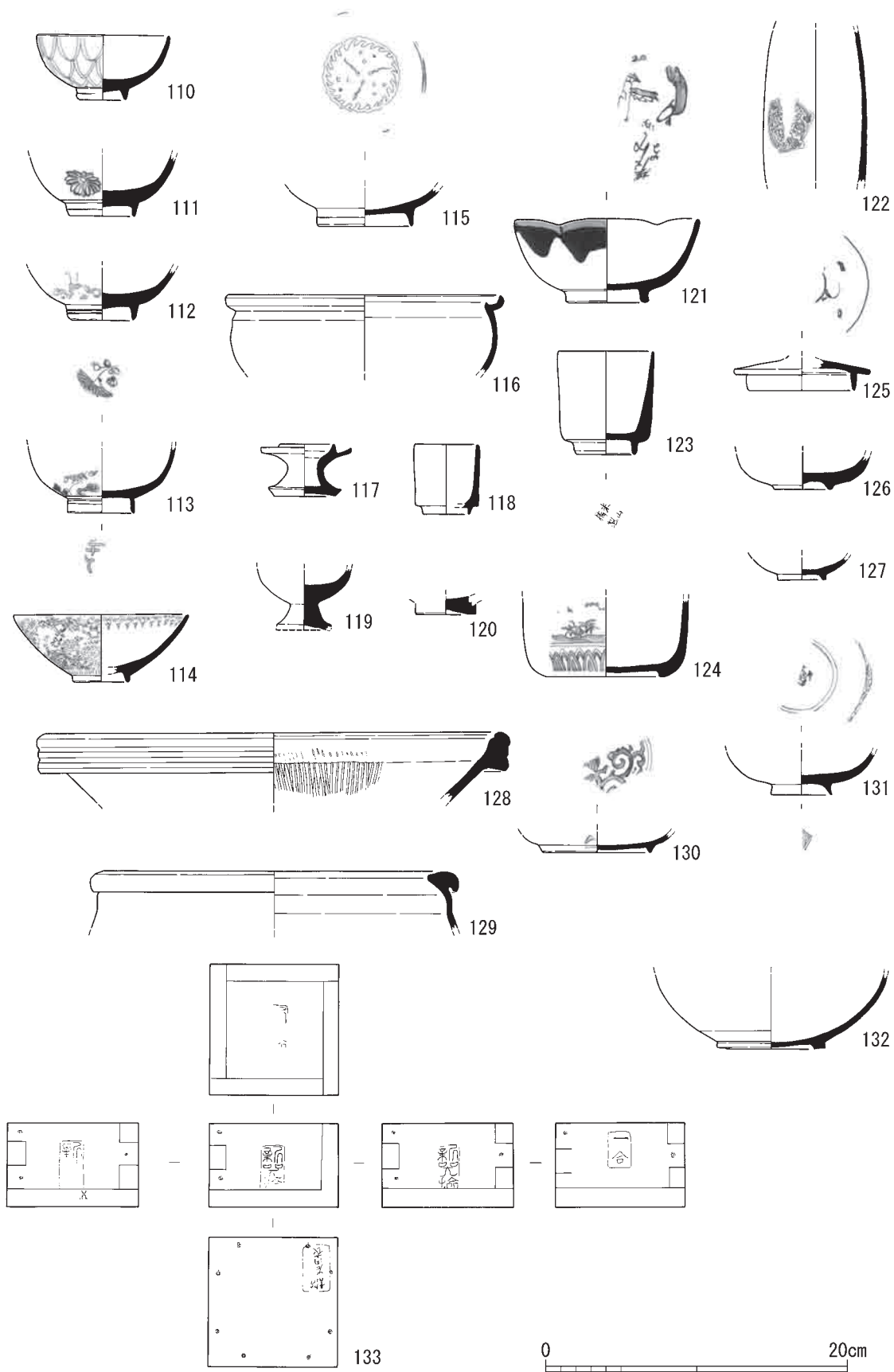
110～112は肥前磁器(伊万里)染付碗で、底部が厚く、いわゆる「くらわんか」手である。110は二本引きの網目文、111はコンニャク印版で花文を施す。113・115・126・127・131は染付磁器碗である。114は型紙印版の染付磁器碗である。118・123は磁器筒形碗である。119は磁器仏飯器である。121は染付磁器鉢である。122は銅版印版の磁器徳利である。124は染付磁器の蓋物で、底部は碁笥底状になる。130は染付磁器皿で、見込みに唐草文を描く。肥前系の製品か。116は京焼系の陶器鍋である。117は陶製の灯火器である。125は陶器土瓶の蓋で、信楽産とみられる。132は陶器鉢の底部で、京都もしくは信楽産とみられる。128は堺系の播鉢とみられる。129は陶器甕の口縁部である。以上の陶磁器は、18世紀以降の所産とみられ、特に114や122は19世紀中頃以降の明治時代の所産とみられる。133は木製の一合枡である。

(2)第18次後半期調査区

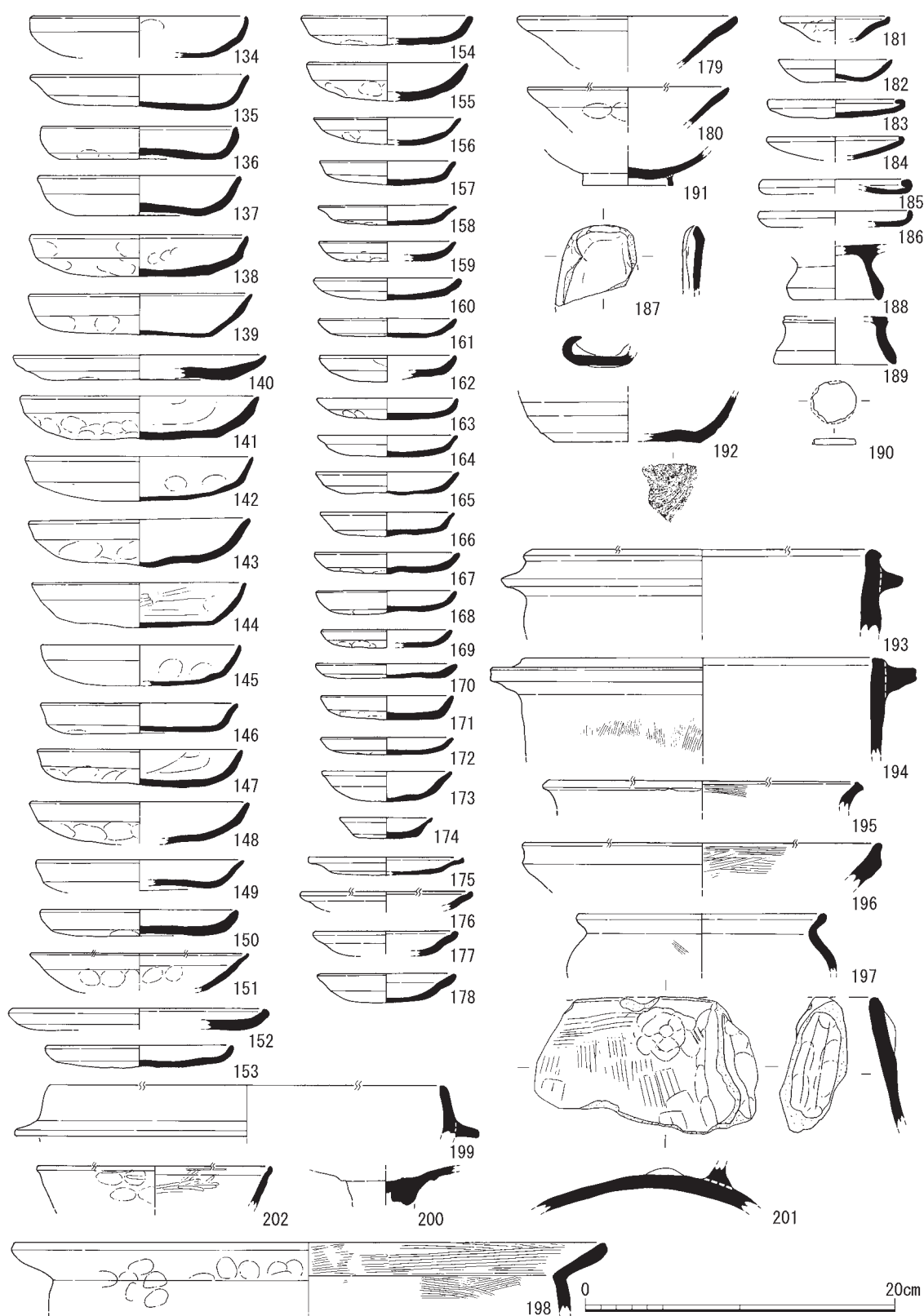
①土師器(第26図) 134～153は外面をヨコナデする土師器皿で、口径は13～14cmを測るものが多い。12世紀後半～13世紀頃のものともみられる。154～174は上記の土師器皿の小型のもので、口径8～9cmを測るものが多い。174はロクロ成形の土師器皿とみられる。175～178は屈曲した口縁部をもつ「て」字状口縁の土師器皿である。口径がやや小さ目で屈曲の曖昧なものもあり、11世紀以降の所産とみられる。181・182は、底部を外側から押し窪めた、いわゆる「へそ皿」とよばれる土師器皿である。14世紀頃の所産とみられる。179・180は、口縁部が直線的に立ち上がる土師器皿で15～16世紀頃の所産とみられる。187は土師器耳皿である。183～186は口縁端部を内側に折り曲げた土師器皿でいわゆるコースター形のものである。188・189は脚付土師器皿の脚部である。190は土師器皿の底部を泥面子状に丸く整形した玩具とみられる。191は土師器碗で貼り付け高台をもつ。192は土師器杯で底部糸切りである。199は土師器羽釜、193・194は摂津産の土師質の羽釜である。195～198は土師器甕である。200は土師器高杯の杯部とみられる。201は土師質の竈である。202は黒色土器碗である。

②瓦器・瓦質土器(第27・28図) 203～205は瓦器碗で内面には密なミガキ、外面にもミガキがみられる。見込みにはジグザグ状の暗文を施す。口縁端部内面には沈線が巡り、台形状の貼り付け高台をもつ。楠葉系の製品とみられる。206は上記の碗と同様の調整や形態をもつが、見込みの暗文がラセン状で、楠葉系の製品とみられる。207は内面に密なミガキ、外面にもミガキが施される。見込みの暗文はラセン状である。口縁端部内面には段状の沈線が巡る。大和系の製品か。以上の瓦器碗は、12世紀頃の所産と考えられる。口径は14.1～15cm、器高5～5.8cmを測る。

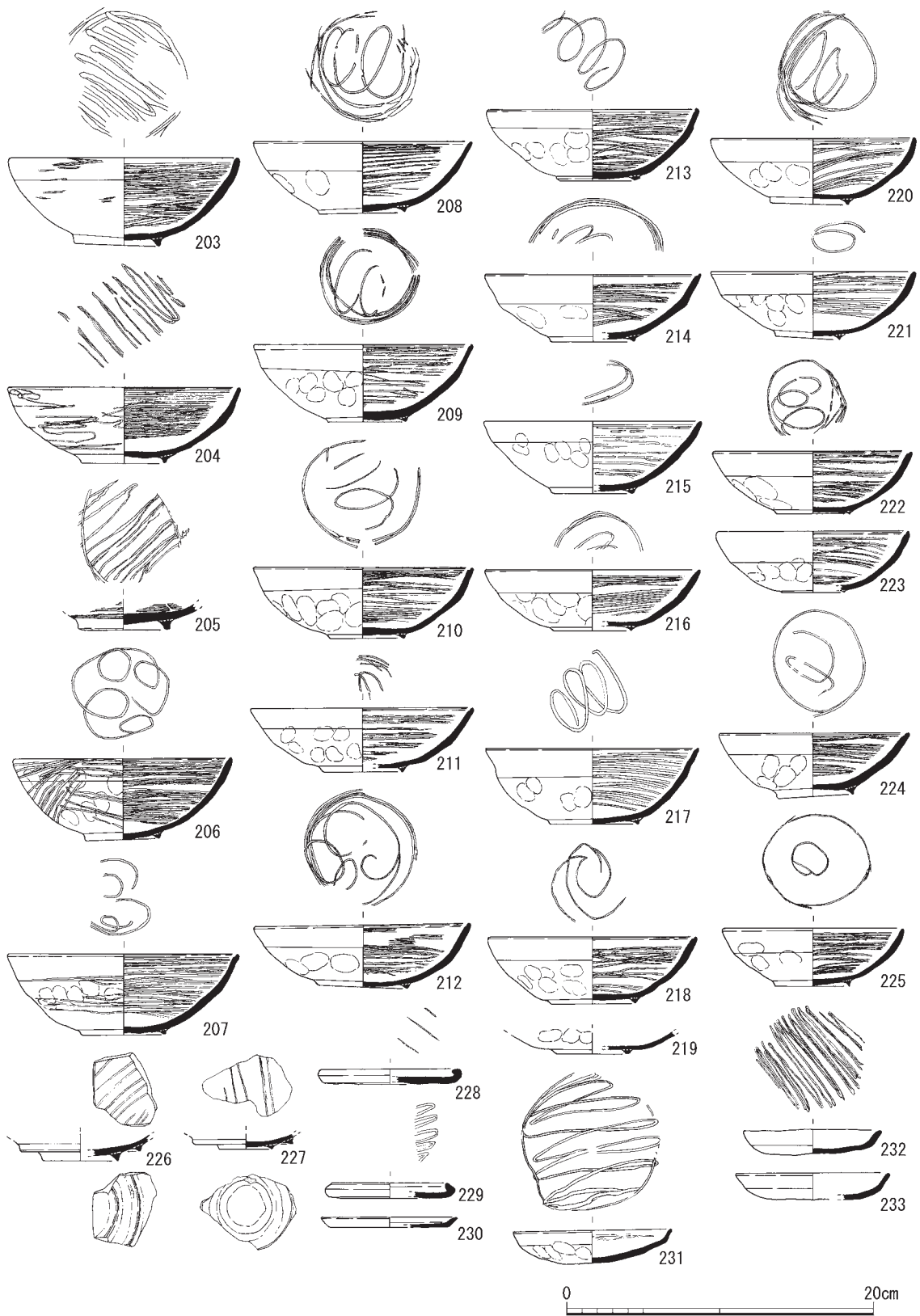
208～225は瓦器碗で内面にはやや疎らなミガキがみられるが、外面にはミガキがみられない。口縁端部内面には沈線が巡り、三角形の張り付け高台をもつ。見込みの暗文はラセン状である。楠葉系の製品とみられる。13世紀頃の所産とみられる。口径は、13.8～14.2cmのもの、12.6～



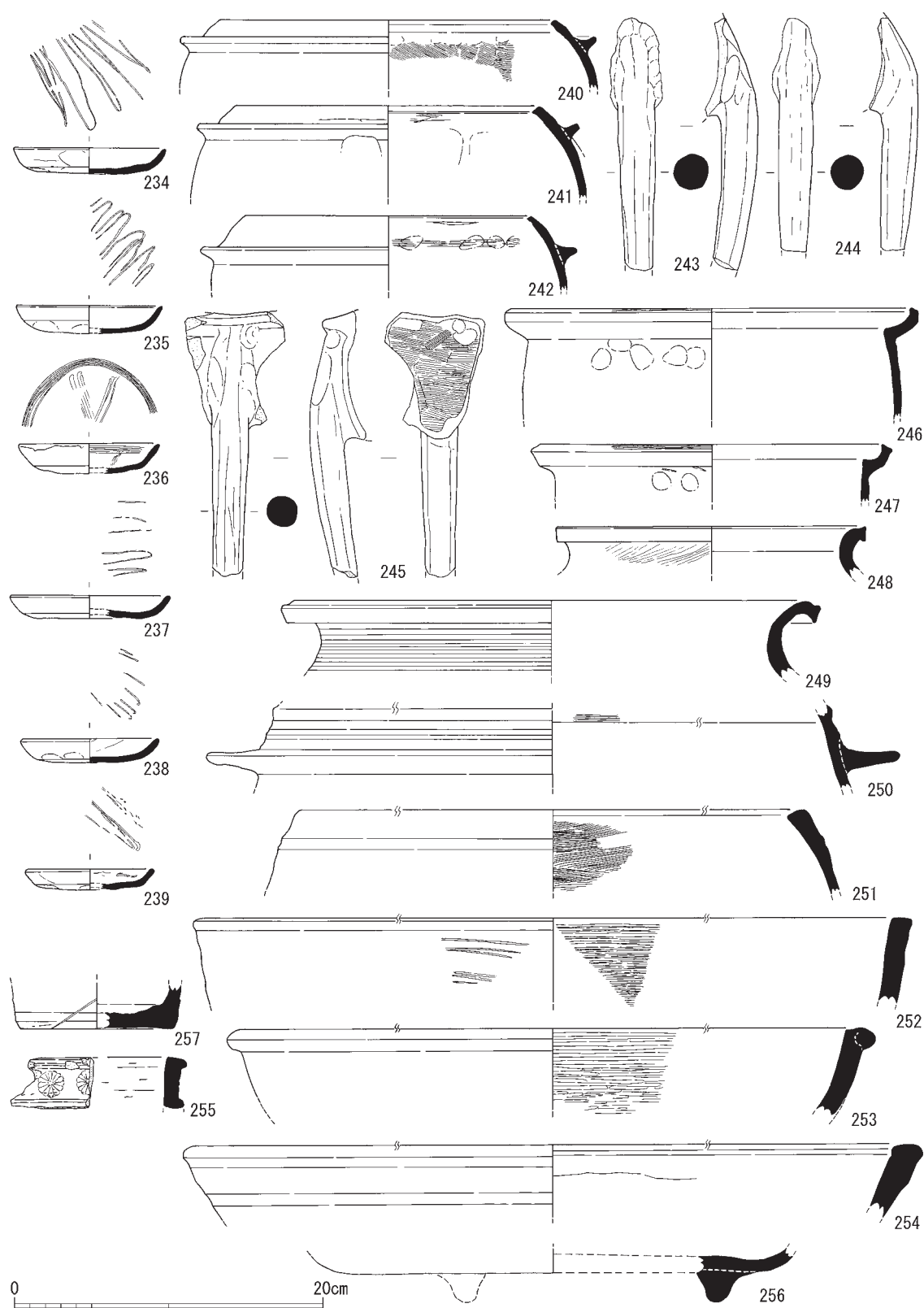
第25図 第18次前半期調査区出土遺物実測図



第26図 第18次後半期調査区出土遺物実測図1(土師器)



第27図 第18次後半期調査区出土遺物実測図2(瓦器)



第28図 第18次後半期調査区出土遺物実測図3 (瓦器、瓦質土器)

13.4cmのもの、11.7～12.2cmのものがあり、時期的な変遷を示す可能性がある。器高は1～3.8cmを測る。

226・227は二重の高台をもつ瓦器碗で、色調は白味を帯びる。吉備系の製品の可能性がある。228・229はいわゆるコースター形の瓦器皿である。内面にジグザグ状の暗文を施す。口径7.4～9.1cm、器高1cmを測る。230は瓦器皿で、平坦な底部から口縁部が明瞭に屈曲して斜め上方に立ち上がる。231～239は瓦器皿で、丸味をもつ底部から口縁部が屈曲して斜め上方に立ち上がる。口径は9～10.4cm、器高1.4～2.3cmを測る。

240～242は瓦質羽釜である。241には脚が付いていた痕跡がある。13世紀頃の所産か。口径21.8～18.4cmを測る。243～245は瓦質羽釜の脚である。246・247は瓦質鍋である。口縁部が受け口状になる。248・249は瓦質甕の口縁部である。250・251は瓦質罌釜である。252～254は瓦質鉢の口縁部である。255は瓦質火舎の口縁部である。印花文を施す。256は瓦質火舎の底部である。低い貼り付けの脚を付す。257は瓦質瓶の底部とみられる。

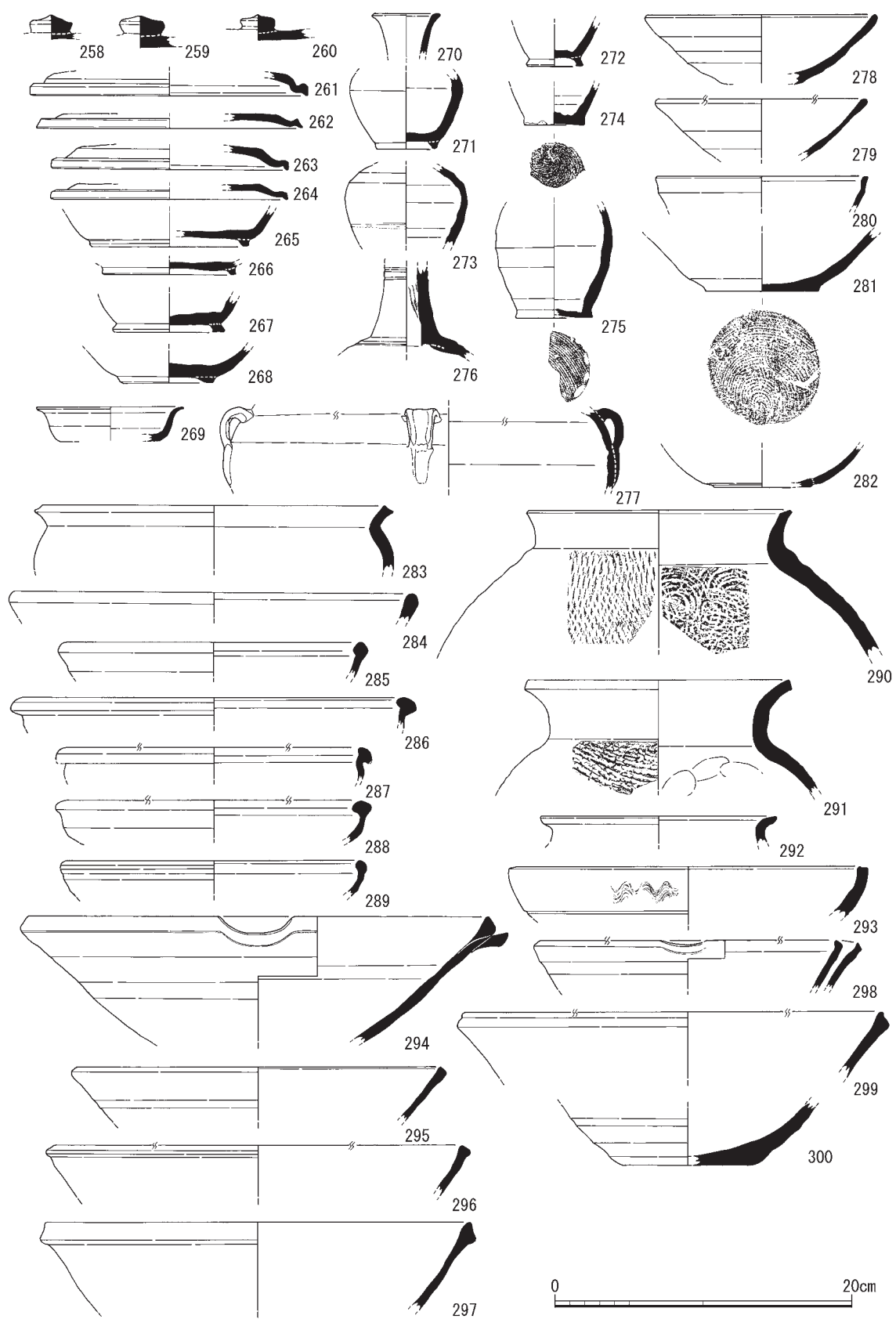
③須恵器・須恵質土器(第29図) 258～264は須恵器杯蓋で宝珠つまみが付くものとみられる。口縁端部が屈曲する。8世紀後半～9世紀頃の所産とみられる。265・266は須恵器杯Bである。8世紀末～9世紀頃の所産とみられる。267・268は須恵器壺もしくは鉢の底部とみられる。269は須恵器皿で、口縁端部が外反する。270～275は小型の須恵器壺である。271・272は貼り付け高台で8世紀頃の、274・275は糸切り高台で9世紀頃の所産とみられる。276は須恵器長頸壺、277は縦耳を付した須恵器壺である。278～282は須恵器碗で、281は糸切り高台である。283～289は須恵器鉢で亀岡市篠窯の製品とみられる。9世紀～11世紀頃の所産とみられる。290～292は須恵器甕である。293は端部に波状文を巡らす須恵器である。294～300は東播系の須恵器鉢で、12世紀末～13世紀頃の所産とみられる。

④緑釉・灰釉陶器(第30図) 301～312は緑釉陶器である。301～306は京都系の緑釉陶器で、削り出し高台である。303は底部に沈線を円形に巡らして蛇の目高台状にする。亀岡市篠窯跡群の前山2・3号窯出土遺物に同様のものがある。10世紀頃の所産とみられる。308～312は近江系の緑釉陶器で、高台端部が段状になる。313は緑釉壺の体部とみられる。

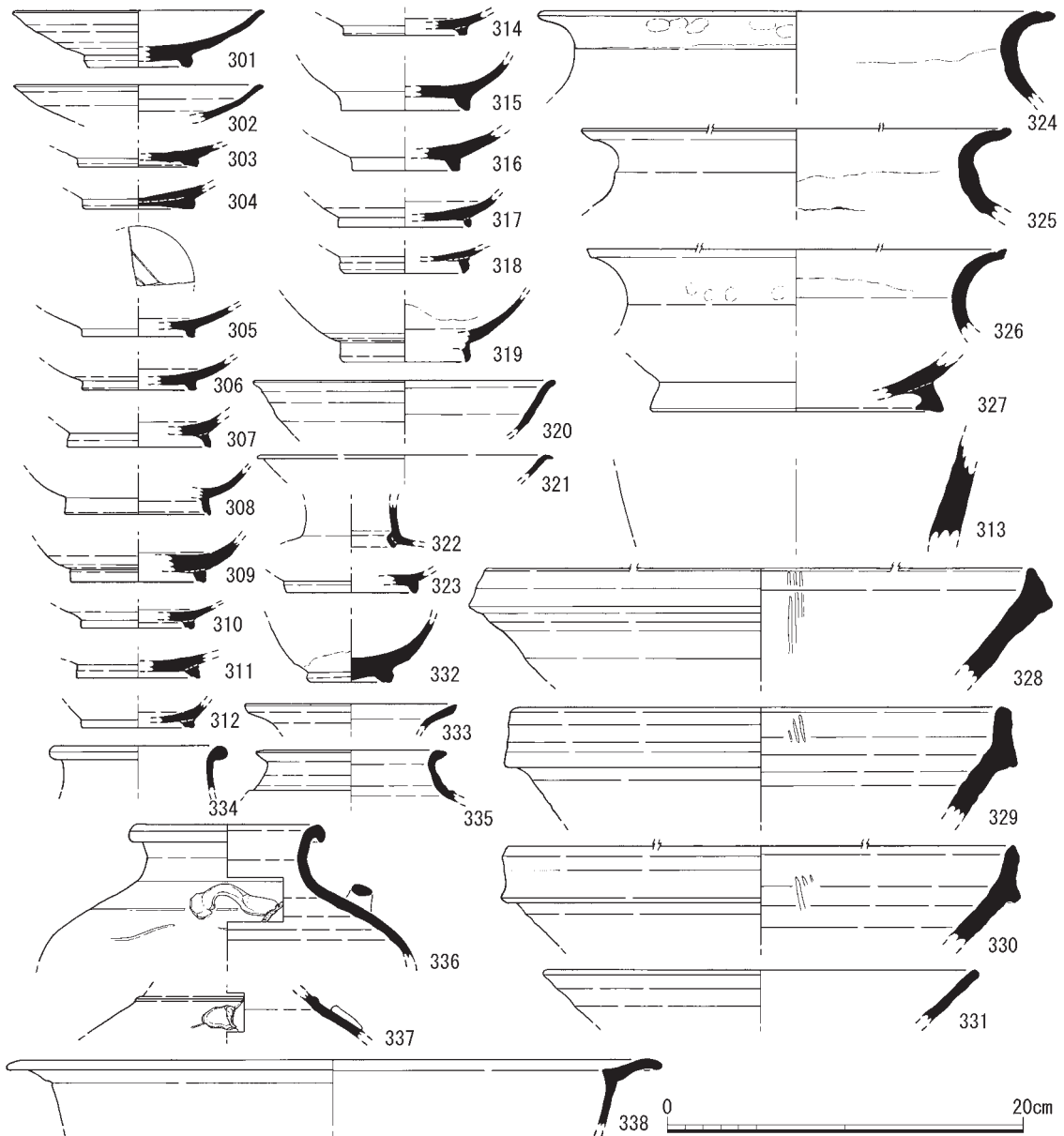
314～322は東海産の灰釉陶器である。9世紀以降の所産である。323は東海産の山茶碗とみられる。京都近辺では出土例の少ないものである。

⑤陶器(第30図) 324～326は常滑産甕の口縁部である。口縁端部に沈線が巡る。12世紀頃の所産とみられる。328～330は備前産の擂鉢である。14～16世紀頃の所産か。331は瀬戸産の灰釉鉢で15世紀頃の所産とみられる。332は肥前陶器(唐津)碗、333は肥前陶器皿である。17世紀初頭頃の所産とみられる。

⑥中国製陶磁器(第30・31図) 336は褐釉壺で、肩部に横耳を付し、口縁端部を垂下させる。口径10.2cmを測る。337は褐釉壺で、肩部に横耳を付した痕跡があり、頸部と肩部の境に細い凸帯をもつ。334は褐釉壺で、口縁部及び頸部が残存する。口縁端部は丸く肥厚する。口径9cmを測る。335は褐釉壺で、口縁部および頸部が残存する。口縁端部は肥厚し、上部は平坦になる。



第29図 第18次後半期調査区出土遺物実測図4(須恵器、須恵質土器)

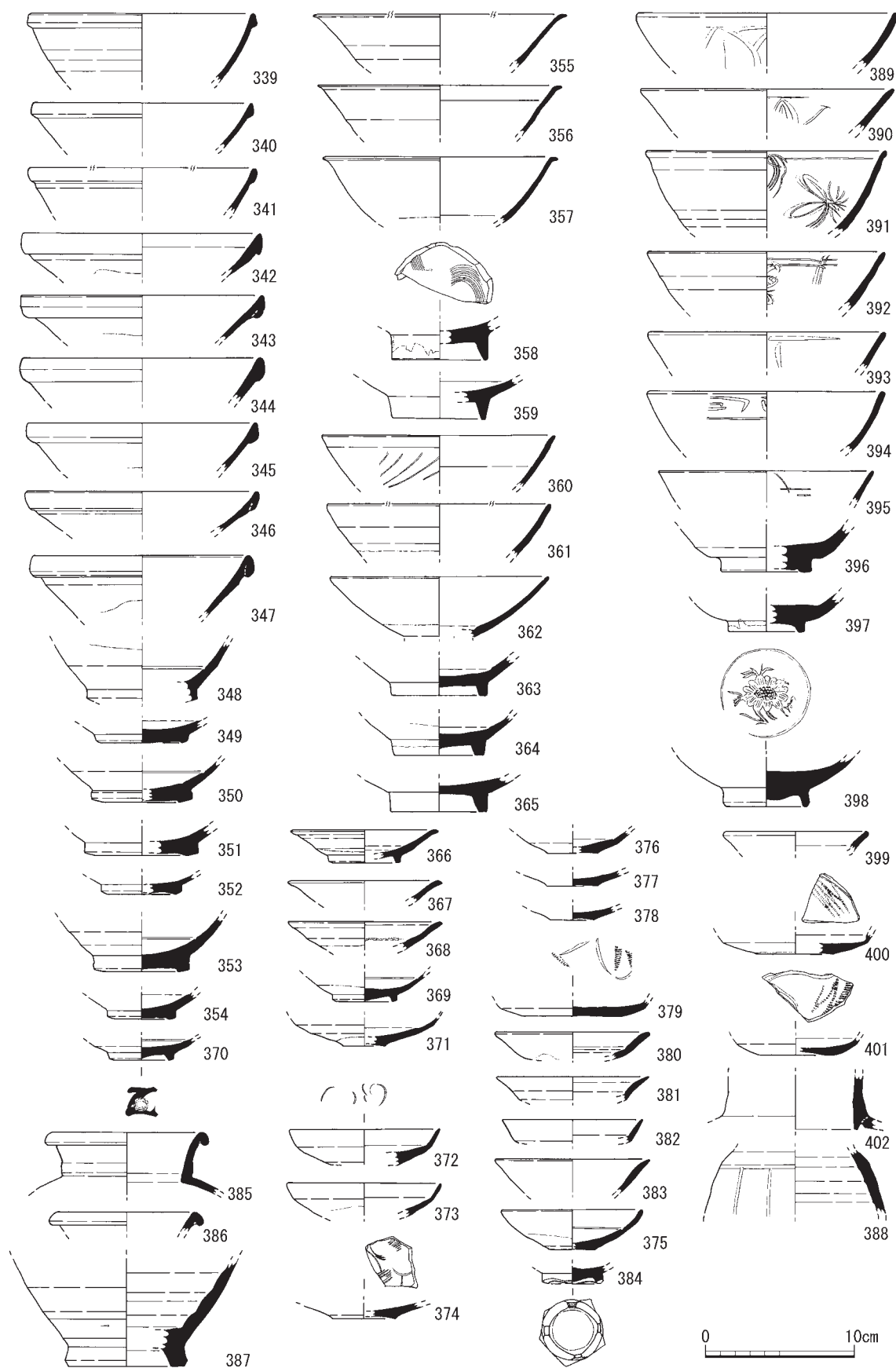


第30図 第18次後半期調査区出土遺物実測図5(緑釉・灰釉陶器、陶器、中国製陶磁器)

口径9.5cmを測る。338は黄釉盤で、外面は無釉である。口径35cmを測る。これらの褐釉・黄釉陶器は、12世紀頃の所産とみられる。

339～347は口縁端部が玉縁状になる白磁碗である。やや細目の玉縁状口縁のもの(339～341)と太目の玉縁状口縁のものがある。口径16.1～14.4cmを測る。348～354は玉縁状口縁の白磁碗の底部である。高台の削り込みは浅く、畳付は広めである。355～357は口縁端部が屈曲して平坦面をもつ白磁碗で、口径16.4～15cmを測る。358・359は口縁端部が屈曲して平坦面をもつ白磁碗の底部で、細目で高い高台をもつ。363～365は白磁碗で、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁端部は丸く納める。360は外面に細い放射状の線文をもつ。363～365は白磁碗の底部である。やや幅広の高台をもつ。これらの白磁碗は、12世紀頃の所産とみられる。

366～369は白磁皿で、口縁部が外反し、高台は削り出しである。370は高台内に墨書がある。



第31図 第18次後半期調査区出土遺物実測図6(中国製陶磁器)

371～378は白磁皿で、底部は窪み気味に平滑にヘラケズリされる。見込みに片刃彫および櫛描きで施文されるものがある。379は平底の白磁皿である。380～383は白磁皿で、底部から口縁部が屈曲して外反気味に立ち上がる。以上の白磁皿は、12世紀頃の所産とみられる。379は見込みに櫛描き等で施文される白磁皿である。384は白磁皿で高台に4か所の抉り込みがある。15世紀頃の所産とみられる。

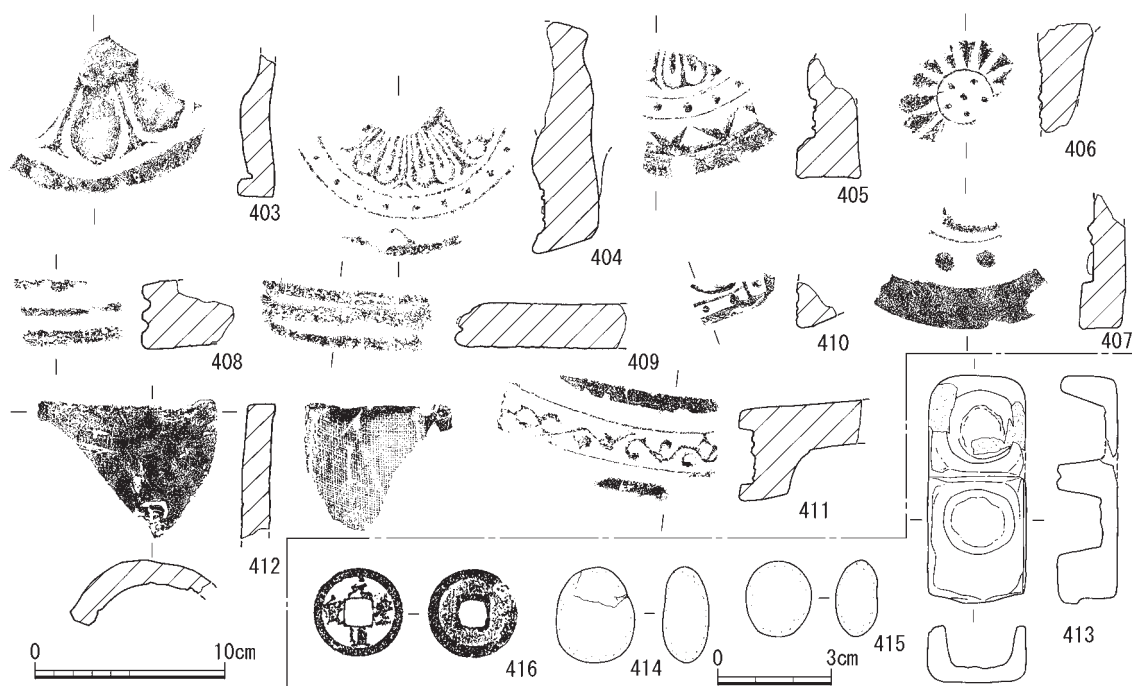
385～387は白磁壺で、口縁部を垂下させ、高台は削り出しである。12世紀頃の所産とみられる。

388は青白磁の瓜形瓶である。12世紀頃の所産とみられる。

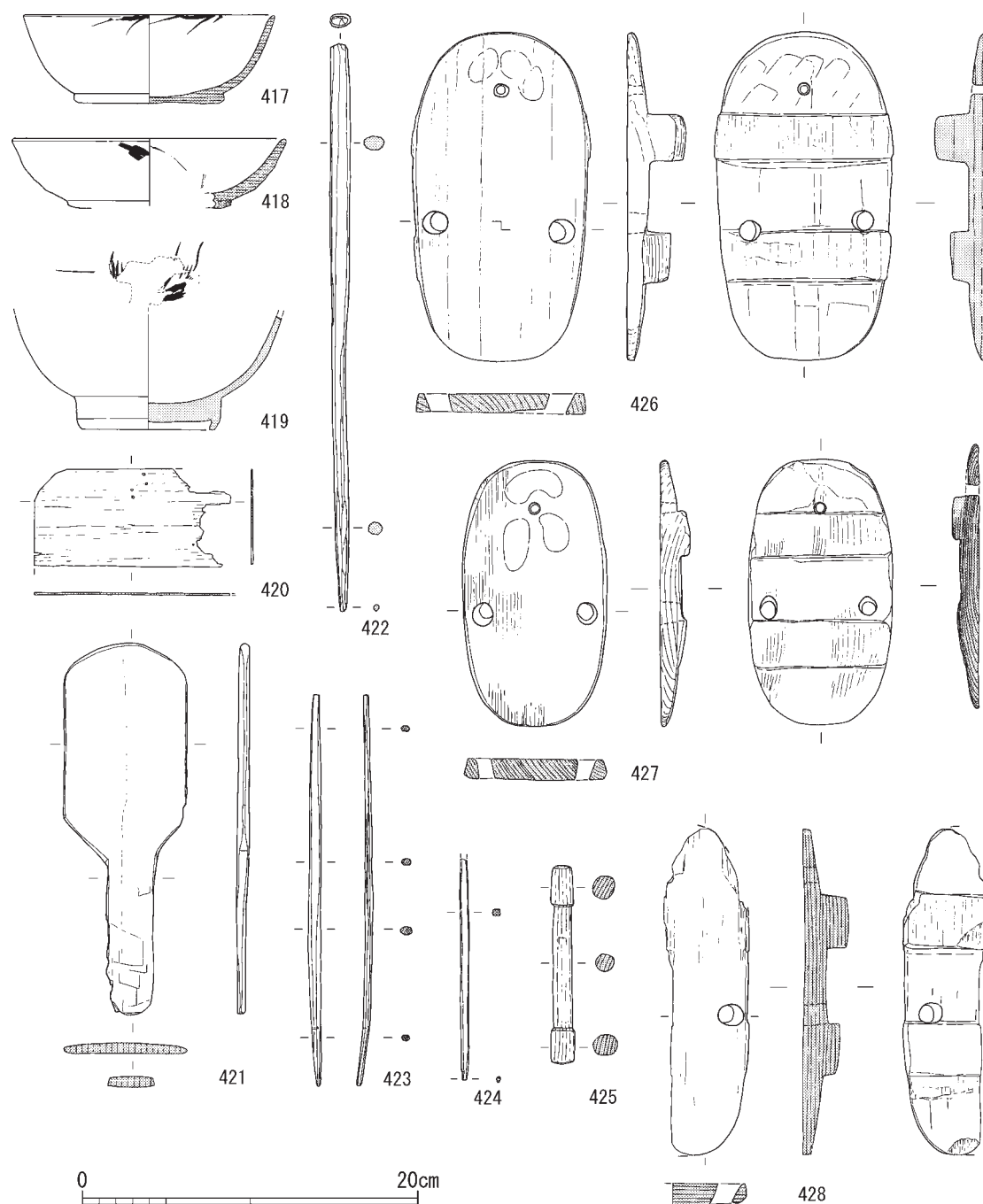
389は青磁椀で、外面に蓮弁文をもつ。390～393は青磁椀で、内面に片刃彫の花文等を施す。以上の青磁椀は、龍泉窯系の13世紀頃の製品とみられる。394は青磁椀で、外面口縁端部に雷文帯をもつ14世紀後半～15世紀頃の龍泉窯系の製品とみられる。395は青磁椀の口縁部、396・397は青磁椀の底部である。398は青磁椀で見込みに印花文をもつ。14世紀後半～15世紀頃の龍泉窯系の製品とみられる。399～401は青磁皿で見込みに「W」字状の櫛描き文をもつ。12世紀後半頃の同安窯系の製品とみられる。402は青磁壺の頸部である。

⑦瓦(第32図) 403は単弁蓮華文軒丸瓦で、中房は無文でわずかに丸く窪む。山崎廃寺関係の7世紀の軒丸瓦YM01と同文である。404は複弁蓮華文軒丸瓦で、外周に鋸歯文が巡る。山崎院関係の8世紀の軒丸瓦YM33aと同文である。405はYM33aの外区外縁を改刻したYM33bと同文である。406は蓮華文軒丸瓦であるが、形式は不明である。407は近世の三巴文軒丸瓦で、表土から出土した。

408・409は重弧文軒平瓦で、7世紀頃のものと考えられる。410は唐草文軒平瓦で、山崎院関係の8世紀の軒平瓦YH22と同文とみられる。411は唐草文軒平瓦で、外区に珠文が無く、唐草文



第32図 第18次後半期調査区出土遺物実測図7(瓦、石製品、金属製品)



第33図 第18次後半期調査区出土遺物実測図8(木製品)

の周囲に圈線が巡る。中世の瓦と考えられる。

412は丸瓦で、凸面に焼成前に文字がヘラ書きされた文字瓦である。文字は判然とはしないが、「里」ともみられる。文字瓦は行基関係の瓦とされ、行基が建立した山崎院に関する資料ともみられている。なお、瓦の型式等については、古閑正浩「橋寺としての山崎廃寺」(『第19回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』2013)を参照した。

⑧石製品・金属製品(第32図) 413は滑石製の長方形を呈する石製品で、2個の円孔を穿ち、円孔の間に沈線を刻む。用途不明である。長さ6cm、幅2.5cm、厚さ1.6cmを測る。414・415は

基石とみられる石製品である。白色を呈する。416は北宋銭の「元豊通寶」である。B区から出土した。(引原茂治)

⑨木製品(第33図) 417～419は漆器碗である。いずれも瓦器碗などを含む中世の包含層から出土している。417は数多くの破片に割れているが、各々の破片から復元すると口径14.6cm、器高5.4cm、高台径8.4cmとなる。口縁端部外面の一部には、朱漆による何らかの加飾がみられる。底部は平らである。418は5片に割れているが、口縁端部が残存する破片から口径16.2cm、器高4cm、高台径9.6cmに復元することができる。外面の一部には、朱漆による加飾がみられる。419は口縁端部が欠損しており、口径および器高は不明であるが、高台径は7.5cmである。全体的に深みのある碗であり、外面に朱漆での施文がみられる。420は板の厚みが0.2cmと薄く、隅部が削られている折敷の底部と考えられる。421は全長22.4cm、最大幅は8.2cm、握部の幅は3.4cmの筥である。筥部は平坦な面とわずかではあるが弧状をなす面に加工されている。この形状は用途と関連すると考えられる。また、筥部と握部の間は、片方が直線状に加工し、他の一方は、丁寧に弧状に削り込んでいる。筥部の形状との関連が想定できる。

422は全長34.2cmの棒状の木製品である。先端はやや尖っており、菜箸などの用途が想定される。423は先端部の一部が欠損しているが、全長23.4cmの箸である。両端がやや先尖状に加工されている。424は、先端部の一部が欠損しているが、全長13.2cmの箸である。比較的荒い削りがみられ、直径が0.5cmであることから、箸以外の用途も考え得る木製品である。425は全長11.7cmを測り、両端から2～2.5cmを直径1.3cmに削り込み、中央部を直径1.1cmに削り込んでいる栓状の木製品である。両端には著しい摩耗痕がみられないことから、それ以外の用途も想定する必要がある。426は全長20cm、幅10.8cmを測る左足用の下駄である。歯がかなり磨り減っており、踏み込み跡が顕著である。また、427は全長15.9cm、幅8.5cmを測る右足用の下駄である。歯がかなり磨り減っており、踏み込み跡が顕著である。428は全長19.6cmを測る下駄である。約50%が欠損している。他の下駄と同様、歯がかなり磨り減っており、踏み込み跡が顕著である。

(小池 寛)

5. まとめ

平成23年度の第17次調査では、桂川堤防の大山崎樋門から約250m西側の地点に設定した1区において、標高約8.2m(現地表下から約3.2m)で多量の中世土器が出土する層位を検出し、平成24年度の第18次調査では、この地点を拡張して調査を実施し、同一層位がさらに南に50m以上にわたって広がることを確認した。調査地は、桂川と大山崎の市街地が最も近接する地点であり、堤防北側の大山崎町域の過去の調査でも大量の遺物が出土している。今回の調査では、古代～中世の遺構は検出していないが、確認した包含層中からは、主に8～10世紀の須恵器や土師器と平城宮系軒丸瓦や陰刻文字瓦、12世紀後半～13世紀前半の土師器・瓦器や墨書をもつ白磁、褐釉などの輸入陶磁器類のほか、漆器碗・下駄・箸などの木製品や人骨および獣骨など多量の遺物が出土した。土器はほとんど摩耗がみられず、完形で出土するものも多くみられることから、近接す



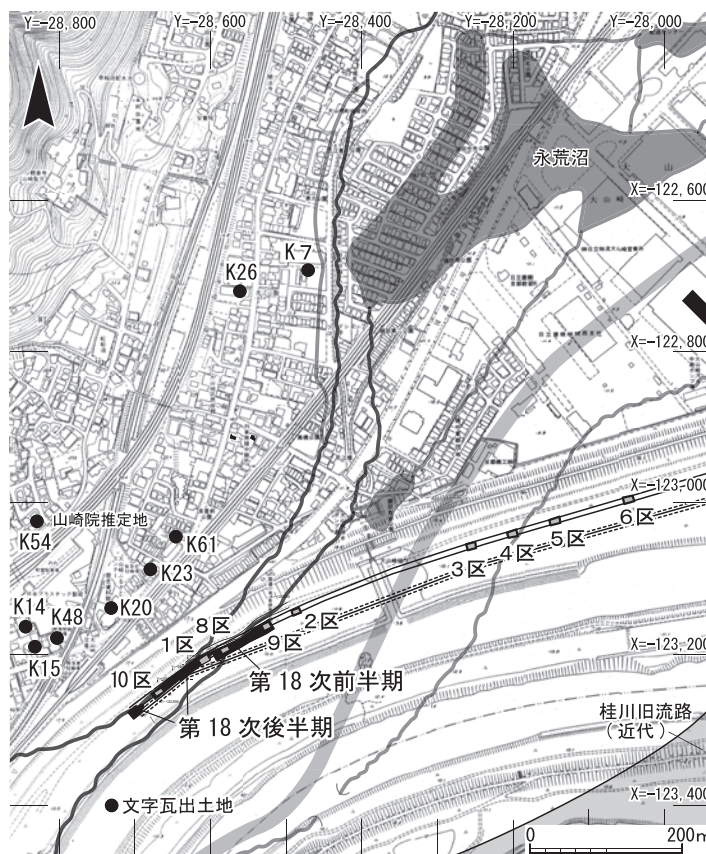
第34図 山崎津跡周辺における調査地位置図(明治22年仮製図合成)

る地点から廃棄され、堆積した状況がうかがえる。土層の堆積状況は、北西方向から南東へ向かって傾斜して流入・堆積したことが明らかで、現小泉川が桂川へ合流するのと同様な方位で流入する流路あるいは小河川が存在したとみられる。かつて調査地北西の堤防北側には永荒沼と呼ばれる湿地帯が広がっていたことが知られるが、山崎津は、こうした湿地帯からいくつも小河川が桂川・淀川本流に流れ込む渦状地形にあり、合流部の川辺一帯が広範囲にわたり船着き場として利用され、全体として港の機能を果たしたと考えられる。^(注5)

調査地周辺は、河川の縁辺にあり土砂の堆積が著しく、中世遺物の包含層も現地表から約3m掘り下げて検出している。第18次後半期調査A区では、包含層の検出面での面積は、深度が深いために約80㎡あまりと極めて限られたものであったが、整理箱50箱以上の大量の土器が集中して出土しており、この周辺が遺跡のなかでも特に重要なエリアになると推定される。過去の調査から調査地周辺は古代から中世には桂川の本流の水際に近く、本来なら激しい水流が生じる地点とみられる。しかしながら、堆積層はシルト層を主体とし、滞水した状況がうかがえることから、一帯は人為的に水流の調整が行われた区域とみることができ、周辺に港(津)に関わる施設があった可能性が高いといえよう。出土した多量の土器群は、こうした港周辺施設および居住区から廃棄されたものとみられる。以上のことから、第17次調査区1区から第18次後半期調査A区の周辺は、古代から中世における山崎津の一角を占める地点であったと推定される。

今回の出土遺物のなかで、特に注目されるのは陰刻文字瓦である。同種の瓦は、行基が開いたとされる49院の一つである和泉市大野寺の土塔から出土することが早くから知られていたが、近年、和泉寺でもこの種の瓦が出土しており、行基が造営に関与した寺院に関わる瓦と考えられて

いる。『行基年譜』によれば、道昭が山崎に架けた橋が橋脚だけを残して朽ちたのち、行基はその半世紀後の神亀2年(725)に山崎橋を架け直し、さらにその6年後の天平3年(731)に山崎院を建立したとされる。山崎橋は対岸の橋本との間に架橋された橋であり、その北方に山崎院があったとされ、その推定地は今回の調査地点の北側の大山崎町市街地に当てられている。大山崎町内では、陰刻文字瓦はすでに10か所以上の地点で出土し、特に山城国府跡第20次調査や同第54次調査ではそれぞれ80点を超える多量の文字瓦が出土しており(第35図)、山崎院の瓦と考え



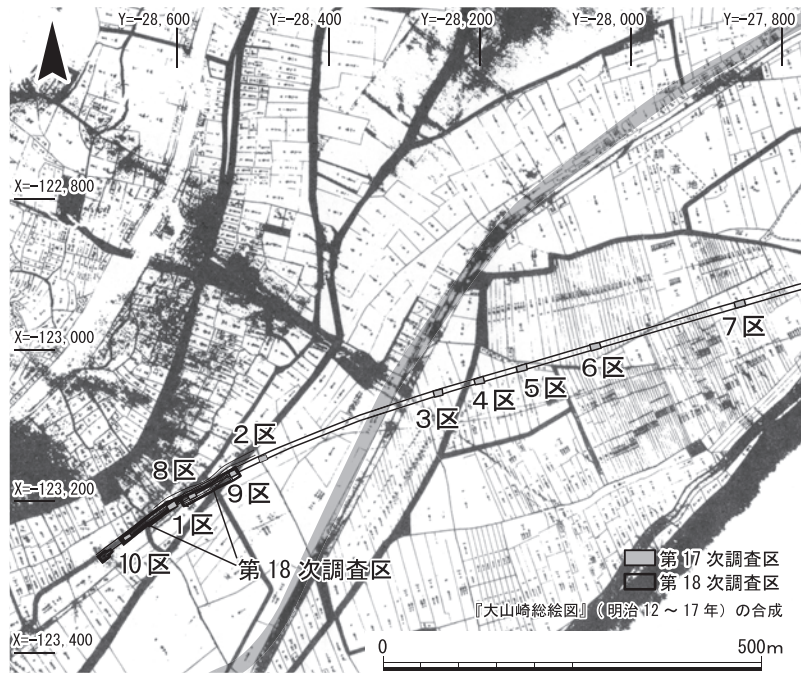
第35図 調査地と陰刻文字瓦出土地点

られている。^(注6)これらの文字瓦は比較的広い範囲で出土しているが、山崎津跡でははじめての出土例であり、今回の調査では、現桂川の水際に近接する地点までその分布が広がることを確認できた。これまでに出土している文字瓦は、いずれも人名が陰刻されたものであり、山崎院造作に協力した人々(知識)の人名と考えられているが、その表記の在り方には、氏姓を明記するもの、名を列挙するもの、名のみを記すものがあり、書様もまた多様であり、様々な立場の人々が同族的・地縁的に統合し、大規模な社会事業としての山崎院の造営に関わったと考えられている。^(注7)今回出土した「由居」や「里」と読むことができる文字瓦も、人名の一部とみられる。特に「由居」のように2文字表記がなされるものについては、僧侶の名が多いとされ、本例もその可能性がある。

今回の調査地では、古代～中世だけでなく近世以降の周辺の土地利用や地勢を知ることができる大きな成果が得られた。第17次調査では、主に大山崎樋門から東の東部調査区において、曲隆や噴砂など地震の影響とみられる層位を確認した。5～7区では、標高約8.5～9 mで、シルト層と砂層が互層状に混じり合う液状化の痕跡がみられ、噴砂を各所で確認した。地震の時期は層位から、文禄5(1596)年に起こった慶長・伏見大地震に起因すると考えられる。一方、東部調査区の5・6区では、東西方向に掘削された幅約2 mの溝状遺構を2条検出した。溝の時期は、出土遺物から18～19世紀と推定される。河川堤防北側で調査された山崎津第15次調査(第11図)では、こうした溝を配した畝状遺構が上下2面で確認されており、溝の主軸も明治12～17年の地籍図等(第36図)にみえる短冊状の長地型地割と対応することが判明している。河川堤防から南側には、

近世には安定した耕作地が広がり、桂川本流は現在の位置よりも八幡市寄りに南下していたとみられ(第35図)、5・6区で検出した溝群も近世以降の耕作地に伴う畝間溝と推定される。

第18次前半期調査地では、その中央で北東から南西へむけて流れる幅約6～7mの大規模な流路を検出した。出土遺物から、この流路は近代まで続くことが判明したが、明治18～22年



第36図 調査地と周辺の地籍図(注4文献より転載・加筆)

の仮製図においても、永荒沼から派生する河川の一つとしてすでに表記されていたものである。検出した流路は、一部に杭列が穿たれ、護岸がなされており、人為的に管理された流路であり、出土遺物から時期は江戸時代後期に遡ると推定される。近世の山崎津の周辺には、こうした川船の遡上も可能な大規模な流路が複数存在し、港湾機能を果たしていたものとみられる。

(小池 寛・高野陽子)

- 注1 石崎善久「山崎津跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成21年度)』 京都府教育委員会) 2010
- 注2 樋管は、明治29(1896)年の淀川改修工事に伴って、洪水時の堤防の内水被害を防止するため明治33・34年に建設された煉瓦造りの構造物である。長らくその存在が忘れられていたが、平成2年の高水敷における工事の際に発見され、近代遺産として報告されている。
(国土交通省近畿地方整備局淀川工事事務所・大山崎町教育委員会『水辺の遺産』 2002)
- 注3 地震痕跡については、寒川旭氏(独立行政法人産業技術総合研究所招聘研究員)から現地でご教示を得た。
- 注4 古閑正浩「山崎津跡第15次調査発掘調査報告」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第26集 大山崎町教育委員会) 2003
- 注5 森浩一「山城の外港、山崎津」(『京都の歴史を足元から探る』[丹後・丹波・乙訓の巻]) 2010
- 注6 林 亨「山城国府跡の発掘-山城国府跡第20次発掘調査略報-」(『大山崎町埋蔵文化財報告書』第7集 大山崎町教育委員会) 1990、林 亨・寺嶋千春ほか「山城国府跡第54次発掘調査報告書」(『大山崎町埋蔵文化財報告書』第25集 大山崎町教育委員会) 2003、古閑正浩「平安京南郊の交通路と路辺」(『日本史研究』551号 日本史研究会) 2008、古閑正浩「橋寺としての山崎廃寺」(『第19回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』) 2013
- 注7 寺嶋千春・吉江崇「3.文字陰刻瓦」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第25集 大山崎町教育委員会) 2003、森浩一前掲注5

陰刻文字瓦を検討した寺嶋千春氏(注6)は、断面に気泡やひずみが多くみられる粗悪品が全体の約3分の1を占めるとしているが、今回の資料はそうしたものに分類される資料である。森浩一氏は、このような瓦であっても土塔を葺くものであれば問題がないとし、山崎院にも大野寺と同様、小規模な土塔があったのではないかと推定している。

付編：自然科学的方法による分析結果

山崎津跡から出土した動物遺存体

山崎 健(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)

1. 出土状況

京都府山崎津跡の第18次調査において、中世の遺物包含層から動物遺存体が出土した。帰属時期は、12世紀後半～13世紀である。動物遺存体が出土した調査区は、中世山崎の街村の河川側にあたる。共伴した遺物はほとんど磨滅しておらず、瓦器の完形品も少なからず出土していることから、出土した動物遺存体は河川による再堆積ではなく、街村の裏庭ないしは近接する河原に投棄されたものと考えられる。なお、同じ包含層からは人骨も出土している。

2. 分析資料および方法

分析資料の保存状態は全般的に良好ではなく、ビビアナイトが析出した資料や歯のみが残存する資料も認められた。同定は、現生骨格標本との比較によりおこない、比較標本には奈良文化財研究所が所蔵する現生骨格標本を用いた。また、計測可能な資料については、Derisch (1976) や茂原(1986)に従い、デジタルノギスを用いて0.01mm単位まで計測をおこなった。

3. 分類群の記載

動物遺存体が合計25点出土した。哺乳類ではウマ、ウシ、イヌ、ネコを同定した。ウマは、臼歯2点、大腿骨骨幹部1点、中手骨骨幹部1点の計4点出土した。ウシは、中足骨が1点出土した。完存しているが、大きな亀裂が入っているため、計測はおこなっていない。ネコは、上腕骨遠位端が1点出土した。遠位端最大幅は19.04mmである。イヌは、頭蓋が1点出土した。計測値は表1に示した。また、動物種は不明であるが、スパイラル剥離を観察できる哺乳類の骨片が認められた。

哺乳類以外では、アカニシとスッポンを同定した。アカニシは破片が多く出土した。殻軸で算定すると8点となる。アカニシは、中世で多く食された貝類の1つである。スッポンは第1肋骨板、第2肋骨板、背甲片の計3点出土した。

表1. イヌ頭蓋の計測値

計測部位 (茂原 1986)	計測値 (mm)
硬口蓋長	79.51
硬口蓋最大幅	56.57
上顎第3小臼歯 近遠心径	4.22
上顎第3小臼歯 頬舌径	9.35
上顎第4小臼歯 最大長	16.42
上顎第4小臼歯 外側長	15.51
上顎第4小臼歯 頬舌径	6.44
上顎第1大臼歯 近遠心径	11.34
上顎第1大臼歯 頬舌径	12.36
上顎第2大臼歯 頬舌径	8.36
上顎歯 全歯列長	79.60
上顎歯 頬歯列長	69.70
上顎歯 小臼歯列長	39.97
上顎歯 臼歯列長	52.72
上顎歯 大臼歯列長	15.12
上顎歯 犬歯部長	16.49

4. 考察

山崎津跡から出土した動物遺存体は、ウシ、ウマ、イヌ、ネコと家畜種が多く出土していたことが特徴的である。また、アカニシやスッポンは食用とされた可能性が高い。スパイラル剥離を観察できる哺乳類種不明の骨片があるため、骨髓も利用されていたと推測される。

以上より、中世山崎では、街村の裏庭(河原)に、飼育した家畜種や食料残滓を投棄していたものと考えられる。なお、中世前期には、河原や道路に人の死体を遺棄することは一般的であった(勝田1987、2003)。同じ包含層からは動物骨とともに人骨も出土しているため、こうした家畜種も同じように遺棄された可能性も想定できる。共伴遺物、人骨の出土状況や所見などを検討した上で、総合的に判断する必要がある。

また、山崎津跡に近接する木津川河床遺跡の第21次調査では、今回の資料群と同時期のウシやウマの骨がまとまって多量に出土しており、解体処理された牛馬の残滓と推測される(京都府埋蔵文化財調査研究センター2011、動物遺存体については丸山真史氏のご教示を得た)。山崎津跡と木津川河床遺跡において、動物遺存体の様相が明確に異なることから、近接する両遺跡でおこなわれた動物利用の違いが反映されたものと考えられる。

引用文献

勝田至(1987)「中世民衆の墓制と死穢—特に死体遺棄について—」『史林』70-3

勝田至(2003)『死体たちの中世』吉川弘文館

京都府埋蔵文化財調査研究センター(2011)『木津川河床遺跡第20・21次』京都府遺跡調査報告書第145
- 2

茂原信生(1986)『東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』東京大学総合研究資料館標本資料報告 第13号

Driesch, A. (1976) A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1.

表2. 山崎津跡から出土した動物遺存体

地区名	調査区	遺構・層位	大分類	種名	部位(癒合)	左右	点数
7YYM	e区	灰色砂礫	貝類	アカニシ	殻軸		4
			哺乳類	ウマ	中手骨 骨幹部	左	1
				不明	部位不明 骨幹部	不明	1
	f区	灰色砂礫	貝類	アカニシ	殻軸		2
			哺乳類	ウシ	中足骨 完存(癒合)	右	1
	g区	暗灰色粘砂	貝類	アカニシ	殻軸		2
			爬虫類	スッポン	第1肋骨板	左	1
					第2肋骨板	左	1
					背甲	不明	1
			哺乳類	イヌ	頭蓋骨		1
				ネコ	上腕骨 遠位端(癒合)	右	1
				ウシ/ウマ	肋骨 骨幹部	不明	1
				不明	部位不明 骨幹部	不明	3
	大山崎堤下	灰褐色砂礫	哺乳類	ウマ	臼歯		2
	南西部断割	暗灰色粘砂	哺乳類	ウマ	大腿骨 骨幹部	右	1
				ウシ/ウマ	大腿骨 遠位端内側類	右	1
		灰色粘質土	哺乳類	ウシ/ウマ	脛骨 骨幹部	左	1

版 圖



(1) 第17次調査地近景(北東から)



(2) 第17次調査地近景(南西から)



(1) 第17次 1 区遠景(西から)



(2) 第17次 1 区調査前全景
(北東から)



(3) 第17次 1 区全景(南西から)

(1) 第17次 1 区北西壁堆積状況
(南東から)



(2) 第17次 1 区下層堆積状況
(西から)



(3) 第17次 1 区下層瓦器碗43
出土状況





(1) 第17次 3 区全景(南西から)



(2) 第17次 3 区西壁堆積状況
(西から)



(3) 第17次 4 区全景(南西から)

(1) 第17次 4 区北東壁堆積状況
(南西から)



(2) 第17次 4 区南東壁堆積状況
(北西から)



(3) 第17次 5 区北東壁堆積状況
(南西から)





(1) 第17次 5区北東壁堆積状況
(南西から)



(2) 第17次 5区南東壁堆積状況
(北西から)



(3) 第17次 5区北西壁堆積状況
(南から)

(1) 第17次 5 区北西壁噴砂検出状況
(南東から)



(2) 第17次 6 区全景 (南西から)



(3) 第17次 6 区南東壁堆積状況
(北西から)





(1) 第17次 7区南東壁堆積状況
(北西から)



(2) 第17次 7区北東壁堆積状況
(南西から)



(3) 第17次 7区北東壁噴砂検出状況
(南西から)



(1) 第17次 8 区全景(東から)



(2) 第17次 8 区北西壁堆積状況
(南東から)



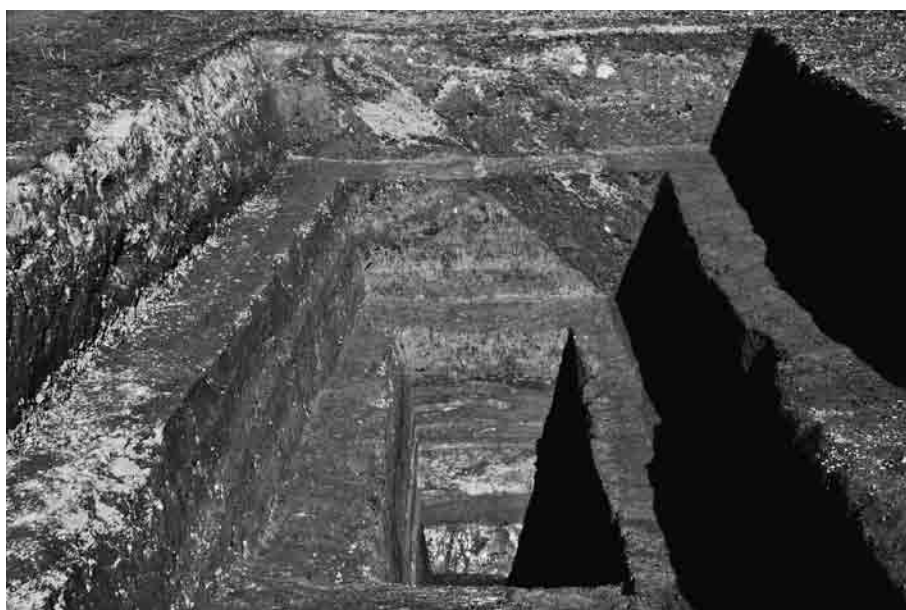
(3) 第17次 8 区南西壁堆積状況
(北東から)



(1) 第17次 9 区全景 (北東から)



(2) 第17次 9 区南西壁堆積状況
(北東から)



(3) 第17次 10 区全景 (南西から)

(1) 第18次調査地遠景(北東から)



(2) 第18次調査前全景(東から)



(3) 第18次前半期調査流路堆積状況
(西から)





(1) 第18次前半期調査流路護岸杭
検出状況(西から)



(2) 第18次前半期調査流路護岸杭
検出状況(南西から)



(3) 第18次後半期調査A区完掘状況
(北東から)



(1) 第18次後半期調査A区完掘状況
(南西から)



(2) 第18次後半期調査A区南東壁
堆積状況(北から)



(3) 第18次後半期調査A区南東壁
堆積状況(北西から)



(1) 第18次後半期調査A区北西壁
堆積状況(南東から)



(2) 第18次後半期調査B区全景
(北東から)



(3) 第18次後半期調査B区北西壁
堆積状況(南東から)



(1) 第18次後半期調査A区瓦器碗217出土状況



(2) 第18次後半期調査A区瓦器碗225出土状況



(3) 第18次後半期調査A区瓦器碗212出土状況



(4) 第18次後半期調査A区瓦器碗220出土状況



(5) 第18次後半期調査A区瓦器碗出土状況



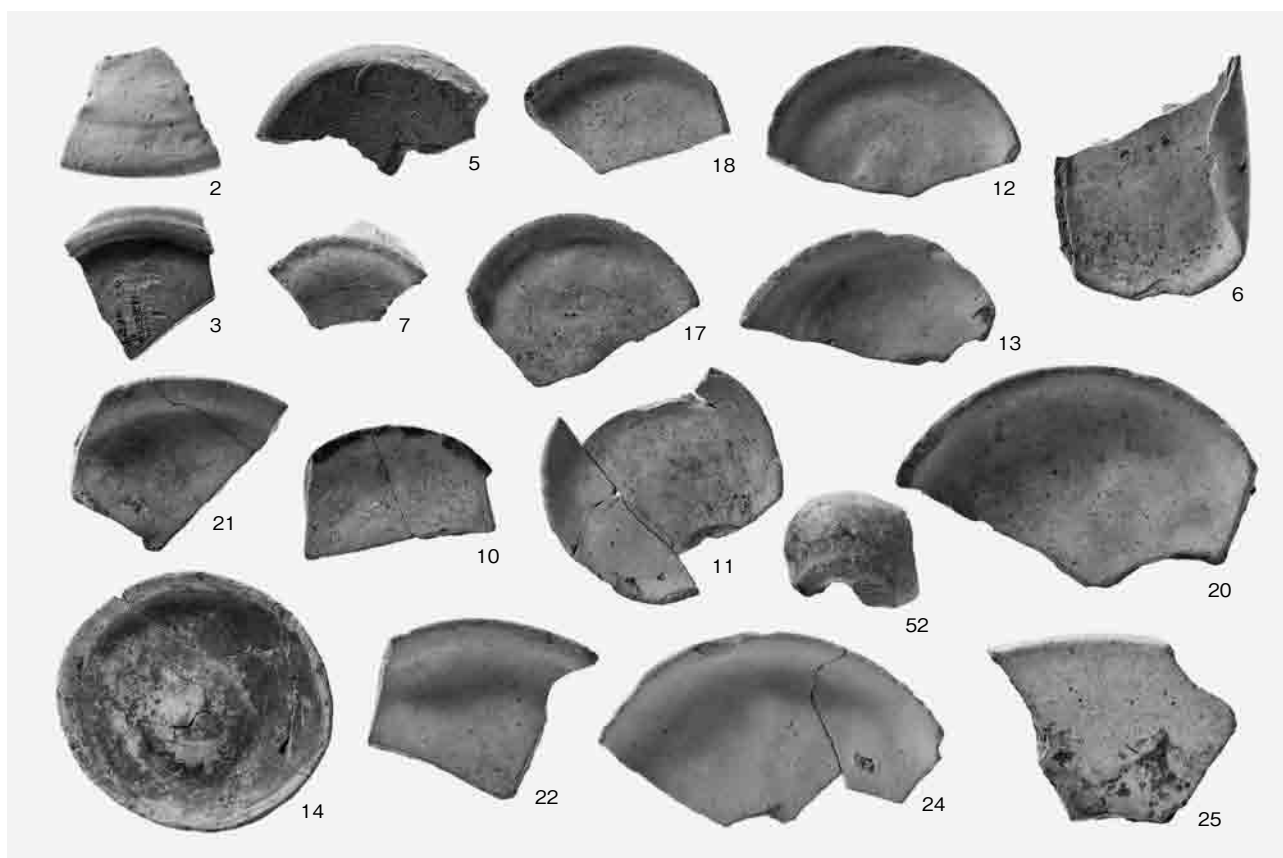
(6) 第18次後半期調査A区瓦器碗出土状況



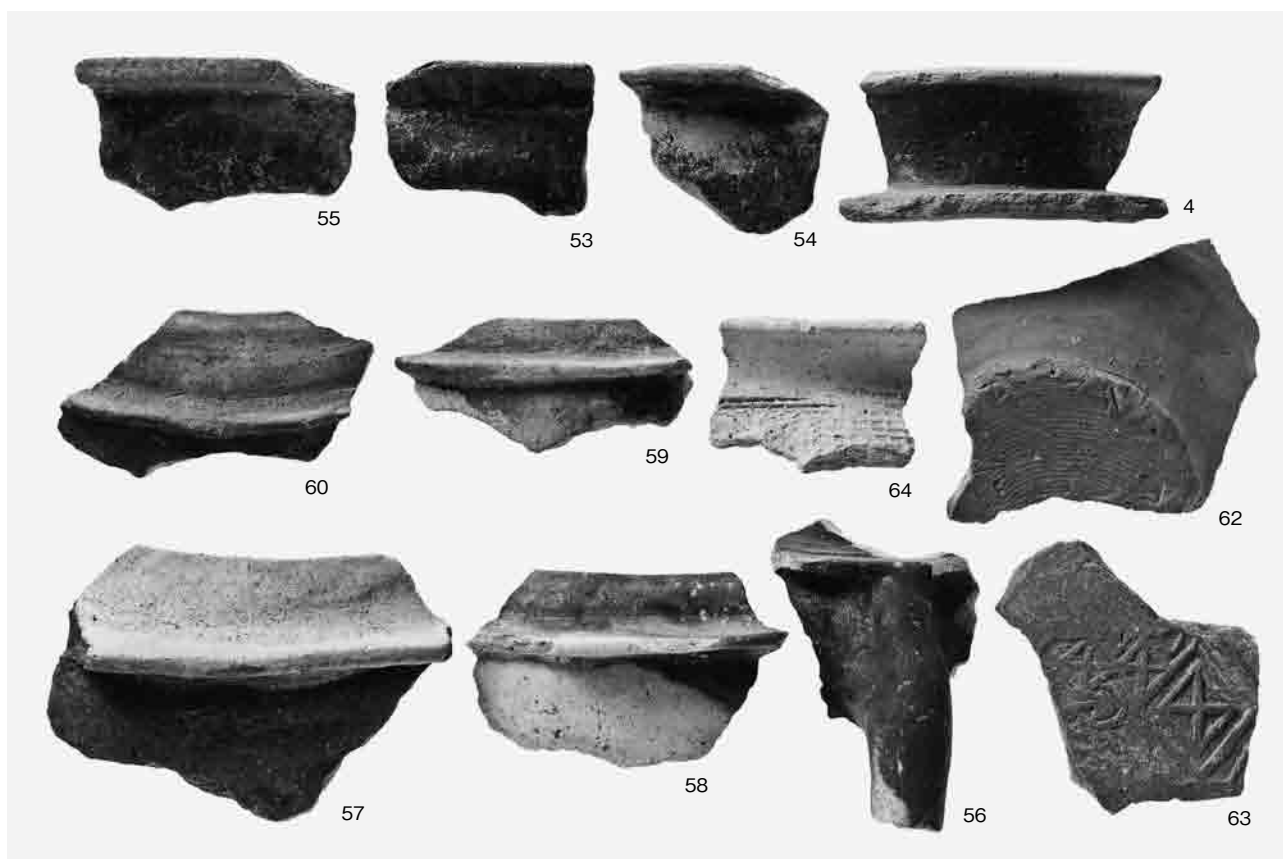
(7) 第18次後半期調査A区土師器皿165出土状況



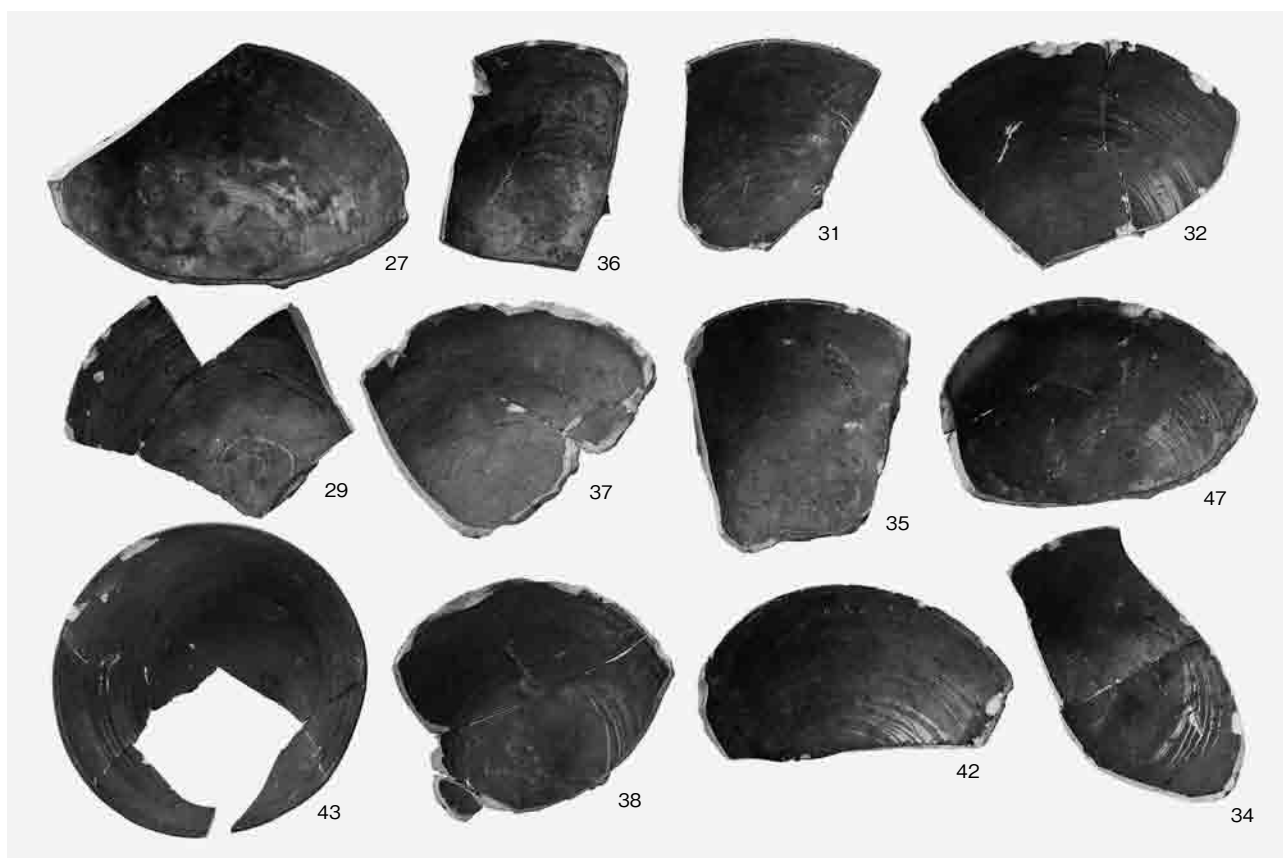
(8) 第18次後半期調査A区下駄426出土状況



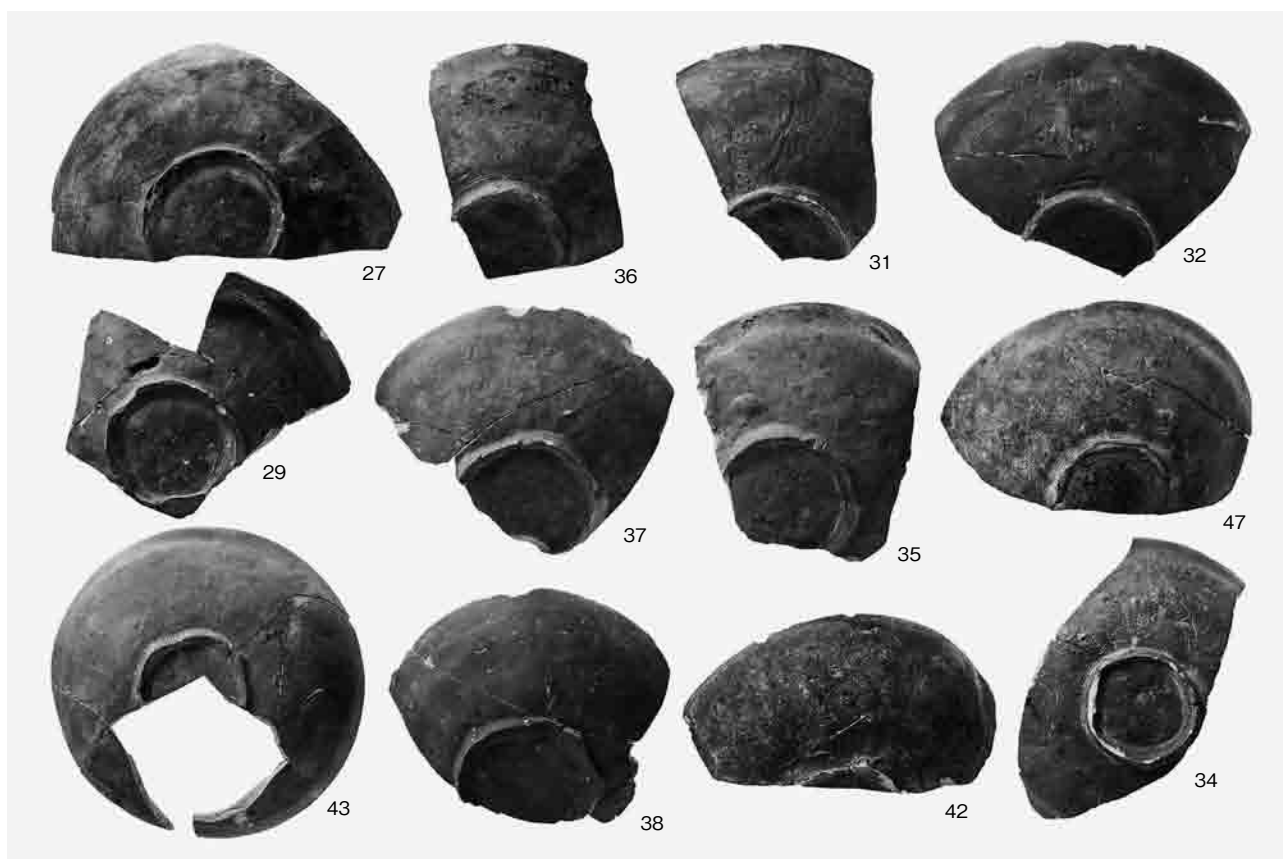
(1) 第17次出土遺物 1



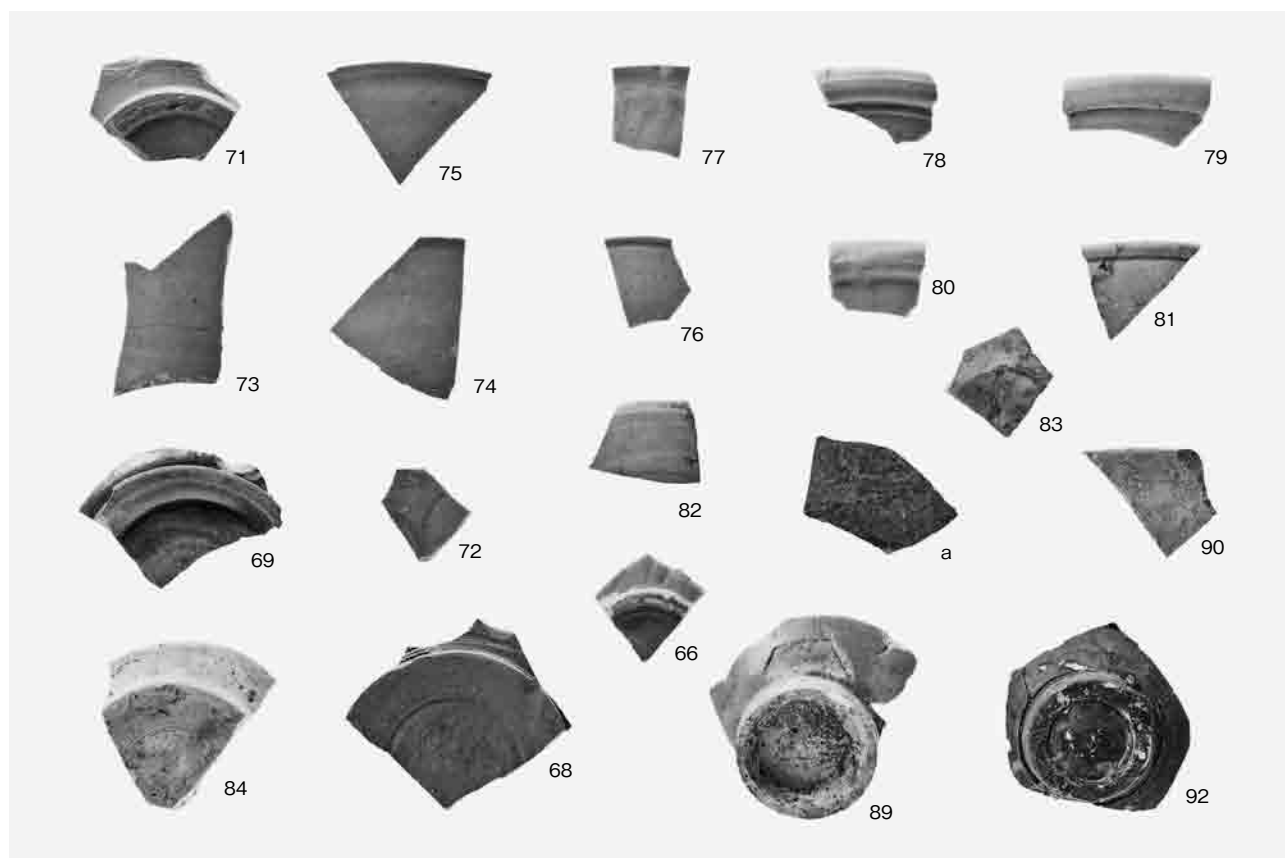
(2) 第17次出土遺物 2



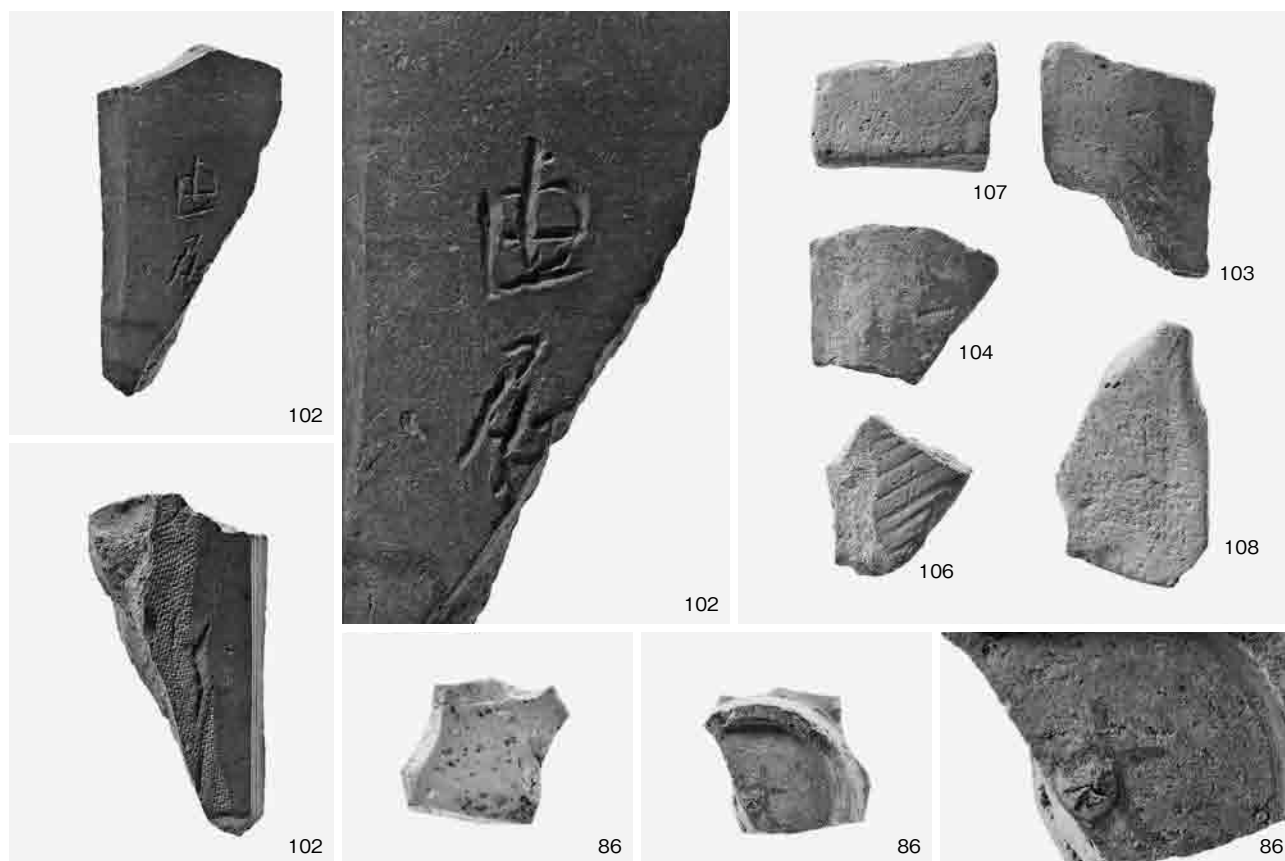
(1) 第17次出土遺物 3 (内面)



(2) 第17次出土遺物 3 (外面)

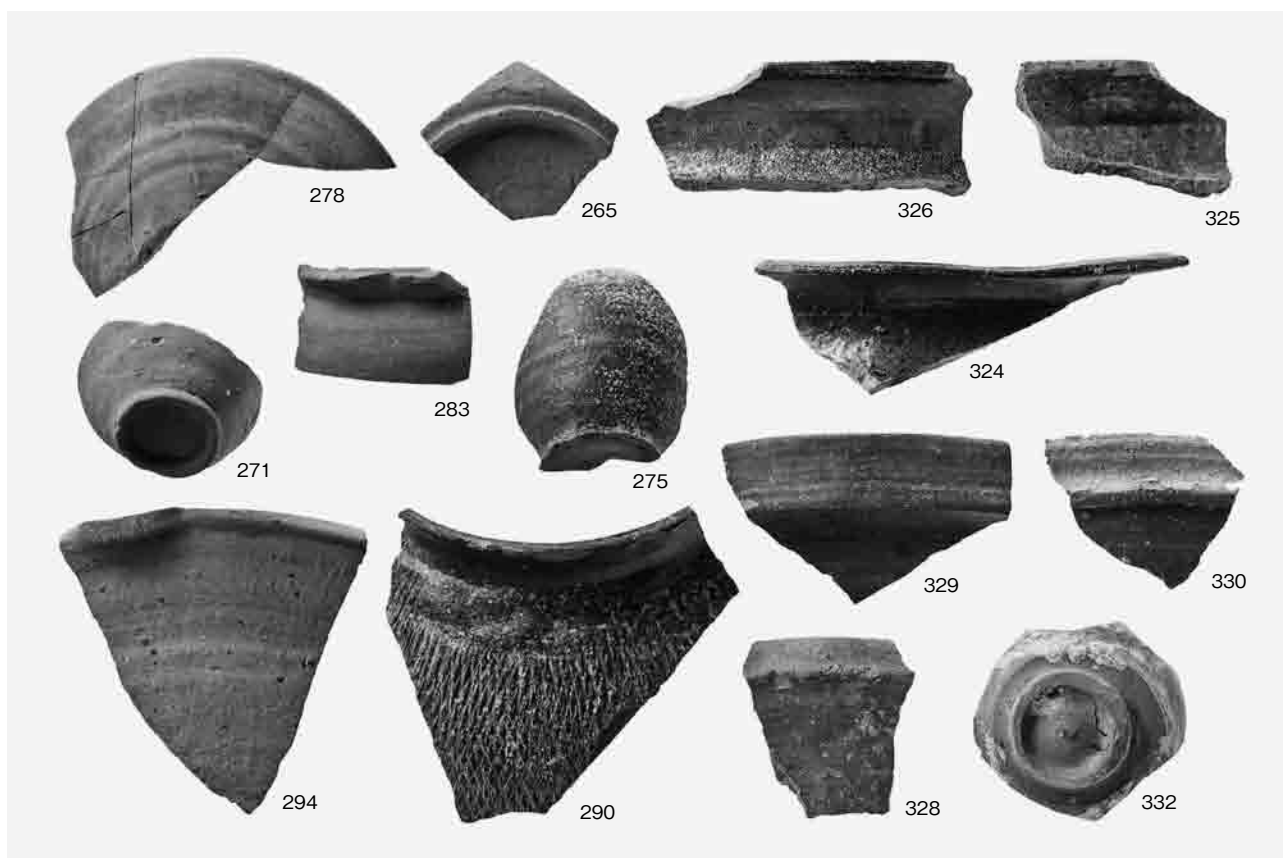


(1) 第17次出土遺物 4

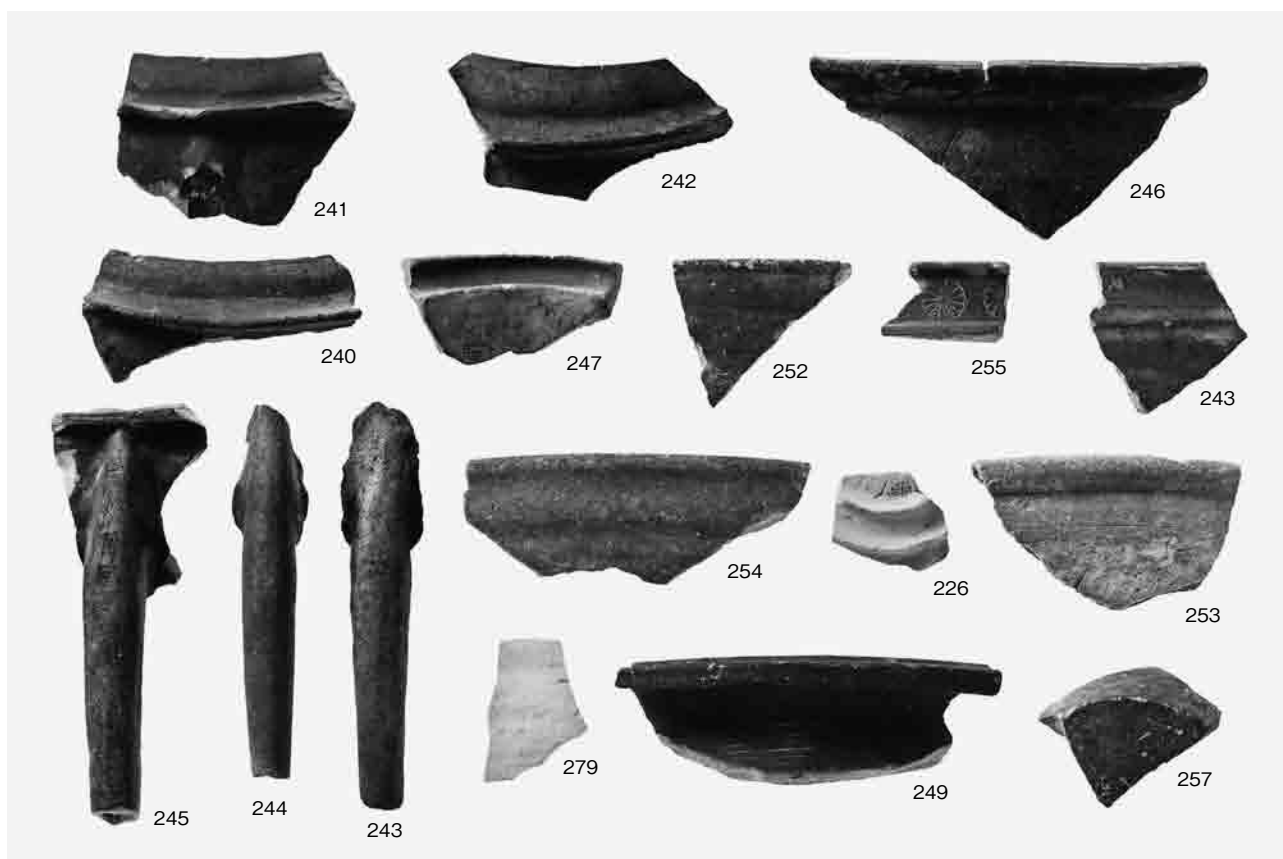


(2) 第17次出土遺物 5

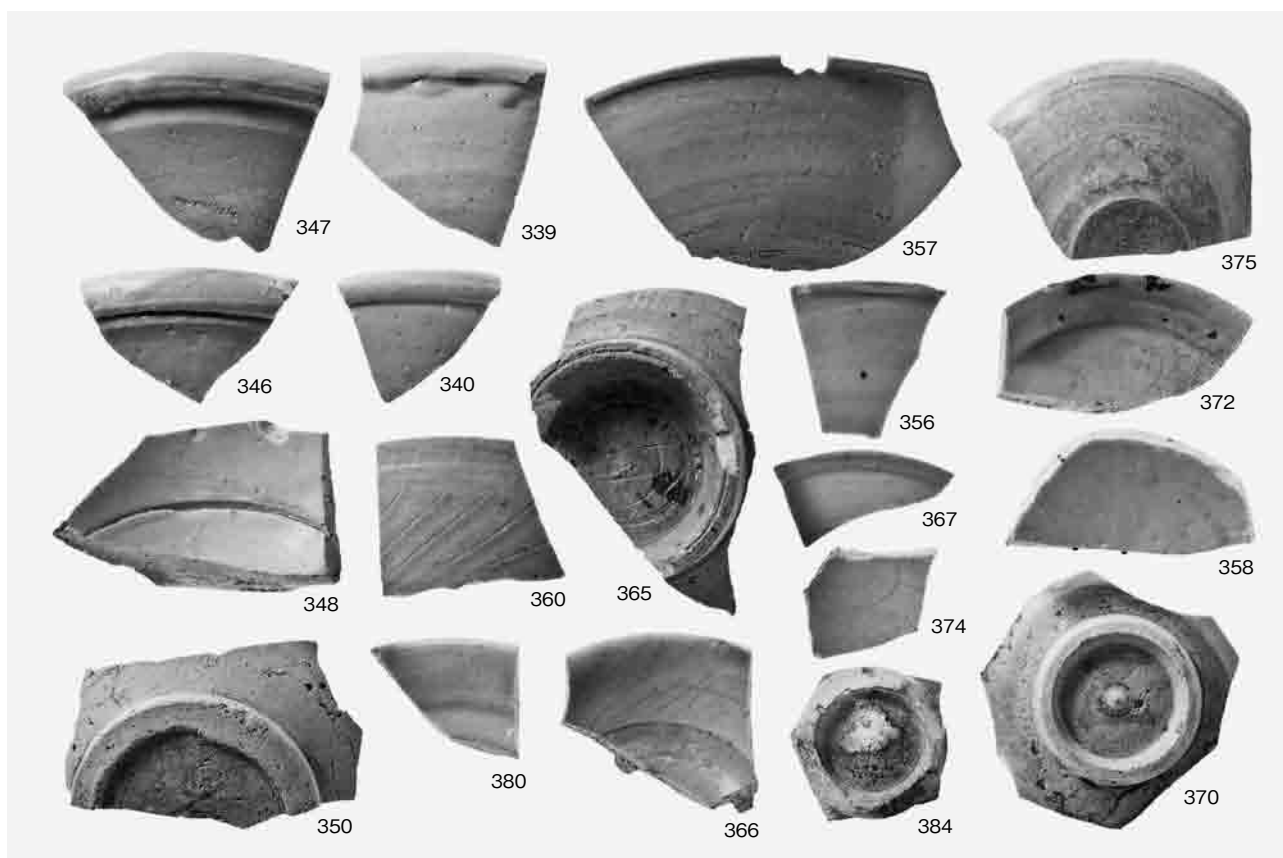




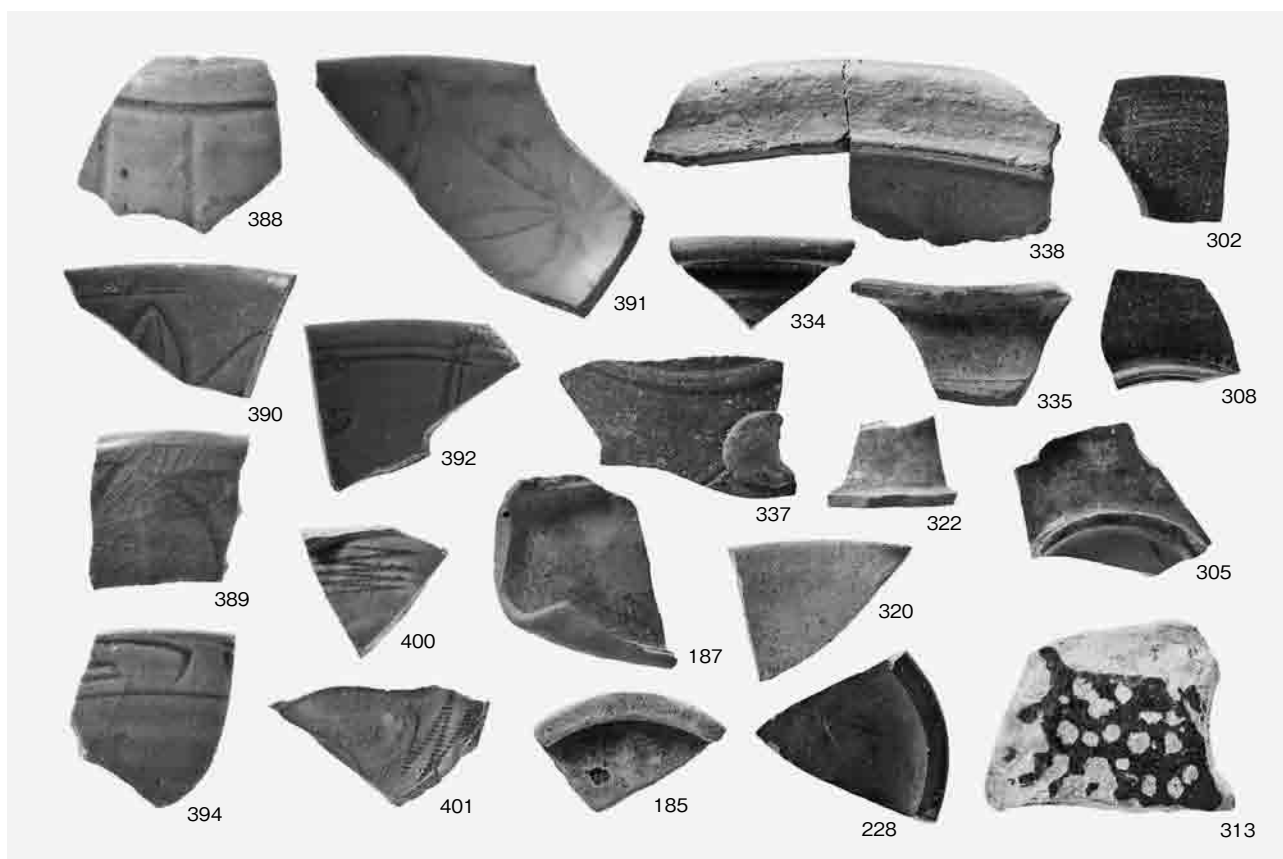
(1) 第18次出土遺物 2



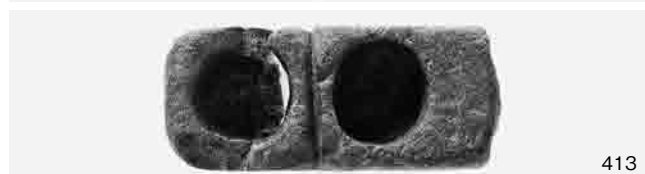
(2) 第18次出土遺物 3

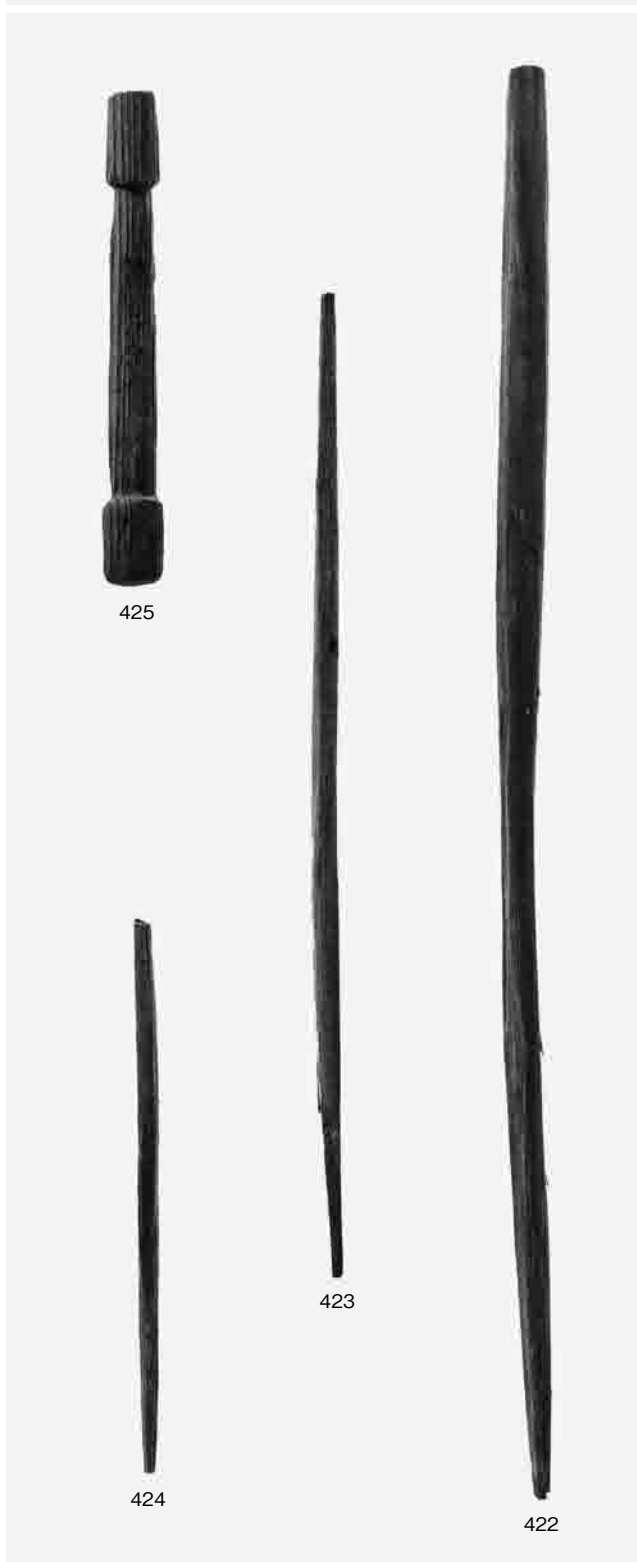
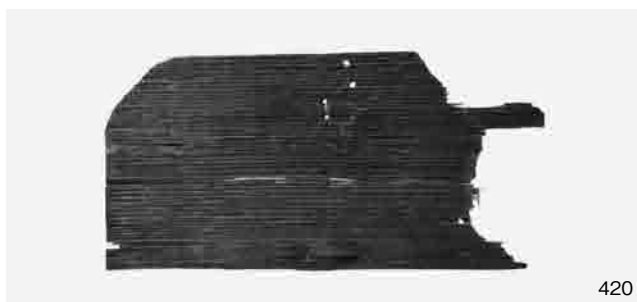


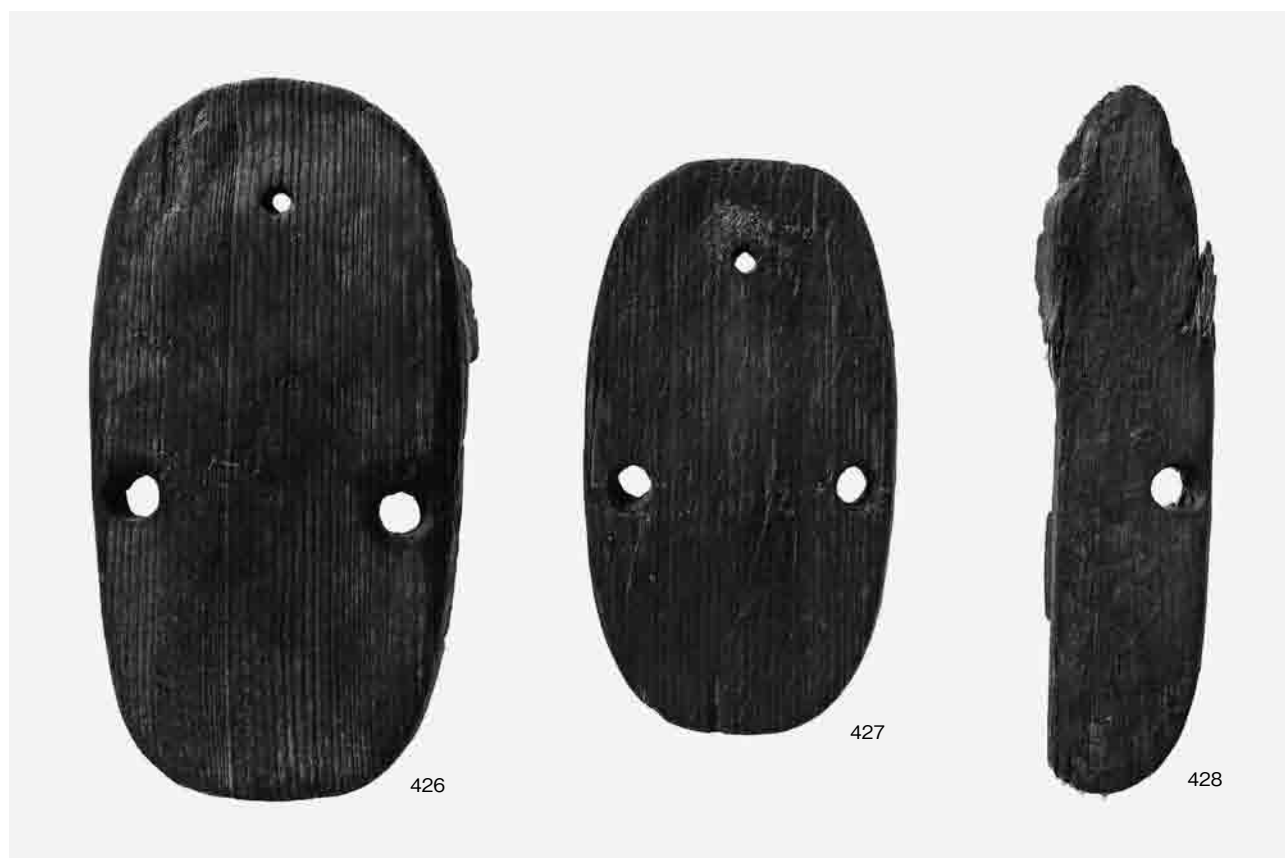
(1) 第18次出土遺物 4



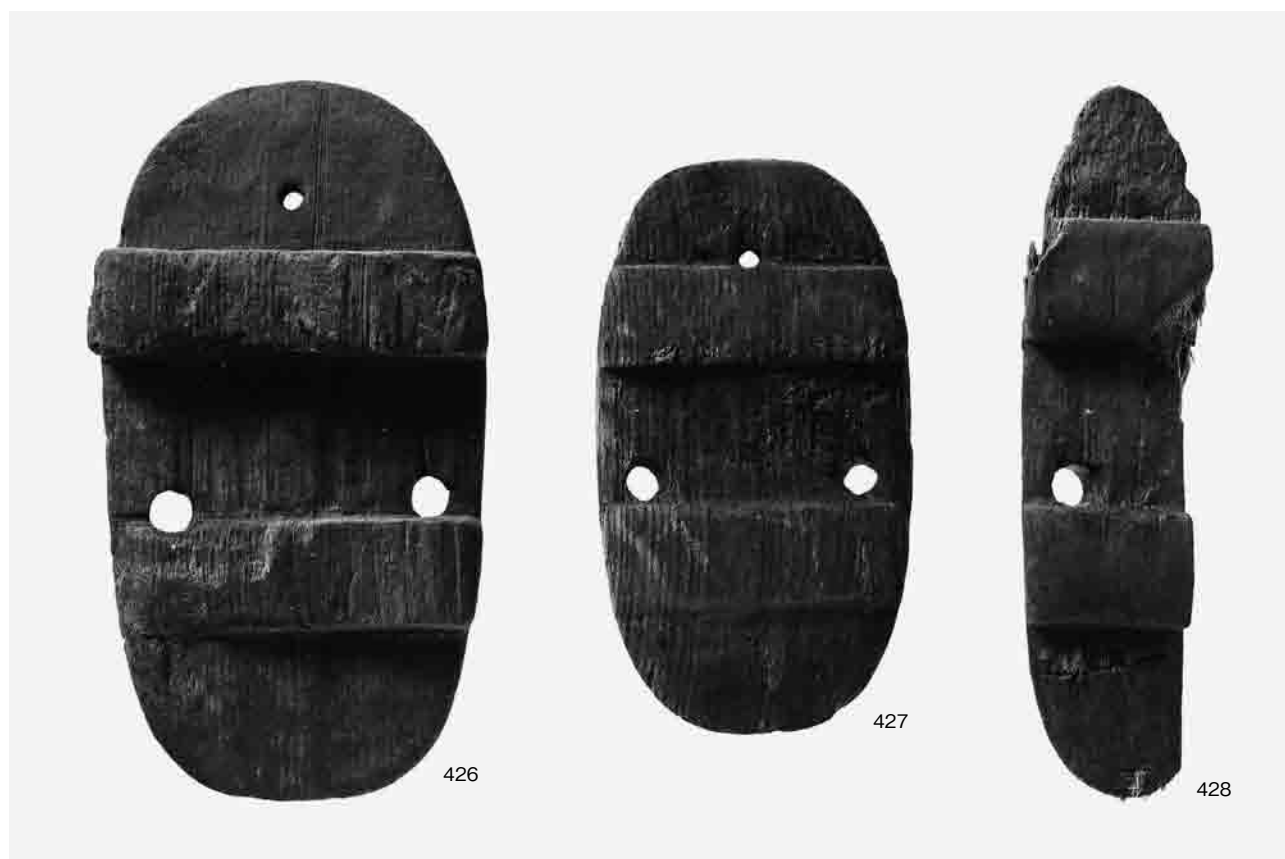
(2) 第18次出土遺物 5







(1) 第18次出土遺物 8 (表)



(2) 第18次出土遺物 8 (裏)